

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第338集

向中野館跡第3次・小幅遺跡第10次発掘調査報告書

盛岡南新都市開発整備事業関連遺跡発掘調査



助成岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター
盛 岡 市

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第338集

向中野館跡第3次・小幅遺跡第10次発掘調査報告書

盛岡南新都市開発整備事業関連遺跡発掘調査

序

岩手県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しており、平成10年度の岩手県教育委員会のまとめでは10,500箇所を超えております。先人たちの残した文化財を保護し、保存していくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました盛岡南新都市開発整備事業を例にあげるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活をおくるために地域開発もまた県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発事業という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的な課題となっております。

当財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す処置をとってまいりました。

本書は、盛岡市による盛岡南新都市開発整備事業に関連した、向中野館第3次・小幅遺跡第10次調査の発掘調査結果をまとめたものであります。遺跡は、いずれも零石川右岸の河岸段丘上に立地し、向中野館跡は、平安の集落跡及び中世の館跡、小幅遺跡は平安の集落跡が確認されています。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力と御援助を賜りました盛岡市開発部盛南開発課や盛岡市教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関・関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成11年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 船 越 昭 治

例　　言

1. 本報告書は、岩手県盛岡市飯岡新田2地割124-1ほかに所在する向中野館跡第3次および岩手県盛岡市本宮字小幡88-1ほかに所在する小幅遺跡第10次調査の発掘調査の結果を収録したものである。

2. 本遺跡の岩手県遺跡登録台帳の遺跡番号と調査略号は次のとおりである。

向中野館跡第3次調査　LE 26-0205・OMN-98-03

小幅遺跡第10次調査　LE 16-2009・OKH-98-10

3. 本遺跡の調査は、盛岡南新都市土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会事務局文化課の調整を経て、盛岡市の委託を受けた財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

4. 野外調査の期間と調査面積・調査担当者は次のとおりである。

向中野館跡第3次調査　発掘調査期間　平成10年5月19日～8月7日

室内整理期間　平成10年12月1日～1月31日

発掘調査面積　2,944m²

調査担当者　溜 浩二郎・山口俊規

小幅遺跡第10次調査　発掘調査期間　平成10年8月17日～10月6日

室内整理期間　平成11年2月1日～3月31日

発掘調査面積　529m²

調査担当者　溜 浩二郎・山口俊規

5. 座標原点の測量および空中写真撮影は、次の機関に委託した。

座標原点の測量——吉田測量設計

空中写真撮影——東邦航空株式会社

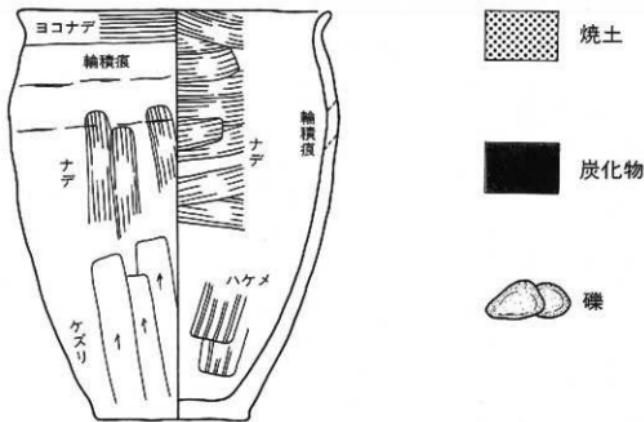
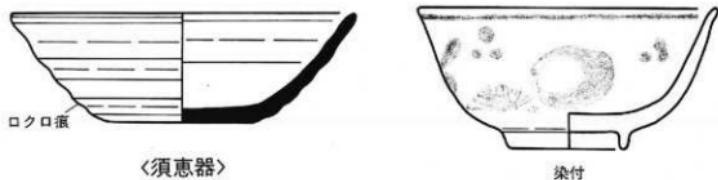
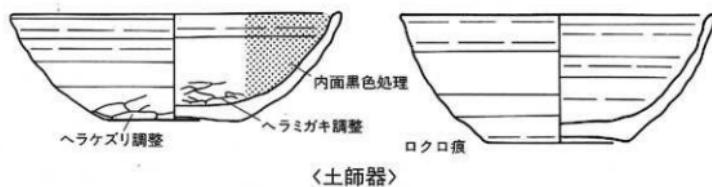
6. 本報告書の執筆は溜 浩二郎が担当した。

7. 発掘調査において次の機関の協力を得た。

盛岡市開発部盛南開発課・盛岡市教育委員会

8. 本遺跡の調査に関わる記録、遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

9. 実測図の凡例は次頁に記載した。



凡例図

[本文目次]

序

例言

I. 調査に至る経過	2
II. 遺跡の立地と環境	2
1. 地形と地質	2
2. 周辺の遺跡	7
III. 野外調査と整理方法	10
1. 野外調査	10
2. 室内整理	10
IV. 向中野館跡第3次調査	13
1. 遺跡の立地	14
2. 基本土層	14
3. 検出された遺構と出土遺物	14
(1)堅穴住居跡〈RA〉	14
(2)土坑・陥し穴状遺構〈RD〉	27
(3)堅穴状遺構〈RE〉	29
(4)溝状遺構・堀跡〈RG〉	30
(5)柱穴群〈RZ〉	34
4. 遺構外出土遺物	46
5. まとめ	52
(1)遺構	52
(2)遺物	54
(3)おわりに	56
V. 小幡遺跡第10次調査	83
1. 遺跡の立地	84
2. 基本土層	84
3. 検出された遺構と出土遺物	84
(1)堅穴住居跡〈RA〉	84
(2)溝状遺構〈RG〉	91
(3)柱穴群〈RZ〉	91
4. 遺構外出土遺物	101
5. まとめ	105
(1)遺構	105
(2)遺物	106
(3)おわりに	108

[図版目次]

第1図 遺跡位置図	1	第4図 周辺の遺跡分布図	9
第2図 遺跡周辺の地形分類図	4	第5図 グリッド配置図	12
第3図 周辺の地形図	5・6		

〈向中野館跡第3次調査〉

第1図 基本土層	14	第15図 R E 01	30
第2図 遺構配置図	15・16	第16図 R G 01~05	33・34
第3図 R A 01	17	第17図 R G 06・07(断面図)	35
第4図 R A 02	18	第18図 R Z 01	37・38
第5図 R A 03	19	第19図 遺構内出土遺物(R A 01~03)	39
第6図 R A 04	20	第20図 遺構内出土遺物(R A 03~05)	40
第7図 R A 05	21	第21図 遺構内出土遺物(R A 07~09)	41
第8図 R A 07	22	第22図 遺構内出土遺物(R A 10・12, R D 01	
第9図 R A 08・R A 10	24	−03・05)	42
第10図 R A 09	25	第23図 遺構内出土遺物(R D 05~08, R G 01)	43
第11図 R A 12	26	第24図 遺構内出土遺物(R G 02・03)	44
第12図 R A 12(断面図)	27	第25図 遺構内出土遺物(R G 04~07)	45
第13図 R D 01~06	28	第26図 遺構外出土遺物	47
第14図 R D 07~09	29		

〈小幅遺跡第10次調査〉

第1図 基本土層	84	第10図 遺構配置図	95
第2図 R A 019	85	第11図 遺構内出土遺物(R A 019)	96
第3図 R A 020	87	第12図 遺構内出土遺物(R A 019・020)	97
第4図 R A 021	88	第13図 遺構内出土遺物(R A 020)	98
第5図 R A 021(断面図)	89	第14図 遺構内出土遺物(R A 020・021)	99
第6図 R A 025	90	第15図 遺構内出土遺物(R A 021)	100
第7図 R A 025(断面図)	91	第16図 遺構内出土遺物(R A 025, R G 088)	101
第8図 R G 088	92	第17図 遺構外出土遺物	102
第9図 R Z 018	93・94	第18図 壱形土器分布図	107

[写真図版]

〈向野館跡第3次調査〉

写真図版1	空中写真(1)	58	写真図版14	R D05～R D09.....	71
写真図版2	遺跡近景・基本土層.....	59	写真図版15	R D08・09、R E01.....	72
写真図版3	R A01.....	60	写真図版16	R G01・03・04.....	73
写真図版4	R A02.....	61	写真図版17	R G06.....	74
写真図版5	R A03.....	62	写真図版18	R G06.....	75
写真図版6	R A04.....	63	写真図版19	R G07・08.....	76
写真図版7	R A05.....	64	写真図版20	遺構内出土遺物.....	77
写真図版8	R A07.....	65	写真図版21	遺構内出土遺物.....	78
写真図版9	R A08.....	66	写真図版22	遺構内出土遺物.....	79
写真図版10	R A09.....	67	写真図版23	遺構内出土遺物.....	80
写真図版11	R A10.....	68	写真図版24	遺構内出土遺物.....	81
写真図版12	R A12.....	69	写真図版25	遺構外出土遺物.....	82
写真図版13	R D01～R D04.....	70			

〈小幅遺跡第10次調査〉

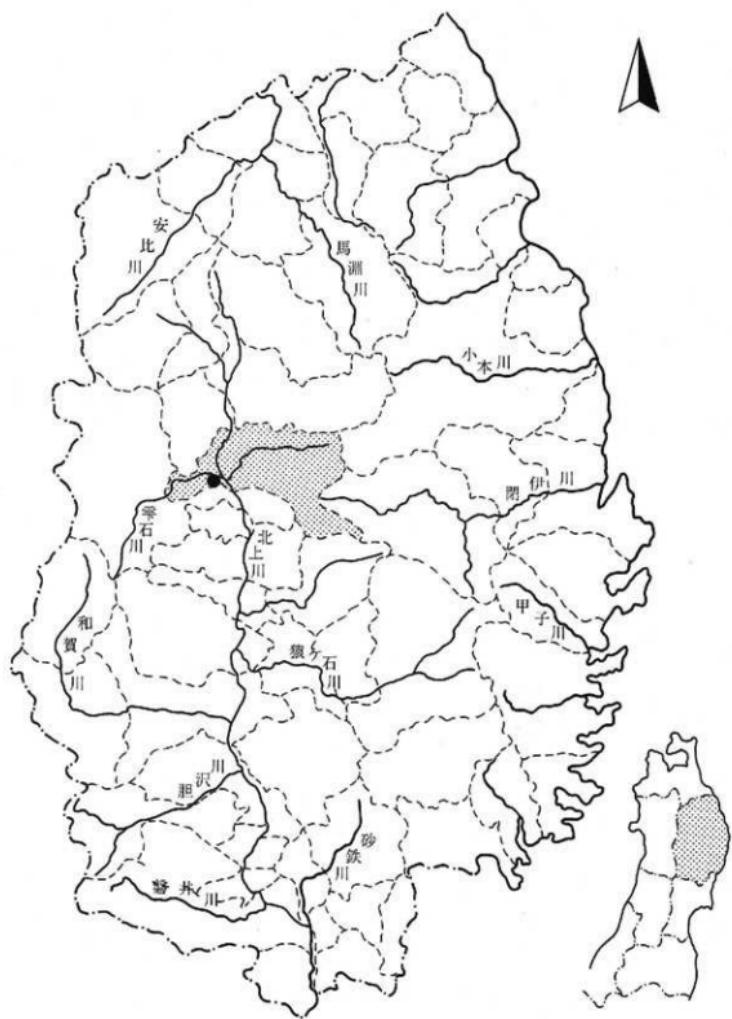
写真図版1	空中写真.....	110	写真図版9	R G088.....	118
写真図版2	遺跡近景・基本土層.....	111	写真図版10	遺構内出土遺物(R A019).....	119
写真図版3	R A019.....	112	写真図版11	遺構内出土遺物(R A019・020).....	120
写真図版4	R A019.....	113	写真図版12	遺構内出土遺物(R A020).....	121
写真図版5	R A020.....	114	写真図版13	遺構内出土遺物(R A021).....	122
写真図版6	R A021.....	115	写真図版14	遺構内(R A025・R G088)、 遺構外出七遺物.....	123
写真図版7	R A021.....	116			
写真図版8	R A025.....	117			

小幅遺跡第10次・11次調査の遺構名変更とその経緯について

小幅遺跡第10次・第11次発掘調査は当初、第8次・9次調査として、第7次調査の遺構名の統合番号を使用し、報告書の作成を行っていたが、遺跡全体を総括する盛岡市教育委員会が同時期に行なった小幅遺跡の発掘調査を第8次・第9次とするため、今回、県埋文が小幅遺跡第8次・第9次発掘調査としたものを、小幅遺跡第10次・第11次発掘調査と変更するよう要請され、これに従い遺構名を第7次調査の遺構名の続きではなく、第9次調査の統合番号に変更するよう依頼されたが、発刊作業途中にあり、本文・図版に記載されたすべての遺構名の変更是不可能な状況であったため、本文中では、当初から使用していた遺構名を記載し、これと変更後の新登録名との対応表を下記のとおり作成した。

(尚、遺構名の変更に伴って、報告書に記載された本文や図版の内容に一切変更はない。)

記載番号	新登録名	記載番号	新登録名	記載番号	新登録名
R A019 → R A032	R D227 → R D343	R G087 → R G128			
R A020 → R A033	R D228 → R D344	R G088 → R G129			
R A021 → R A034	R D229 → R D345	R G089 → R G130			
R A022 → R A035	R D230 → R D346	R Z017 → R Z021			
R A023 → R A036	R D231 → R D347	R Z018 → R Z022			
R A024 → R A037					
R A025 → R A038					



第1図 遺跡位置図

I. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発整備事業は、盛岡市がきたるべき21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた輪状都市を形成するために策定された土地区画整備事業である。

この事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が、地域振興整備公団に対して事業要請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積313haを対象とした土地区画整備事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱いについても協議が重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、本調査を必要とする範囲を確定し、本調査は財團法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることになった。

当遺跡については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成10年度の事業とすることが確定し、岩手県教育委員会と盛岡市と（財）岩手県文化振興事業団の両者に通知され、これを受けた両者は、平成10年4月1日に（財）岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長の間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。実際の発掘調査は向中野館跡第3次調査が平成10年5月19日に着手され、同年8月7日に終了し、小幡遺跡第10次調査が平成10年8月17日に着手し、同年10月6日に終了した。

II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の立地と地形・地質

向中野館跡・小幡遺跡の所在する盛岡市は、岩手県のほぼ中央に位置し、北は岩手郡滝沢村・玉山村、東は下閉伊郡岩泉町・川井村、南は紫波郡紫波町・稗貫郡大迫町、西は岩手郡半石町に接する。近世南部氏の城下町として発展し、現在は岩手県の県庁所在地で、面積489.15km²、人口約28万3千人を有する、北部太平洋側における中核都市であり、東北地方交通の大動脈である東日本旅客鉄道東北本線と国道4号線が地内を南北に縱貫し、JR田沢湖線と国道46号線が西の秋田県に通じている。市域の中央部を北上川が、西から零石川、東から中津川、築川を合わせて南流し、東西に迫る山々に挟まれた盛岡盆地を形成しており、盛岡市の市街地はこの盆地を中心に広がっている。北西には古来から「南部富士」「巌驚山」と呼ばれる岩手山(2040.5m)がコニーデ火山特有の裾野を東方に広げ、北東には姫神山(1124.5m)が、岩手山と向き合うようにそびえている。また、南東には北上山地の最高峰、秀峰早池峰山(1913.5m)が定高性を示す周囲の山塊からひときわ抜きん出た山稜を望ませている。また、大迫町および川井村との境にある毛無森は標高1,437mであり、桐ノ木沢山・阿部館山など1,200m以上の山々が東境に連なり、区境峰を越えて国道106号とJR山田線が太平洋沿岸の宮古市方面に通じている。

北上川は、岩手・宮城の両県をまたがって流れ主流部の延長249km、流域面積10,250km²、支流数216を有する東北地方最大の河川で、西側に連なる奥羽脊梁山脈と東側に広がる北上山地の間の低地帯を涵養し、宮城県石巻湾に注いでいる。この流域は、盛岡市北部の四十四出峡谷と一関市狐拂寺峡谷を境にして上・中・下流に分けられており、盛岡は中流域の上流部に当たる。

中流域の地形は、背後に控える山地構造の違いによって対象的な様相を呈している。新第三系および火

山岩類を主体とする褶曲山地である奥羽山脈は、各支流に多量の土砂を供給し、大小の扇状地が複合する広い平野部を西岸に作り出している。これらの扇状地は更新世中・後期に形成されたもので、支流によって解析されて段丘化している。これに対して老年期山地がその後の地殻変動によって隆起準平原化した北上山地側では、山地に続く丘陵縁辺部に小規模な段丘と沖積地が観察されるにすぎない。

北上川流域の第四系および地形の研究を行っている中川久夫らは、中流域の段丘を上部から西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘に分類し、中流域北部ではこれらに相当するものとして高位の石鳥谷段丘、中位の二枚橋段丘、低位の花巻段丘・都南段丘に区分している。向中野館跡・小幡遺跡の立地する飯岡新田・本宮地区も季石川の右岸に形成された沖積段丘上に位置している。

向中野館跡は、北緯39°40'32"、東経141°08'32"に、小幡遺跡は北緯39°41'06"、東経141°07'36"に位置し、国土地理院の1:50,000の地形図では「盛岡」(N J -54-13-14)の図幅に含まれる。今回の調査区は東日本旅客鉄道東北本線盛岡駅の南西2.4km付近で、季石川によって形成された沖積段丘上に立地している。標高は126m前後で、川河床面からの比高は6~6.5m、現状は水田・畑地及び宅地である。なお、延暦22年(803年)坂上田村麻呂によって造営された志波城も同地形面に立地している。両遺跡が載る沖積面は季石川の度重なる氾濫を受けており、旧河道や自然堤防が入り組む様子が地形図上でも、水田の区割り等から明確に読みとれる。

2. 周辺の遺跡

平成10年4月の岩手県教育委員会のまとめでは盛岡市内には508ヶ所の遺跡が登録されている。第4図では本遺跡の所在する本宮・飯岡新田周辺を中心に遺跡の紹介をする。

本遺跡の載る季石川右岸と左岸では対称的な様相を呈している。左岸の台地上には人館遺跡群をはじめとした縄文時代の遺跡が数多く知られている一方で、右岸の沖積段丘面上には志波城跡や今回調査した小幡遺跡の周辺にある大宮北遺跡や鬼拂A遺跡、向中野館跡周辺には台太郎遺跡など奈良~平安期の遺跡が多く分布している。

〈引用・参考文献〉

岩手県企画開発室 (1974)『北上川系開発地域土地分類基本調査一目録一』

岩手県文化振興事業団 (1994)『小幡第2次発掘調査報告書』

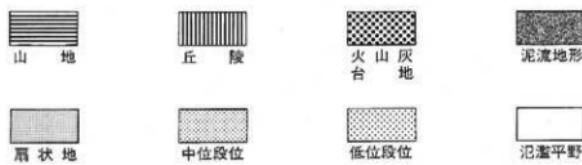
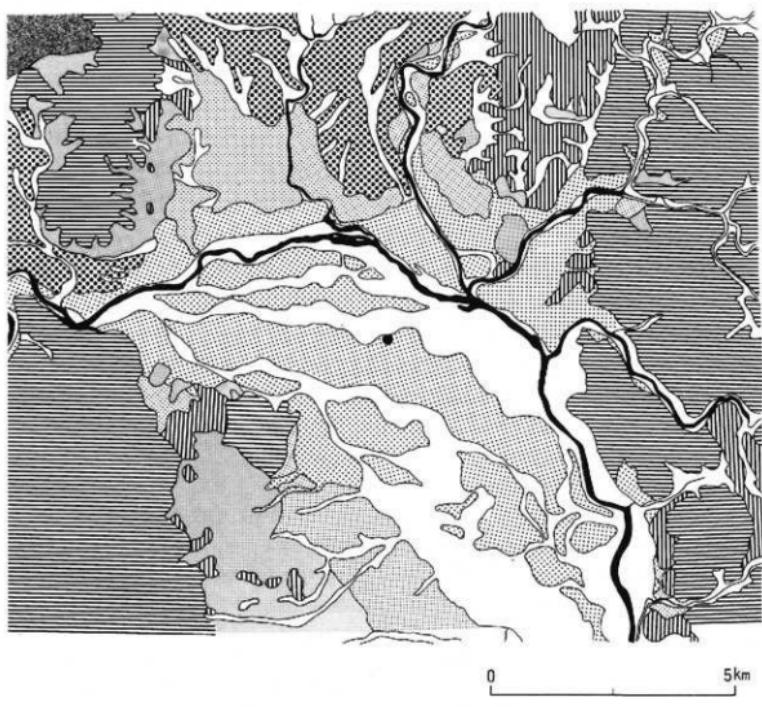
〔跡〕岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第244集

岩手県文化振興事業団 (1995)『小幡第4次発掘調査報告書』

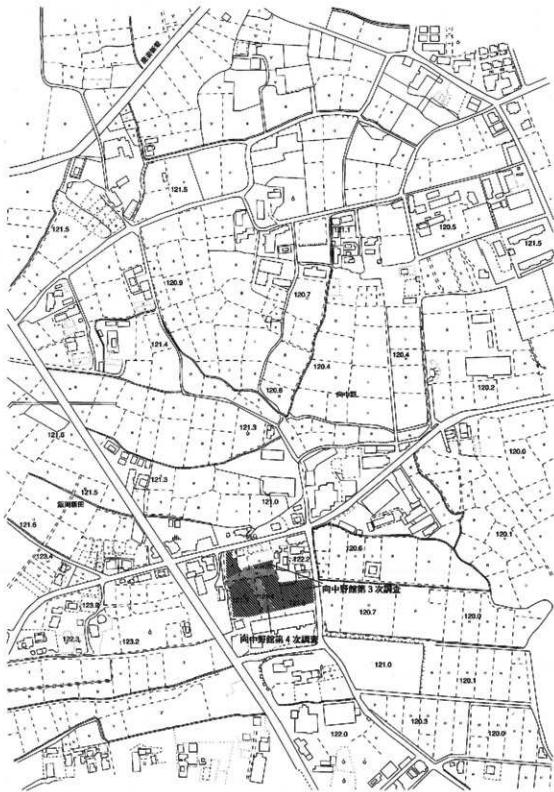
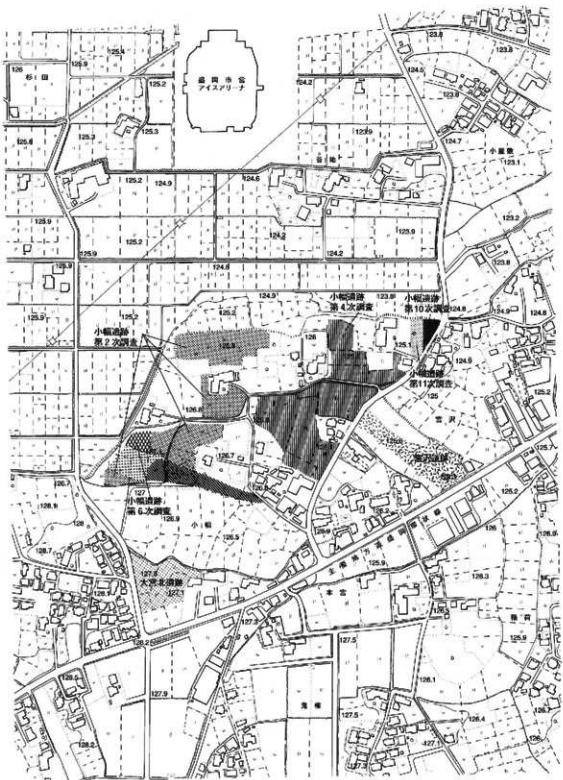
〔跡〕岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第265集

岩手県文化振興事業団 (1998)『大宮北・本宮熊堂A遺跡発掘調査報告書』

〔跡〕岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第281集



第2図 遺跡周辺の地形分類図

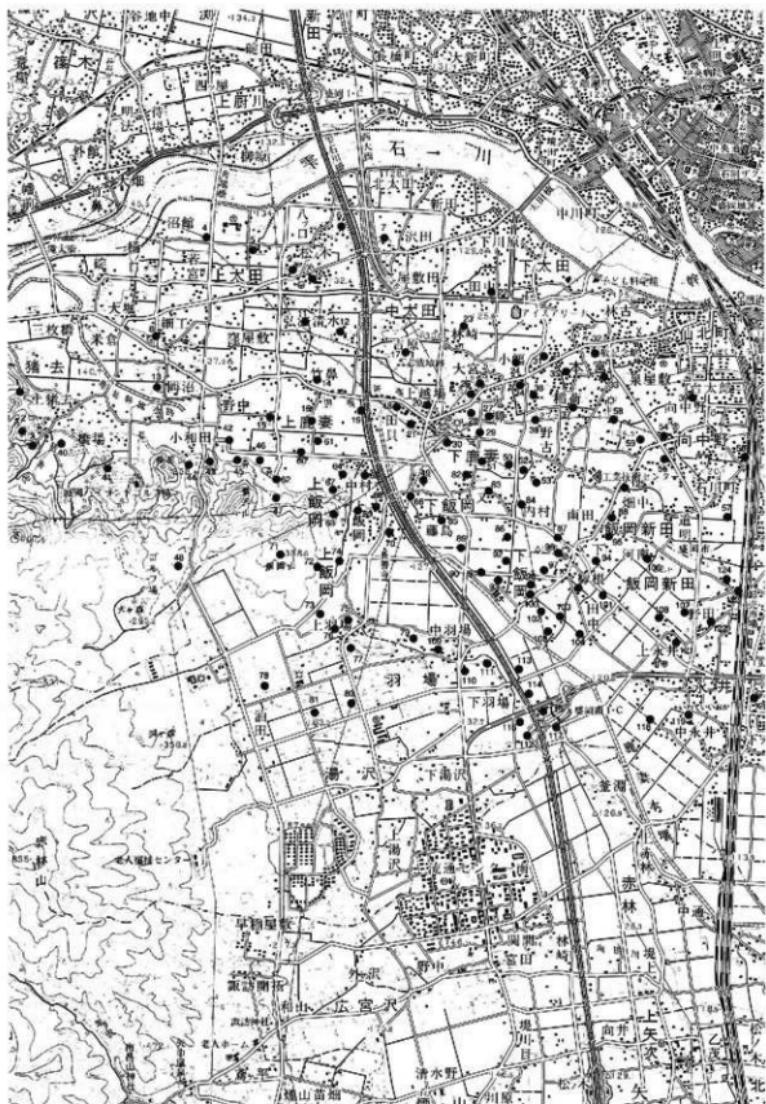


第3図 周辺の地形図

周辺の遺跡一覧表

NO	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
1	田面野木	散布地	縄文／古代	土器
2	猪去八幡館	城跡跡	中世	堀、郭
3	上猪去	集落跡	縄文／古代	縄文土器、土師器、土坑、掘立柱建物跡
4	細田	散布地	平安	土師器
5	松ノ木	朱藩跡	平安	土師器
6	八ツ口	散布地	古代	土師器、住居跡
7	八卦	集落跡	古代	土師器、住居跡、土坑
8	太田船角占塙跡	占塙	奈良	土師器、刀、玉、和同開珎
9	顔	集落跡	平安	土師器、住居跡、城塁跡、堀、土基
10	上野屋敷	散布地	古代	土師器
11	畠中	朱藩跡	古代	土師器
12	小沼	集落跡	平安	土師器、綠釉陶器、住居跡
13	一本木	朱藩跡	平安	土師器、住居跡
14	五兵衛新田	集落跡	古代	土師器
15	大沼	集落跡	古代	土師器
16	竹鼻	朱藩跡	古代	土師器
17	志波城	城櫓跡	平安	土器、掘立柱建物跡、門跡、築地、人溝
18	日貝	集落跡	古代	土師器、住居跡
19	竹花前	朱藩跡	平安	土師器、綠釉陶器、住居跡
20	新堀廻	城櫓跡	縄文／古代	土器(縄文晩期)、古代：住居跡、土師器、土坑、大溝
21	石仏	朱藩跡	古代	土師器
22	田中	散布地	平安	土師器
23	林崎	集落跡	平安	土器、掘立柱建物跡
24	小幡	朱藩跡	平安	土器、住居跡、掘立柱建物跡／報告遺跡
25	大宮	集落跡	古代	土師器
26	大宮北	集落跡	平安	住居跡、土師器/H 8年調査
27	鬼柳△	散布地	古代	土師器/H 9年調査
28	小林	集落跡	古代	土師器
29	水門	集落跡	古代	土師器
30	上越場A	集落跡	古代	土師器
31	宮沢	散布地	平安	土師器片/H 8年調査
32	本宮熊堂△	集落跡	縄文	縄文土器(後・晩期)／H 8年調査
33	本宮熊堂B	集落跡	古代	土師器/H 3・H 9年調査
34	鬼柳△	朱藩跡	古代	土師器
35	福尚	集落跡	古代	土師器
36	鬼柳C	集落跡	古代	土師器
37	野古△	朱藩跡	古代	土師器/H 9年調査
38	野古B	散布地	古代	土師器
39	古太郎	朱藩跡	古代／平安	土師器、住居跡、消跡/H 9, 10年度調査
40	上平	集落跡	縄文／古代	土器、(中・晩期)、土師器、住居跡
41	猪去館	城塁跡	縄文／古代	土器、土坑、住居跡、掘立柱建物跡
42	贋沢下	散布地	古代	土師器
43	二ツ沢	散布地	縄文／古代	土師器
44	小和田館	城跡跡	中世	堀、郭
45	賛沢	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
46	ハビ次	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
47	オミ坂	散布地	縄文／古代	縄文土器(草～晩期)、土師器
48	大ヶ森	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
49	辻屋敷	朱藩跡	古代	土師器
50	西田A	集落跡	古代	土師器
51	上越場B	朱藩跡	古代	土師器
52	西田B	集落跡	古代	土師器、須恵器
53	前田	朱藩跡	古代	土師器
54	向中野館	城跡跡	平安／中世	堀、住居跡、土師器、須恵器／報告遺跡
55	轟谷地	朱藩跡	古代	土師器
56	南仙北	朱藩跡	縄文／古代	縄文土器、土師器、住居跡
57	向中野幡	朱藩跡	古代	土師器
58	飯岡浜田	朱藩跡	古代	住居跡
59	飯岡才川	朱藩跡	古代	陥し穴、土坑、溝/H 10年調査
60	中村	散布地	平安	土師器、須恵器
61	月見山	散布地	縄文／古代	土器
62	山中	散布地	縄文／古代	土器(早・中期)、土師器

NO	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
63	瓶岡館	城郭跡	中世	空堀、繩文土器(中期)
64	堤	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
65	高鷲古墳群	古墳	奈良～平安?	平(公)廐手刀、切小玉、土師器
66	旗島Ⅱ	散布地	平安?	土師器
67	高鷲	散布地	縄文	上器(中期)、石器
68	大柳Ⅰ	失落跡	古代	土師器、須恵器
69	人柳Ⅱ	散布地	古代?	土師器?
70	鶴野前	散布地	縄文	土器(後期)
71	瓶岡山館	城郭跡	中世	
72	飯岡赤坂	散布地	古代	
73	いたこ塚	祭祀跡	近世	
74	赤坂Ⅱ	散布地	平安?	土師器
75	羽場館	城郭跡	中世	空堀
76	羽場古日木	散布地	縄文	土器(中期)
77	砂子塚	散布地	古代	小塚
78	アイノ沢	散布地	縄文	土器(晚期)
79	因幡	散布地	縄文／古代	縄文土器、土知器
80	木館	集落跡	平安	
81	橋千代	集落跡	奈良	
82	二又	散布地	古代	土師器、須恵器
83	内村	集落跡	平安	土師器、常滑
84	中屋敷	散布地	古代	土師器
85	藤島Ⅰ	集落跡	縄文／古代	縄文土器、土師器
86	深瀬Ⅰ	集落跡	平安	住居跡
87	高麗堂	散布地	古代	須恵器
88	法螺棲現塚	祭祀跡		
89	瓶岡林崎Ⅰ	失落跡	古代	土師器、須恵器、銅、住居跡
90	瓶岡林崎Ⅱ	集落跡	平安	土師器
91	上新田	失落跡	平安	土師器、住居跡
92	深瀬Ⅱ	集落跡	平安	住居跡
93	上新田Ⅰ	集落跡	平安	住居跡
94	下久根Ⅰ	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
95	石神	散布地	古代	土師器、須恵器
96	高麗堂Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器
97	西	集落跡	平安	土師器、住居跡
98	西山	集落跡	平安	須恵器
99	下久根Ⅱ	散布地	縄文／古代	縄文土器
100	熊堂Ⅰ	集落跡	縄文／古代	縄文土器、石器、土師器、住居跡
101	松島	集落跡	古代	土師器、須恵器
102	熊堂Ⅲ	集落跡	平安	土師器、須恵器、住居跡
103	熊堂Ⅱ	集落跡	平安	土師器、須恵器、住居跡
104	田中	集落跡	平安	土師器、須恵器、石器
105	南谷地	集落跡	平安	土師器、須恵器、住居跡
106	夕寛	散布地	古代	土師器
107	横屋	集落跡	古代	土師器、須恵器
108	野木	散布地	古代	土師器、石器
109	新井田Ⅰ	散布地	古代	土師器、須恵器
110	新井田Ⅱ	散布地	古代	土師器、須恵器
111	新田	集落跡	平安	土師器、須恵器
112	間瀬Ⅰ	散布地	古代	土師器
113	下羽場	集落跡	平安	土師器、須恵器、綠釉陶器
114	下湯沢	散布地	古代	土師器、須恵器
115	大島	散布地	古代	土師器、須恵器
116	湯森	散布地	縄文	土器(晚期)、石器
117	湯森経脈	経塚	中世	中世、常滑
118	後鳥	散布地	縄文	土器、石器
119	湯沢	散布地	縄文	土器(前・中・後期)、石器
120	島	墳墓	不明	小塚
121	小田Ⅰ	散布地	古代	土師器
122	間瀬Ⅱ	散布地	古代	土師器、須恵器
123	間瀬Ⅲ	散布地	古代	土師器、須恵器
124	森子	散布地	古代	土師器
125	矢塚	集落跡	古代	土師器、住居跡、竪櫛／H 4 年調査



第4図 周辺の遺跡分布図

III. 野外調査と整理方法

1. 野外調査

(1) グリッドの設定

・向中野館跡

向中野館跡第3次調査のグリッド設定にあたっては基準点測量を委託し、公共座標軸を利用して調査区範囲内の長軸線上に載るように中央に基準点1、西側に基準点2を設置した。座標値は以下のとおりである。

基1 ($X = -35,950.000$ $Y = 26,500.000$)

基2 ($X = -35,950.000$ $Y = 26,470.000$)

基1から西に50m、北に50mの地点を任意の座標原点とし、これを基に1升50m×50mの大グリッドを設定し、東方向へはアルファベットのA、Bを南方向へはI、IIを与え、IA、IBというように表示した。小グリッドは大グリッドを 5×5 mの100升に区割り、北西隅を基点に、東方向へはa～j、南方向へは1～10をつけて1a、10jというような設定にした。遺構出土の遺物にはこの調査区名を使用し、IA1a、IB10jのようなグリッド名をつけて、取り上げた。

・小幅遺跡

小幅遺跡第10次調査のグリッドの設定にあたっては盛岡市教育委員会の方針に準じた。平面直角座標第X系を座標変換した調査座標で表示した。大宮地区の調査座標原点は $X = -35,000.000$ 、 $Y = +25,000.000$ である。50mの大グリッドは北西隅を基点に、東方向へはアルファベットの大文字でAA～YY（YYから東へはA、B・・・）・南方向へは算用数字で1～25となり、これを組み合わせてIA、A、2BB・・・25YYというように示される。小グリッドは大グリッドを 2×2 mに区割り、北西隅を基点に、東方向へはa～y、南方向へは1～25をつけて1a、25yというような設定にした。平面図の作成にあたっては調査原点の $X = -35,000.000$ 、 $Y = +25,000.000$ を基点としてRY±0・RX±0と表現し、この調査原点を中心にして北方向へはRX+・南方向へはRX-、西方向へはRY-・東方向へはRY+と表記している。

(2) 粗掘り

本調査に先立って盛岡市教育委員会が行った試掘調査によって今回の調査対象面積の約40%の部分については遺構の粗略や層序・遺物の状況がある程度把握されていた。また小幅遺跡に関しては、隣接した西側を盛岡市教育委員会が調査を行なっており、その成果によって今回調査対象となっている区域の遺構・遺物に関する状況がある程度把握されていた。さらに試掘の入らない所には人力によるトレンチを設定して、細部の状況を確認した。これにより遺構が検出するレベルまで遺物が少ないこともあり、重機によって、表土を除去し、その後人力による遺構検出を行った。

(3) 遺構の命名

検出された遺構の命名については盛岡市教育委員会の方法に準じており、下記の名称を用いた。各種遺構番号は、向中野館跡は新規で01から、小幅遺跡第10・11次調査は当初第8次・第9次調査として行われたため第7次調査からの通しで下記のとおりの番号を付した。

堅穴住居跡 R A019～ 摟立柱建物跡 R B 015～ 土坑類(陥し穴状遺構含む) R D227～

堅穴状遺構 R E 炉・焼土遺構 R F 013～ 溝跡 R G087～ その他 R Z017～

(4) 遺構の精査と実測・遺物の取り上げ

検出された遺構は、堅穴住居跡・堅穴状遺構は4分法で精査を実施し、遺構の平面図・断面図は20分の1の縮尺で実測を行った。一部堅穴住居跡のカマド・炉の平面・断面については10分の1で実測している。溝跡や堀跡については平板測量で40分の1の平面図を作成した。なお断面図は20分の1である。その他の遺構については2分法で精査を実施し、基本的には平面図・断面図とともに20分の1の縮尺で実測したが、例外的に10分の1で実測を行った遺構もある。遺構内出土の遺物については、埋土層に基づいて取り上げ、必要に応じて写真撮影・図面作成後に取り上げた。遺構外出土の遺物については、前述のとおり、調査区ごとに出土した層位を記して取り上げた。

(5) 写真撮影

野外調査での写真撮影は、6×7cm判カメラ(モノクロ)を1台、35mm判カメラ(モノクロ、カラー・リバーサル)を2台、この他にボラロイドカメラ1台をメモ的な用途として使用した。撮影に当たっては、撮影状況を記した「撮影カード」を事前に写し、整理時の混乱を防止した。また、調査終了にあたり調査現場の航空写真撮影を実施している。

2. 室内整理

(1) 作業手順

遺構については調査現場で作成した実測図の点検、合成、第2原図の作成、トレース図版作成の順に進めた。遺物については、接合・復原を行った後、仕分け・登録と併行して実測図の作成、トレース、写真撮影、図版作成を順に進めた。また、これらの作業と併行して原稿執筆をした。

(2) 遺構

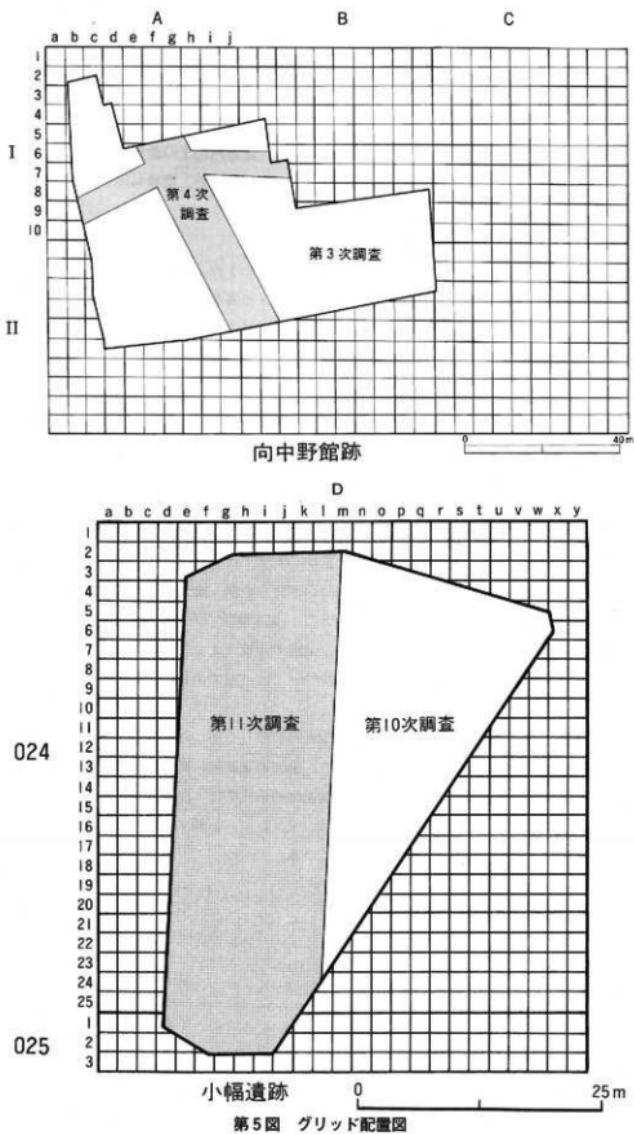
遺構図面の縮尺は堅穴住居跡・堅穴状遺構については平面図・断面図とともに50分の1、カマドの各部断面図は25分の1、溝状遺構・堀跡は平面図100分の1、断面図40分の1、土坑・陥没穴状遺構は平面図・断面図とともに50分の1を原則として掲載したが、遺構の規模によって一部変更もあり、図面にはそれぞれスケール・縮尺率を付した。遺構写真的縮尺については不定である。

(3) 遺物

土器の実測図は原則として、反転実測が可能なものに限ったが、一部平面実測を行ったものもある。遺物写真的縮尺については実測図版に準じている。遺物の実測図に付している番号は遺物写真図版に付した番号と同一である。拓本図版・写真図版掲載遺物の縮尺率は下記の通りである。

土器・陶磁器・木片・・・1/3 大型の土器・・・1/4 石器・土製品・古銭・・・1/2

図版中の土器はP、漆はS、木片はWと表している。



IV. 向中野館跡第3次調査

所 在 地	盛岡市飯闇新田2地割124-1ほか
委 託 者	盛岡市
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理
発 挖 調 査 期 間	平成10年5月21日～8月31日
調査対象面積	2,944m ²
発 挖 調 査 面 積	2,944m ²
遺跡番号・略号	L E 26-0205・OMN-98-03
調 査 担 当 者	瀧 浩二郎・山口俊規
協 力 機 関	盛岡市教育委員会

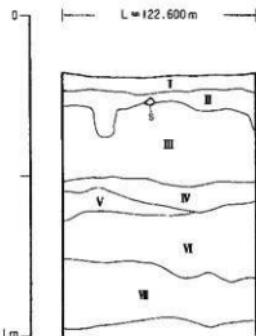
1. 遺跡の立地

向中野館遺跡は東日本旅客鉄道仙北町駅から南西に約1.3kmに位置し、零石川によって形成された標高126m前後の河岸段丘上に立地している。調査区の現況は水田および畑地である。本遺跡の西約1kmに四指定史跡の志波城跡、北100mに奈良・平安期の集落跡の古太郎遺跡がある。

2. 基本土層

本遺跡は開削時の削平による影響もあって、南側は旧新作下にある遺構・遺物の包含層がⅢ耕作土を除去するとほとんど残存せず、北側ほど残存状態が良好であるためⅠ A 5 i グリッドに深掘りをかけ、これの北面を基本土層とした。

- 第Ⅰ層：10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 固くしまる
第Ⅱ層：10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 固くしまる
第Ⅲ層：10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりや
やあり 深堀検出面である。
第Ⅳ層：10YR3/4 暗褐色土 粘性あり しまりあり
第Ⅴ層：10YR5/4 にほい黄褐色土 粘性ややあり
しまりあり
第Ⅵ層：10YR5/1 にほい黄褐色土90%、10YR6/1 黄
褐色土10%の混合土層 粘性あり しまりあり
第Ⅶ層：10YR4/2 灰黄褐色土 粘性あり しまりあり



3. 検出された遺構

R A 01 穹穴住居跡

遺構(第3図・写真図版3)

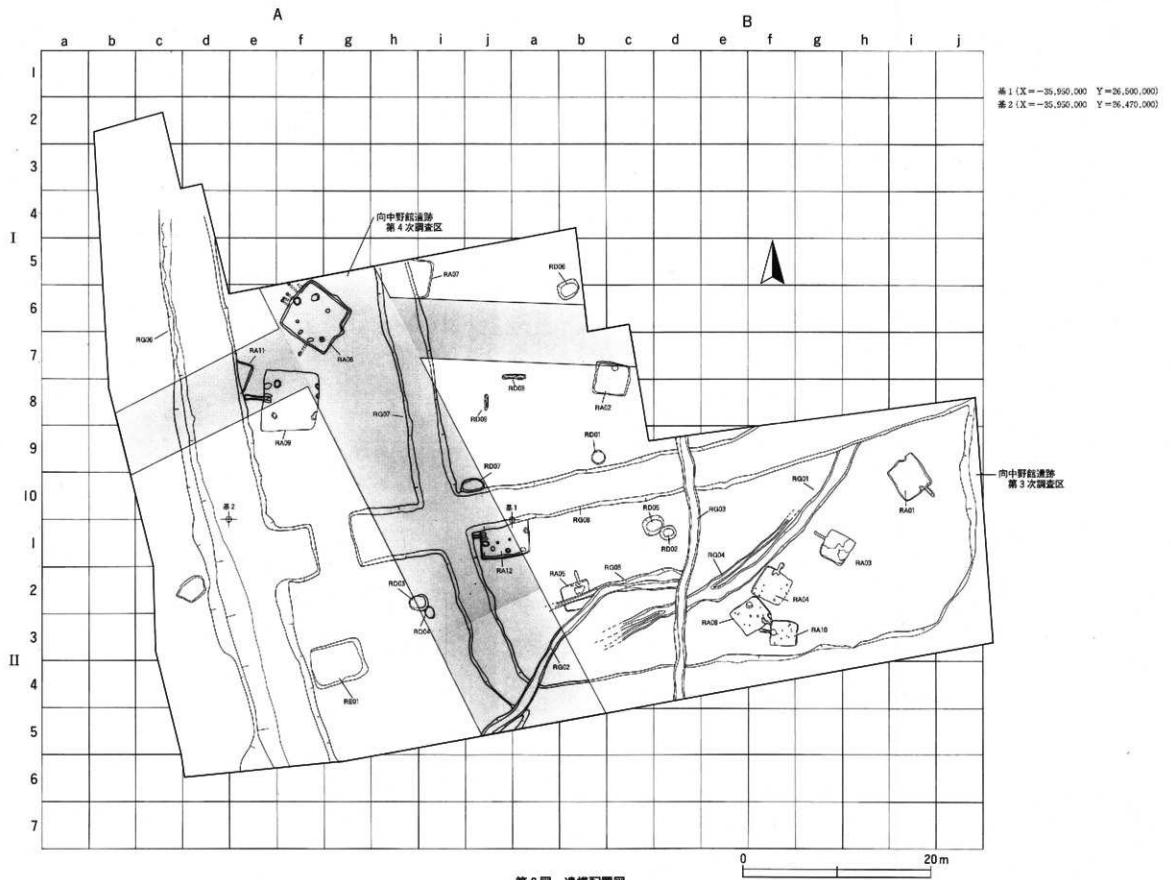
〈検出状況・重複関係〉 1 Bグリッドの南東隅に位置する。第Ⅲ層で検出した。
〈形状・規模〉 形状は方形状で規模は366×406cm、総床面積は約14.85m²、主軸方向はS-35°-Eである。
〈埋土〉 自然堆積を呈し、全体が粘土質の黒色土で構成され、検出面から床面までの深さは16~28cmである。
〈壁・床〉 壁面は緩く内湾して立ち上がる。床面は平坦であるが小礫による凸凹がある。一面に炭化物が広がる。柱穴はない。
〈カマド〉 西側のはば中央に位置する。残存状況は良好であり、袖部には地山上を用いている。煙道部の長さは100cm、煙出し部は径25cmの円形を呈している。燃焼部の焼成痕は残存が悪く、炭化物は燃焼部付近から周囲へと拡散している。

遺物(第19図・写真図版20)

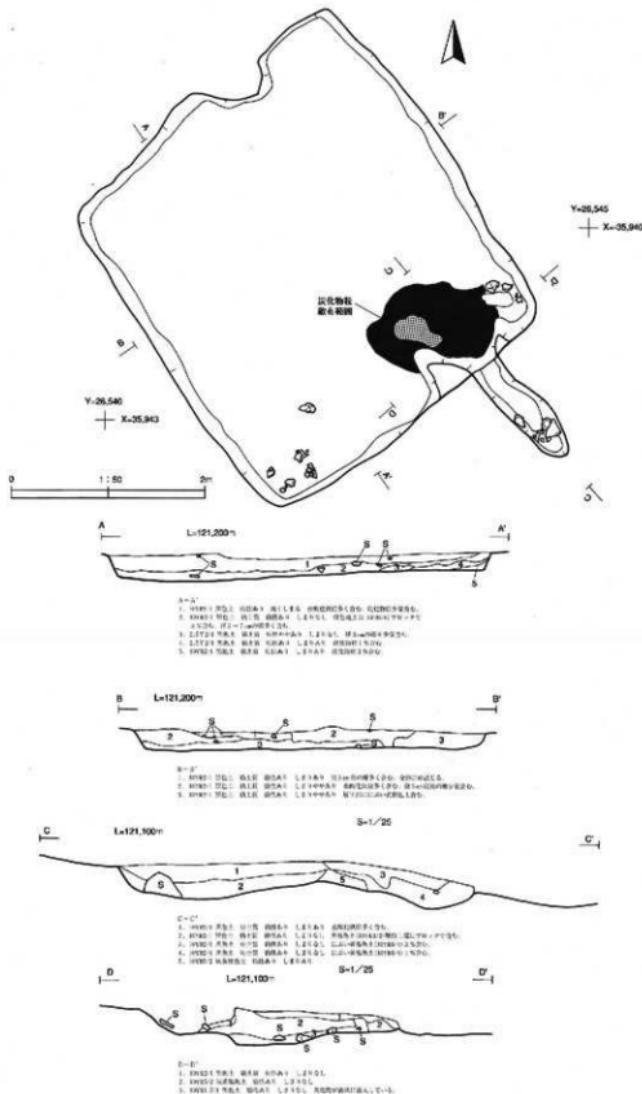
〈出土状況〉 1-2は共に酸化炎焼成による土器で1はカマド内からの出土で壺の口縁一胴部破片、2は埋土より出土したロクロ成形の壺で表面は磨耗が激しく、底部の切り離し技法は不明である。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。

第1図 基本土層



第2図 造構配置図



第3図 RA01

RA02 積穴住居跡

遺構(第4図・写真図版4)

〈検出状況・重複関係〉 IB区の南西に位置する。第III層で検出し、重複している遺構はない。

〈形状・規模〉 ほぼ正方形に近い形状で、規模は338×364cm、総床面積は約12.30m²である。主軸方向はN=9°-Eである。

〈埋土〉 自然堆積を呈し、上～中位は黒褐色土、下位は黑色土による構成である。検出面から床面までの深さは16～34cmである。

〈壁面〉 壁面は内湾して立ち上がる。

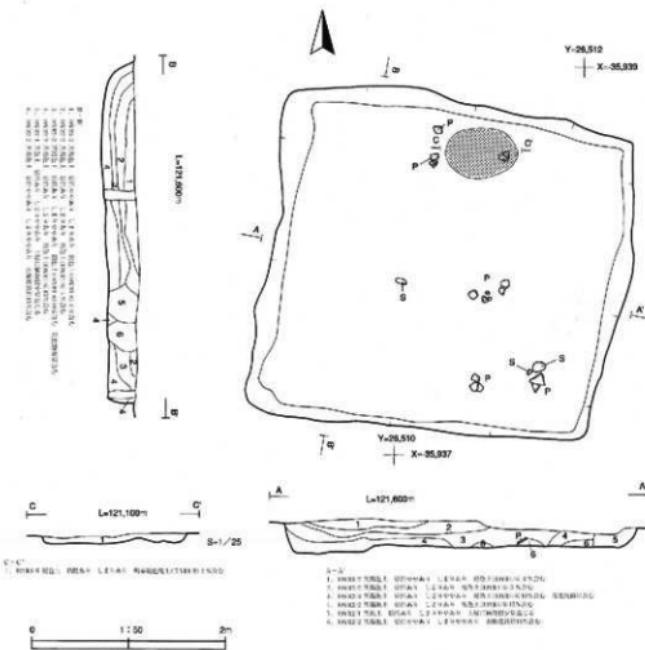
〈床面〉 床面はほぼ平坦で西側の一部が産んでいる。〈カマド〉なし

〈その他〉 床面北端に焼土遺構が確認された。焼土粒は含むが、2次堆積の遺構と思われる。

遺物(第19図・写真図版20)

〈出土状況〉 3・4は酸化炎焼成の内面に黒色処理を施した坏である。いずれも底部の切り離し技法は回転糸切りである。5は還元炎焼成の甕で胴部下～底部の破片で成形は非ロクロである。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。



第4図 RA02

RA03 竪穴住居跡

遺構(第5図・写真図版5)

〈検出状況・重複関係〉 II B区北隅に位置する。第Ⅲ層で検出し、重複している遺構はない。

〈形状・規模〉 ほぼ正方形に近い形状で、規模は296×310cm、総床面積は約9.17m²である。主軸方向はW-33°-Nである。

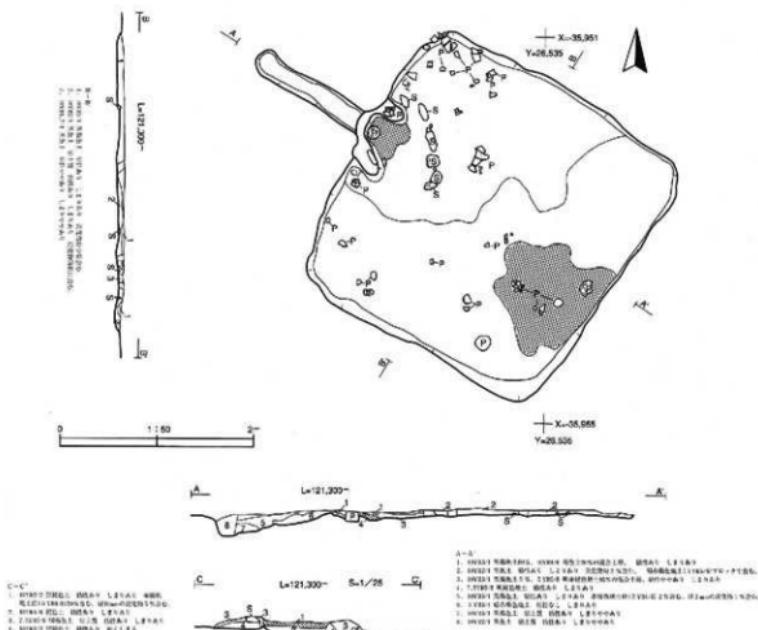
〈埋土〉 上位は黒褐色土、中～下位は黒色土で構成され、検出面から床面までの深さは4～8cmである。
 〈壁・床面〉 壁は内湾ぎみに立ち上がり、床面は凸凹である。

〈カマド〉 西壁の中央部に設けられ、住居跡全体が大きな削平を受けているにしても、残存状態は良い。煙道部の長さは約100cm、煙出し部径は15cmで、煙出し部に近いほど深くなっている。燃焼部の燃焼痕は明確ではなく、甕を逆さまに立てて支脚として用いている。

遺物(第19図・写真図版20)

〈出土状況〉 6～8・12は酸化炎焼成の坏で6・12の内面には黒色処理が施されている。8は底部の切り離し後にナデによる再調整が加えられている。10・11は還元炎焼成の甕の口縁部で、11はカマド袖部からの出土である。9はカマドの支脚として使用された土師器甕である。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。



第5図 RA03

RA04 堆穴住居跡

遺構(第6図・写真図版6)

〈検出状況・重複関係〉 II B区の北側に位置する。第III層で検出した。

〈形状・規模〉 形状は正方形で規模は330×332cmである。総床面積は約10.95m²である。主軸方向はN-30°-Eである。

〈埋土〉 全体が黒色土で構成されている。検出面から床面までの深さは2~9cmである。

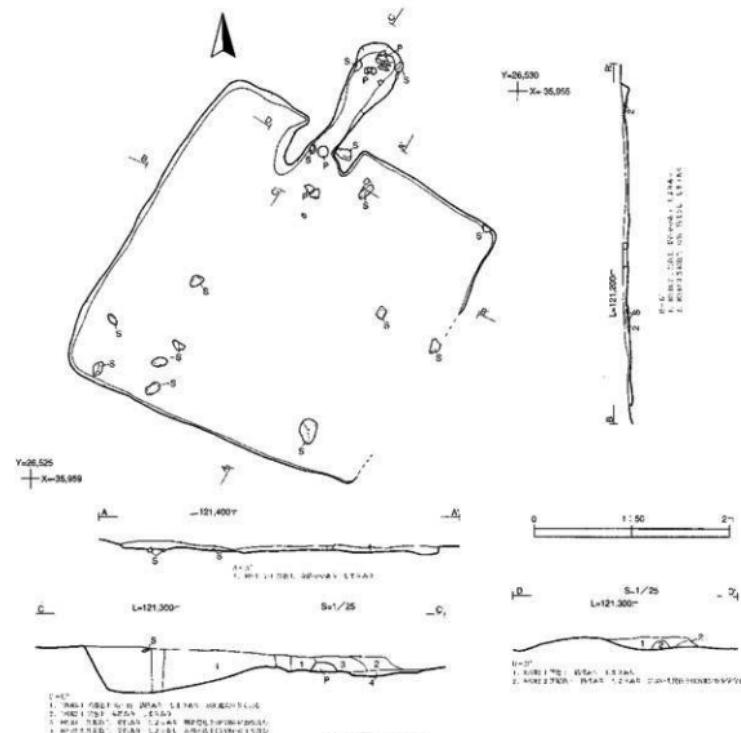
〈壁・床〉 壁面は外傾して立ち上がる。床面は緩い凸凹があり、小礫が剥きだしになっている。

〈カマド〉 カマドは北西壁の中央よりやや左側の位置に設けられ、煙道部の長さは約80cm、煙出し部径は49cmで煙出し部に向かって深くなっている。袖部は地山をそのまま利用して、袖とし、燃焼部に明確な焼土痕は無い。支脚には口縁部の破損した壺を逆さまに置いて用いている。

遺物(第19・20図・写真図版21)

〈出土状況〉 13は床面直上、14は埋土中からの出土でいずれも酸化炎焼成の壺である。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。



第6図 RA04

RA05 穫穴住居跡

遺構(第7図・写真図版7)

〈検出状況・重複関係〉 II B区の北西隅に位置する。RG02、RG05と重複し、これらより古い。

〈形状・規模〉 正方形に近い形状を呈し、規模は278×306cm、総床面積は約8.50m²である。主軸方向はN-15°-Wである。

〈埋土〉 全体が粘土質の黒色土で構成されている。検出面から床面までの深さは4-7cmである。

〈壁〉 壁は緩く外傾して立ち上がるが残存値が少ないと明確である。

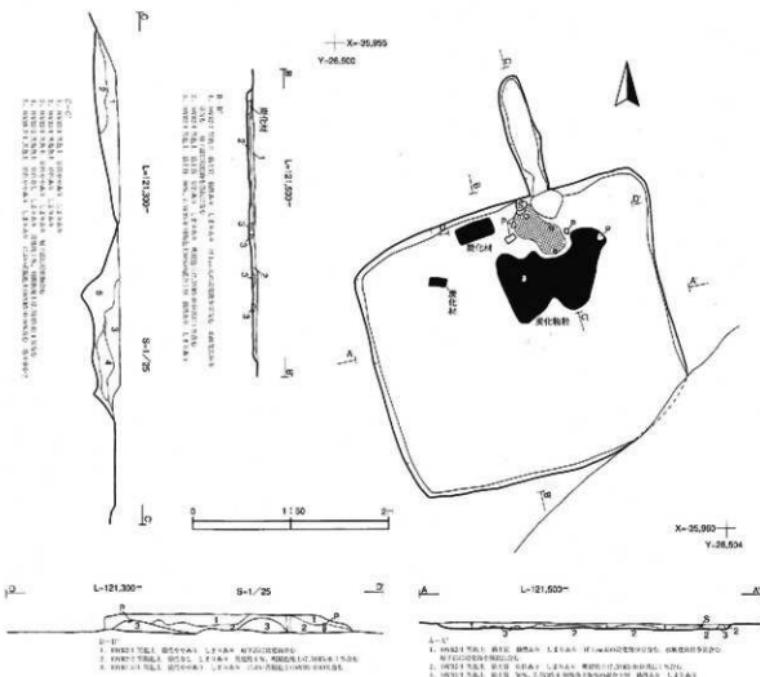
〈床面〉 床面は平坦で緩い凸凹がある。貼り床はない。

〈カマド〉 北壁の中央よりやや右側に設けられ、煙道部の長さは115cmで、袖は残存しない。燃焼部中心に搅乱があり、明確な燃焼痕は見受けられなかった。

遺物(第20図・写真図版21)

〈出土状況〉 15は床面直上、16は埋土からの出土でいずれも酸化炭焼成の壺である。16は内墨処理が施されている。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。



第7図 RA05

RA07 穫穴住居跡

遺構(第8図・写真図版8)

〈検出状況・重複関係〉 IA区中央に位置する。RG07と重複しておりこれより古い時期に属する。

〈形状・規模〉 重複によって過半が削平されているため全体の規模は不明であるが一辺390cm前後の方形状の遺構と推定される。

〈埋土〉 自然堆積を呈し、上～中位は黒～黒褐色土、下位は褐色土で構成されている。検出面から床面までの深さは25～32cmである。

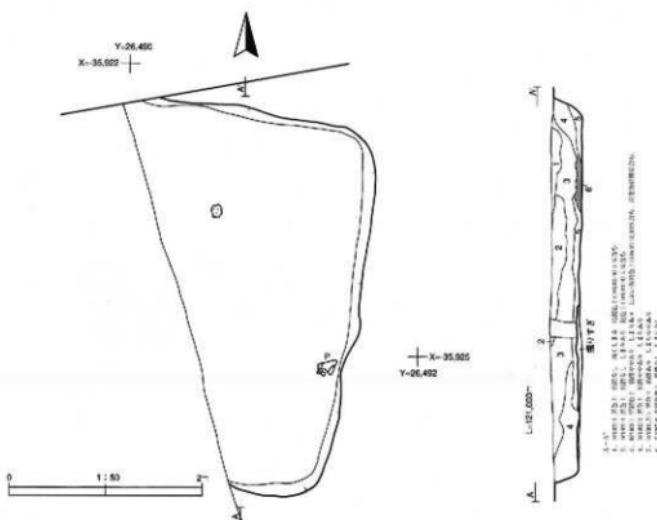
〈壁〉 壁は緩く内湾ぎみに立ち上がる。削平のため西壁は残存しない。

〈床面〉 床面は平坦で貼り床はない。〈カマド〉なし。

遺物(第21図・写真図版21)

〈出土状況〉 17・18ともに床面上から出土で17は還元炎焼成の壺で底面の切り離しは回転糸切りの技法である。18は酸化炎焼成の壺で表面はハケメ、内面にはナデの調整が施されている。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。



第8図 RA07

RA08 穫穴住居跡

遺構(第9図・写真図版9)

〈検出状況・重複関係〉 II B区北側に位置する。第III層下で検出された。RA10と重複し、これより古い。

〈形状・規模〉 形状は正方形で規模は315×348cm、総床面積は約10.96m²である。主軸方向はS-37°-Eである。

〈埋土〉全体が黒色土で、下位に一部黒褐色土を含む。検出面から床面までの深さは3~7cmである。

〈壁〉壁は緩く内湾ぎみに立ち上がるが、残存高は僅かである。

〈床面〉床面は平坦であるが、床面は剥きだしになっている所で大小の凸凹がある。柱穴状の遺構がカマドより1基検出されたが詳細は不明である。

〈カマド〉北東壁と南東壁間に隅に構築され、袖部は埴生土をそのまま利用しており、煙道部は、途中でRA10に切られている。燃焼部には燃焼痕が無く、煙道部同様、炭化物が微量散在する。カマド左袖部には上器片があり、補強に使われた芯材であった可能性がある。

遺物(第21図・写真図版21)

〈出土状況〉19・20ともにカマドの覆土から出土した。19は還元炎焼成の壺で底面の切り離しは回転系切りの技法である。20は酸化炎焼成の壺で成形はロクロ、底面の切り離し技法は回転系切りである。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。

R A 09 穫穴住居跡

遺構(第10図・写真図版10)

〈検出状況・重複関係〉IA区の中央やや南側に位置し、第IV層で検出した。重複している遺構はない。

〈形状・規模〉正方形に近い形状を呈し、規模は592×629cm、総床面積は約37.23m²、主軸方向はW-4°-Nである。

〈埋土〉前半の影響で床面での検出状況であったので観察可能なほどの埋土はない。検出面から床面までの深さは0~1cm弱である。

〈壁〉前半のため残存しない。

〈床面〉床面は平坦で4カ所に柱穴がある。

〈カマド〉西壁の中央部に設けられており、煙道部の長さは160cm、煙出し部の径は56cm、煙出し部の深さは47cmである。煙道-煙出し部の埋土には礫が多く含まれている。燃焼部の範囲は12×36cmである。焼土の厚さは8cmである。

遺物(第21図・写真図版22)

〈出土状況〉21~23はいずれも住居の覆土から出土した酸化炎焼成の壺で成形はロクロである。24~26は酸化炎焼成の壺で24は内里処理が施されている。25・26はカマド煙道部からの出土で調整は両面ナゲが施されている。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。

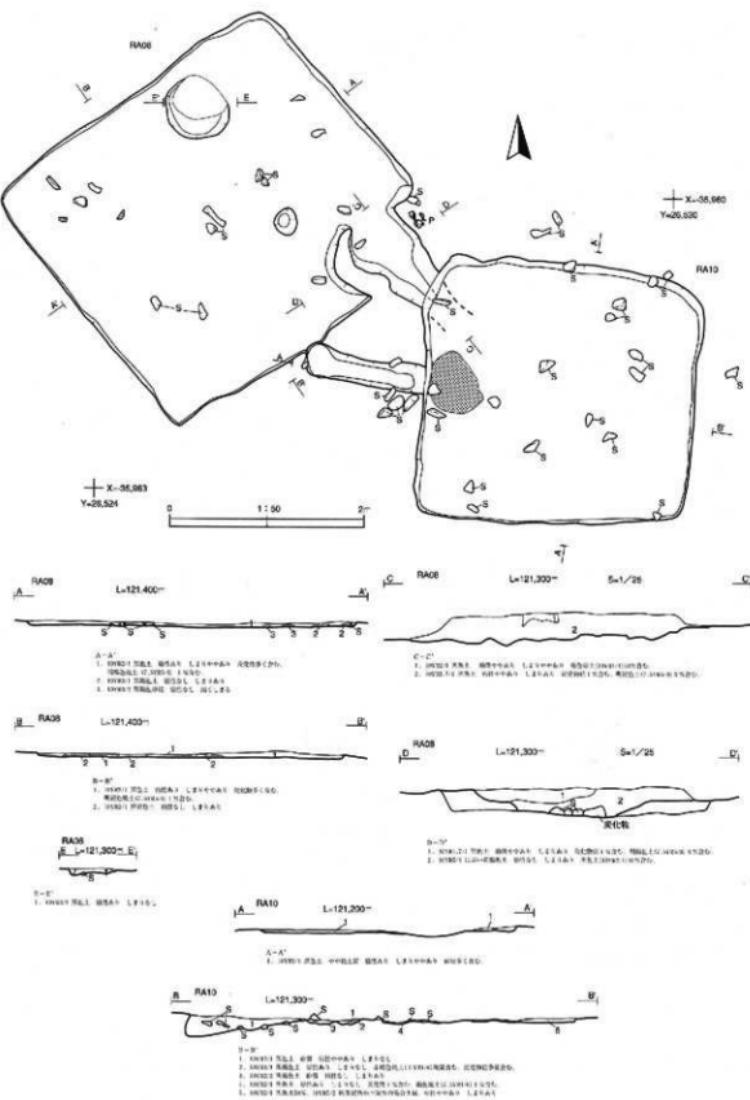
R A 10 穫穴住居跡

遺構(第9図・写真図版11)

〈検出状況・重複関係〉IB区の中央やや北側に位置する。第IV層で検出された。RA08と重複し、これより新しい時期に属している。

〈形状・規模〉形状は隅丸の正方形で、規模は278×268cm、床総面積は7.45m²である。主軸方向はW-9°-Nである。

〈埋土〉前半による影響で埋土はほとんど残存しないが上位は黒褐色土、中下位は黑色土で構成されている。検出面から床面までの深さは0~4cmである。



第9図 RA08・RA10

〈壁〉 横は外傾して立ち上がり、壁の残存高は少ない。

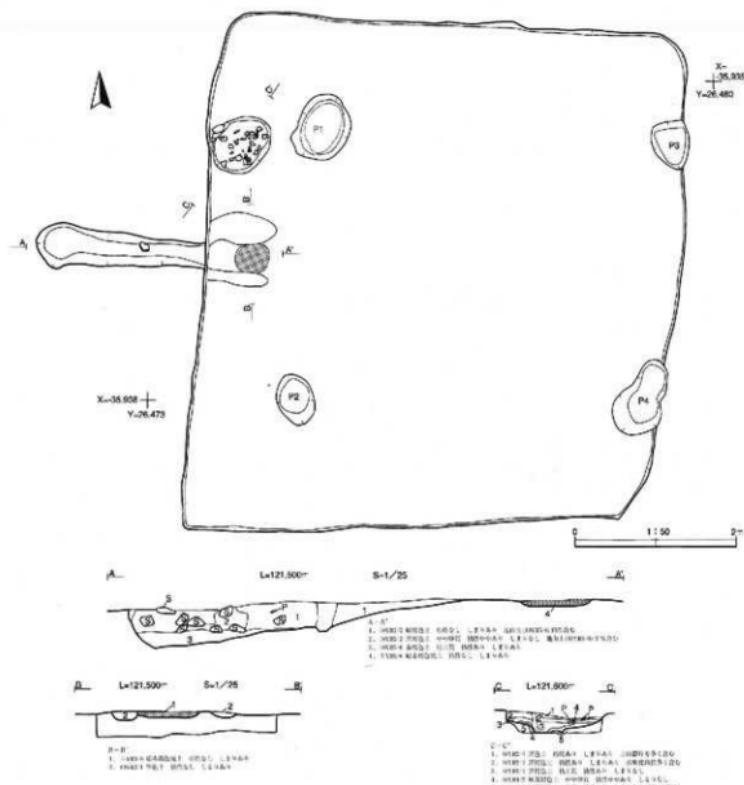
〈床面〉 床面は剥きだしになった裸で小さな凹凸がある。

〈カマド〉 西壁の中央部に設けられ、煙道部の長さは約100cmで運出し部に向かって深くなっている。煙出し部の径は36cm、深さは22cmである。燃焼部範囲は62×48cmであるが焼土自体の残存状態は良くない。

遺物(第22図・写真版22)

〈出土状況〉 27・28はいずれも住居の覆土から出土した。27は酸化炎焼成の壺で成形はロクロである。28は酸化炎焼成の甕の胴部下部で調整は表がケズリ、裏がナデである。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。



第10図 RA09

RA12 穹穴住居跡

遺構(第11図・写真図版12)

〈検出状況・重複関係〉 II A区北隅に位置する。重複している遺構はない。

〈形状・規模〉 北面はRG08に切られ、消滅しているが形状は方形と推測される。残存する南壁の長さは515cmである。主軸方向はW-1°-Sである。

〈埋土〉 自然堆積で埋土の大半は暗-黒褐色土で下位はにぶい黄褐色土で構成されている。検出面から床面までの深さは10~16cmである。

〈壁〉 壁は外反して立ち上がる。

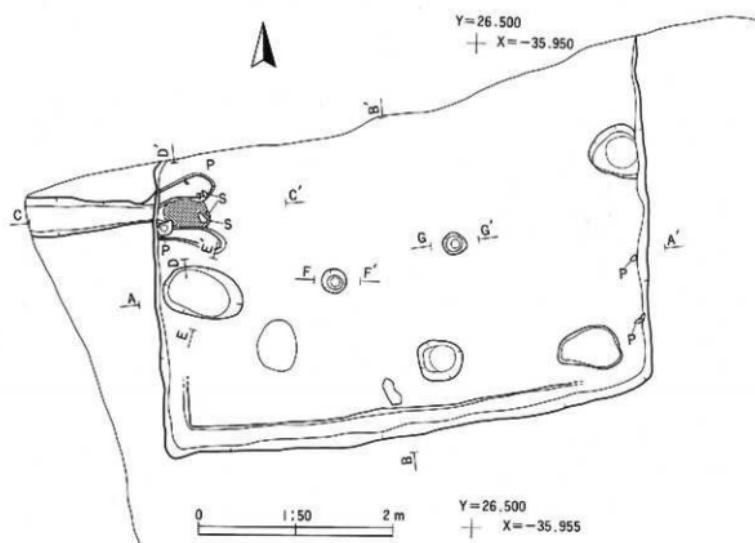
〈床面〉 床面は平坦で貼り床はない。中央付近に柱穴状の小土坑がある。

〈カマド〉 西壁に設けられ、煙道部は削平のためすべてではないが残存値は129cm、燃焼部の範囲は48×28cmである。袖は黑色土を固めて作られている。

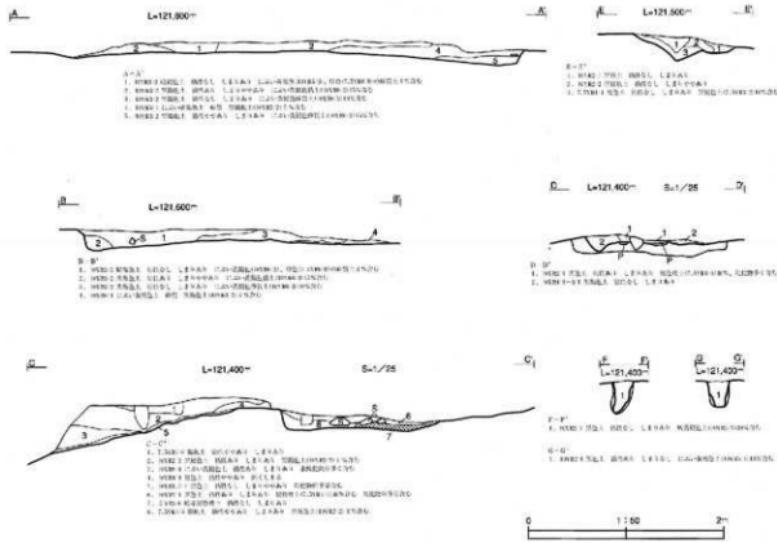
遺物(第22図・写真図版22)

〈出土遺物〉 29はカマド付近からの出土で還元炎焼成の坏で成形はロクロで口唇部付近は低温で焼かれている。30は酸化炎焼成の坏で内黒処理が施されている。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。



第11図 RA12



第12図 RA12 (断面)

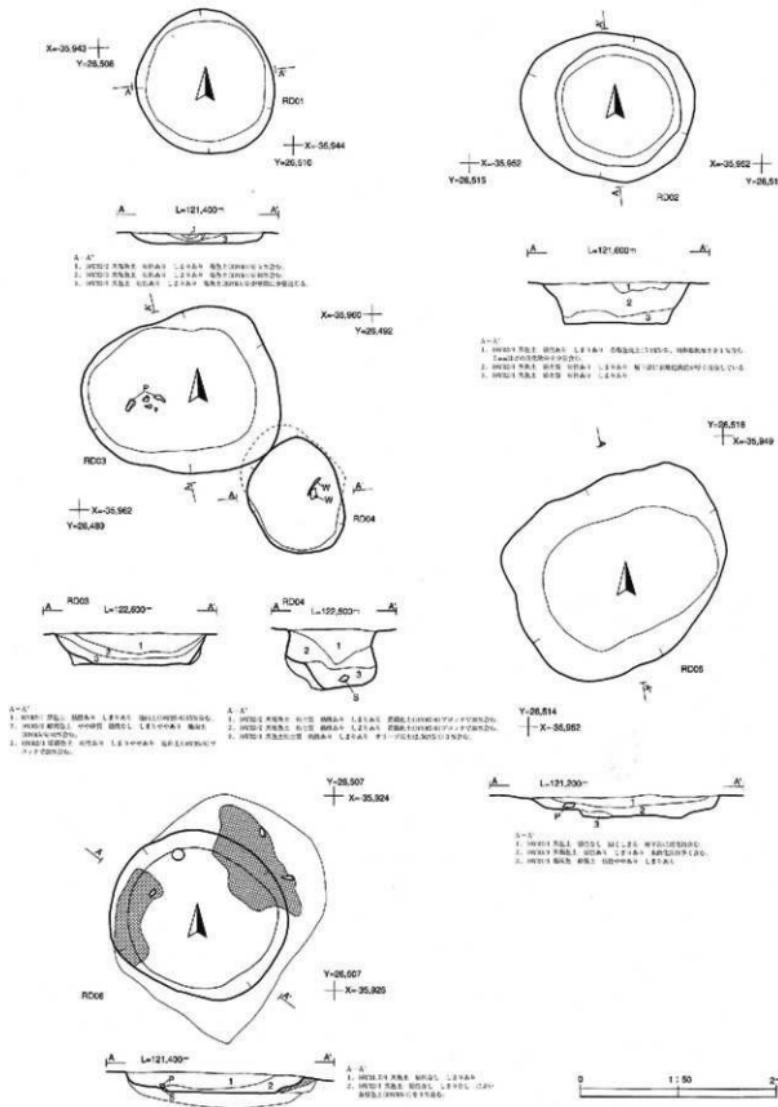
R D01~09 土坑・陥し穴状遺構

土坑類は9基を登録した。このうち2基は形態から陥し穴状遺構であり、調査区のほぼ全域に分布する。陥し穴状遺構(R D08・09)は周囲から縄文土器や石器が出土していることから縄文時代に属する遺構と考えられる。他ではR D03~R D05が平安時代に属する。以下、詳細は下記の表のとおりである。

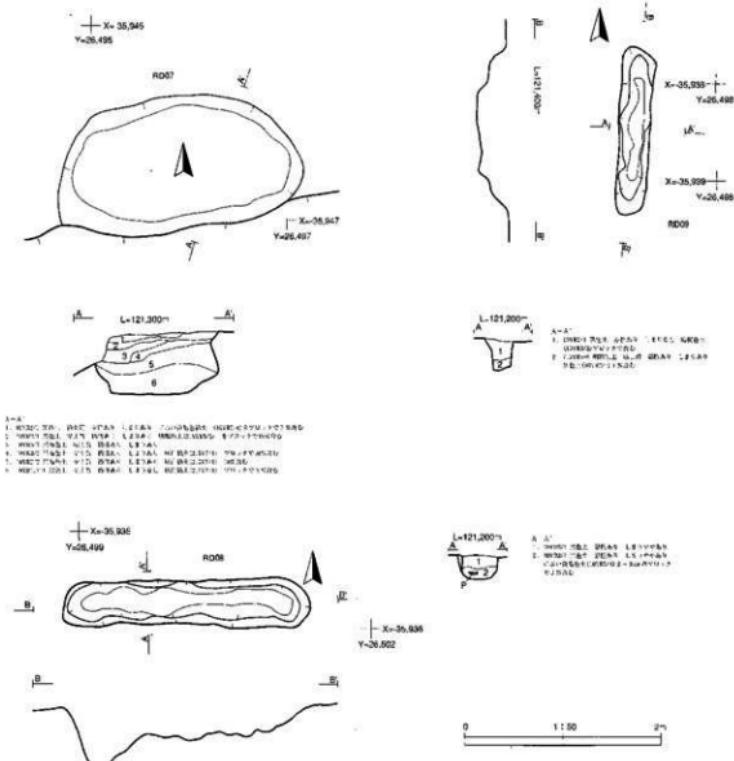
土坑・陥し穴状遺構観察表

遺構名	位置	形状	規模	深さ	地 上
R D01	I B 9 b	円形	148×140	10	自然堆積を呈し、中央部に黒褐色土、他は黒色土による構成である。
R D02	II B 1 d	楕円形	176×150	40	自然堆積を呈し、3層の黒色土によって構成されている。
R D03	II A 2 i	不整形	200×166	31	自然堆積を呈し、上位は黒色土、中～下位は黒褐色土による構成である。
R D04	II A 2 i	楕円形	98×91	62	自然堆積を呈し、上～中位は黒褐色土、下位は黒色土による構成である。
R D05	II B 1 d	△	299×218	33	全体が4層に分かれる黒色土による構成である。
R D06	I B 6 b	不整形	232×189	22	自然堆積を呈し、上位は黒色土、中～下位は黒褐色土、最下部に褐色土が堆積
R D07	I A 10 j	楕円形	246×135	61	自然堆積を呈し、上、下位には黒色土、中位は黒褐色土による構成である。
R D08	I B 7 a	溝状	251×43	25	自然堆積を呈し、2層に分かれる黒色土による構成である。
R D09	I A 8 j	溝状	172×31	30	自然堆積を呈し、上～中位には黒色土、下位は明褐色土による構成である。

*単位はいずれもcmである。



第13図 RD01~06



第14図 RD07~09

R E01 肩穴状遺構

遺構(第15図・写真図版15)

〈位置〉 II A 4 g グリッドに位置し、R G 06に隣接する。第IV層で検出し、重複遺構はない。

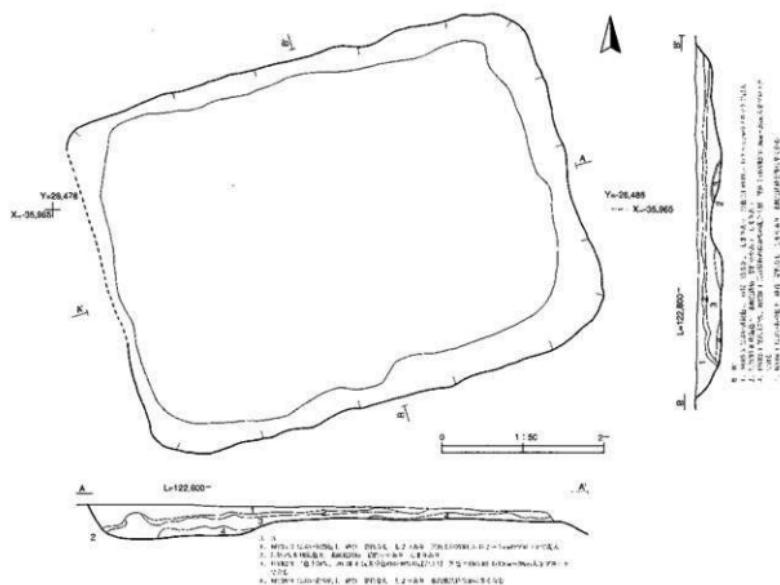
〈規模・平面形〉 形状は長方形を呈し、規模は435×591cmである。

〈埋土〉 上位はにぶい黄褐色土、中位は明褐色土、下位は黒色土、にぶい黄褐色土で構成されている。

〈壁・床〉 壁は緩い立ち上がりで、床面は波を打つように起伏があり、場所による高低差がある。

遺物なし。

時期 墓土状況から中世以降の遺構と考えられる。



第15図 RE01

R G01 溝状遺構

遺構(第16図・写真図版16)

〈位置・重複関係〉 II B区北半に位置する。R G03、R G04と重複し、R G03に切られる。

〈規模・形態・方向〉 規模は上端幅150~110cm、下端幅120~60cm、埋土の深さは5~17cm、両端の高低差は26.4cmで、全長は40mにわたって検出された。断面形は緩いU字状を呈する。方向はほぼ北東~南西で、R A04と平行して流れ南西端で重複し、北東端は消滅する。

〈埋土〉 黒色土の単層である。

遺物(第23図・写真図版23)

〈出土状況〉 42~47はいずれも埋土上~中位からの出土で、42は酸化炎焼成の甕の破片で成形はロクロである。43~46は還元炎焼成の甕で43はロクロ成形で、器面の調整は46が片面、44は両面に叩き目痕が残る。45はロクロ成形の坏で底部の切り離し技法は回転糸切りである。

時期 平安時代と考えられる。

R G02 溝状遺構

遺構(第16図)

〈位置・重複関係〉 II B区北西に位置し、R G03、R G05と重複し、R G03に切られ、R G05を切る。

〈規模・形態・方向〉 規模は上端幅130~70cm、下端幅90~50cm、埋土の深さは4~18cm、両端の高低

差は21.01cmで、全長は約25mにわたって検出された。断面形は緩いU字状を呈する。方向はほぼ東北東—南西で、RG05と平行に延び、RG03に切られた部分で曖昧になっている。

〈埋土〉自然堆積を呈し、上～中位は黒褐色土、下位は黑色土で構成されている。

遺物(第24図・写真図版23)

〈出土状況〉48・49は埋土中から出土したロクロ成形の壺である。48は内黒処理が施されている。

時期 出土遺物から平安時代の可能性がある。

R G03 溝状遺構

遺構(第16図・写真図版16)

〈位置・重複関係〉II B区北半に位置し、RG01、RG02、RG05と重複し、これらを切る。

〈規模・形態・方向〉規模は上端幅140～70cm、下端幅100～40cm、埋土の深さ13～26cm、両端全長は約27.8mにわたって検出された。断面形は逆台形状を呈する。方向はほぼ北～南で遺跡内のすべての遺構を切る。

〈埋土〉黒褐色土の単層である。

遺物(第24図・写真図版24)

〈出土状況〉50～60はいずれも埋土からの出土で、51・52は還元炎焼成の壺の破片で成形はロクロである。

53～60は近世の磁器片で53の底面には「太明年製」の字が書かれている。

時期 出土遺物から現代の遺様と考えられる。

R G04 溝状遺構

遺構(第16図・写真図版16)

〈位置・重複関係〉II B区北半に位置し、RG01と重複するが新旧関係は定かではない。

〈規模・形態・方向〉規模は上端幅50～40cm、下端幅40～12cm、埋土の深さ5～10cm、両端の高低差は1.3cmで、全長は約12mにわたって検出された。断面形はじ字状を呈する。方向はほぼ南西～北東でRA01と平行して流れ、南西端はRG01と重複のため曖昧になり、北東端は削平の影響で消滅する。

〈埋土〉自然堆積を呈し、2層の黑色土層の堆積となっている。

遺物(第25図・写真図版24)

〈出土状況〉61・62はいずれも埋土からの出土で、61は還元炎焼成の壺の破片で表面に叩き目痕がある。

62は酸化炎焼成の壺の破片で成形はロクロである。

時期 不明である。

R G05 溝状遺構

遺構(第16図)

〈位置・重複関係〉II B区北西に位置し、RG02、RG07と重複し、これに切られる。

〈規模・形態・方向〉規模は上端幅75～58cm、下端幅55～38cm、埋土の深さ2～8cm、両端の高低差は3.3cmで、全長は約11.5mにわたって検出された。断面形は緩いU字状を呈する。方向はほぼ西～東で途中、RG02の削平をうける。

〈埋土〉黒褐色土の単層である。

遺物(第25図・写真図版24)

〈出土状況〉 63・64はいずれも埋土からの出土で、63は酸化炎焼成の甕の破片で非ロクロ成形で器面の調整は表面がケズリ、裏面がナデである。64は古錢で『寛永通宝』で全体の劣化は激しく2/3の残存である。
時期 不明である。

R G06 堀跡

遺構(第17図、袋詰図版・写真図版17-18)

〈位置・重複関係〉 I A、II A区にまたがり西側に位置する。R G08と重複し、これを切る。
〈規模・形態・方向〉 規模は上端幅11.2~4.5m、下端幅5.1~3.3m、最深部100cmで、全長は71mにわたって検出された。断面形は逆台形状を呈する。方向は北→南で両端いずれも調査区外へと延びる。
〈埋土〉 全体が黒色～黒褐色土の多層で最下部に灰色土が堆積する。

遺物(第25図・写真図版24)

〈出土状況〉 65・66はいずれもB-B'断面の埋土7層と8層の境から出土した木製品の破片である。
時期 中世の遺構と考えられる。

R G07 堀跡

遺構(第17図、袋詰図版・写真図版19)

〈位置・重複関係〉 I A区南半～II A区東部へと続く。RA12、RG08と重複し、RA12を切る。RG08との新旧関係は明確でない。
〈規模・形態・方向〉 規模は上端幅470~360cm、下端幅320~240cm、深さ95cmで、全長は50mにわたって検出された。断面形は逆台形状を呈する。方向は北→南で北端は調査区外へと延び、南端は50m地点で東へ折れ、さらに44mの地点で北へ折れる。これらはいずれも調査区外に跨っているため、全容が明らかではなく、また、調査区周辺に巡る用水路の影響もあって不明瞭であり、RG07と同一遺構となるかは不明である。

〈埋土〉 埋土は全体的に多数の黒色土層の堆積によって構成され、一部中位に黒褐色土、下位に暗褐色土が堆積している。

遺物(第25図・写真図版24)

〈出土状況〉 67は埋土より出土した還元炎焼成の甕の破片で成形はロクロである。

時期 中世の遺構と考えられる。

R G08 堀跡

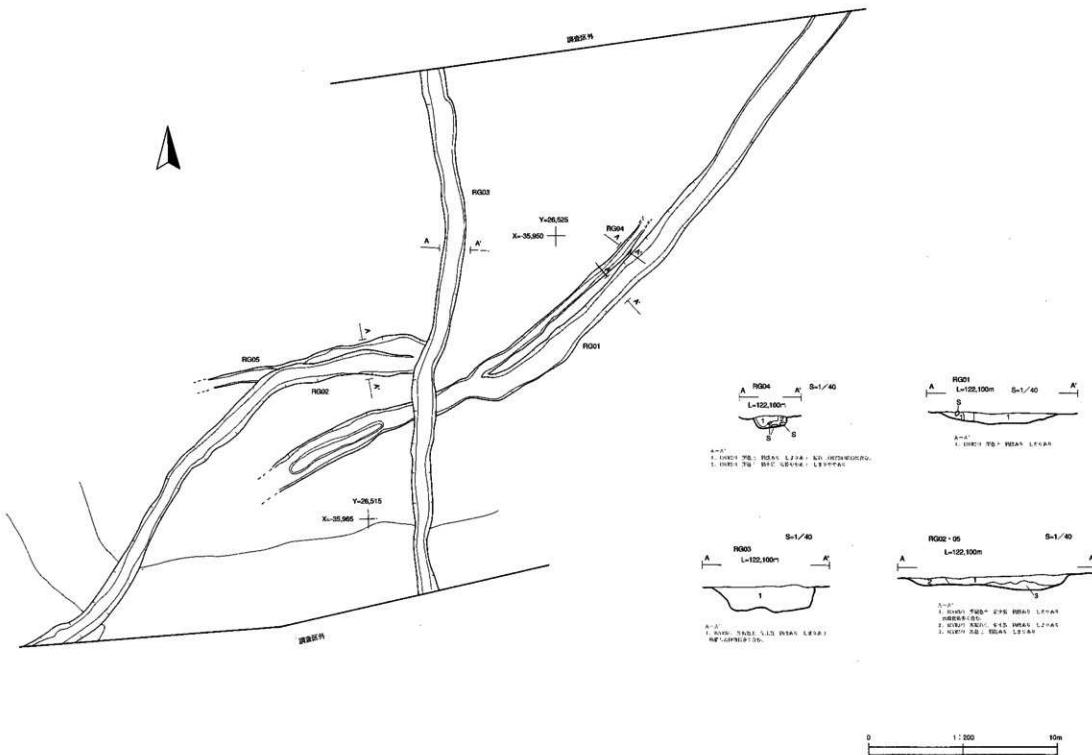
遺構(袋詰図版・写真図版19)

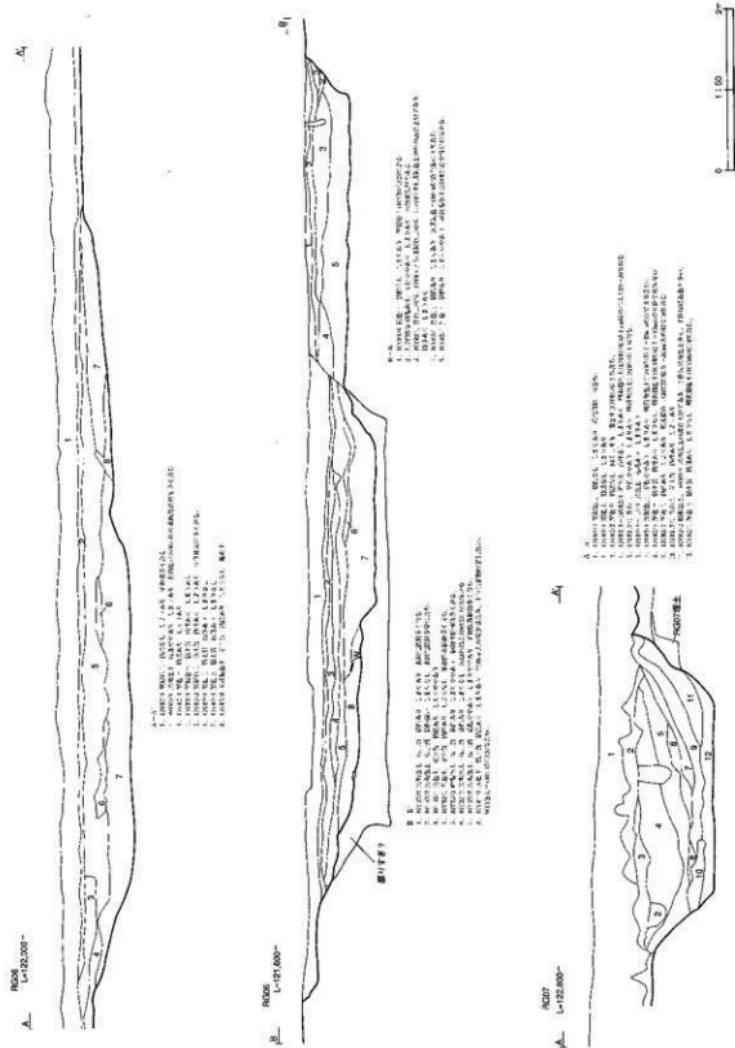
〈位置・重複関係〉 II A、II B区北半に位置し、RG06、RG07と重複する。
〈規模・形態・方向〉 規模は上端幅590~400cm、下端幅460~320cm、深さは西端で52cm、全長は約70mにわたって検出された。方向は西→東で東端はRG06と交わる所を基点とし、そこから西へ4.8mの所で幅約4mの土橋を残している。また東端から西へ20mの地点でRG07と交わり、交点より東は幅が(上端幅で460~320cm)狭くなってしまい、時期の異なる遺構の可能性がある。

〈埋土〉 自然堆積で上位は黒色土と暗褐色土、中～下位は黒色土による構成である。

遺物 なし。

時期 中世の遺構と考えられる。





R Z01 柱穴群

遺構(第18図)

〈位置〉 調査区北半に散在する柱穴状土坑70基を登録、記載した。

〈配列〉 70基のうち規則性のある配列をもつのはP67・P57・P56・P69・P51が柱間約2m(P69・P51間は8m)の列を成している。

遺物 なし。

時期 明確に時期を知り得る資料はないが、周辺からの出土遺物により、近世以降の遺構であると考えられる。

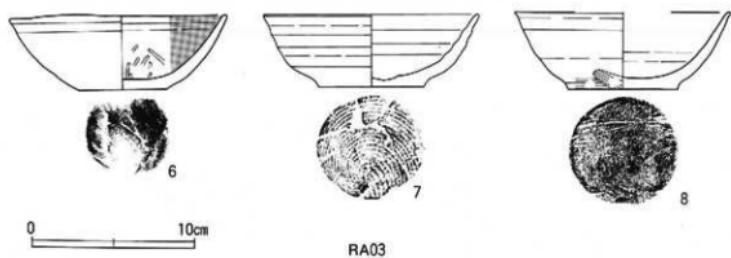
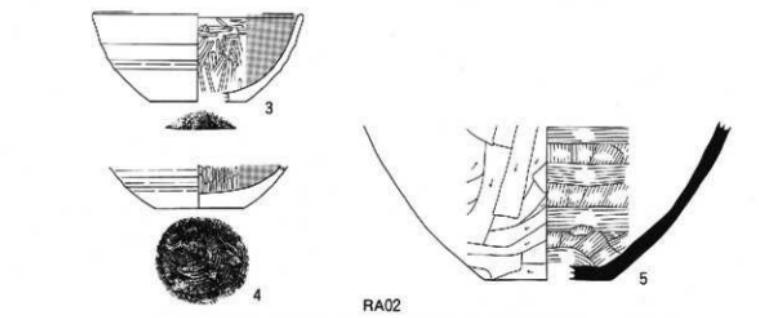
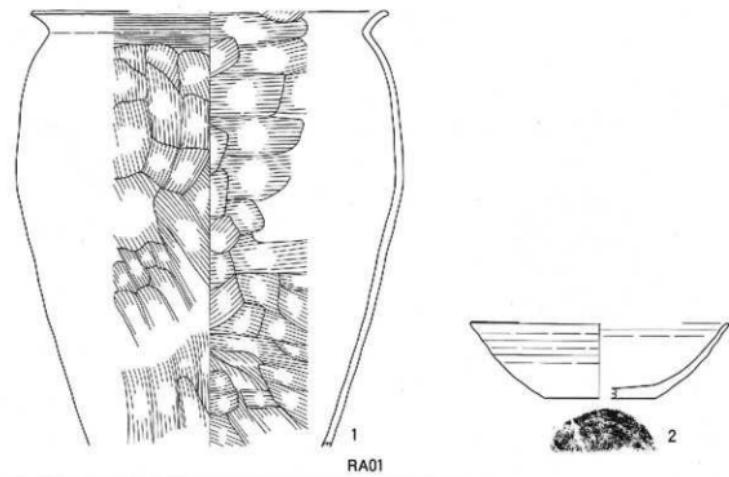
柱穴観察表

P.NO	径(cm)	深さ(cm)	柱痕	備考
1	52×36	31.6		
2	28×22	34.7	有	
3	30×25	34.2		
4	27×25	18.6	有	
5	19×17	14.6		
6	22×21	15.2		
7	25×19	14.3	有	
8	20×18	11.3	有	
9	34×27	14.9	有	
10	32×27	11.1	有	
11	23×21	10.6	有	
12	26×21	18.4	有	
13	29×26	26.3	有	
14	29×25	32.3	有	
15	38×30	16.2	有	
16	24×22	14.2	有	
17	19×16	9.6		
18	22×18	14.0	有	
19	29×26	28.5	有	
20	24×21	12.7	有	
21	24×19	8.0		
22	20×18	11.5	有	
23	23×20	12.2	有	
24	37×29	28.8	有	
25	28×24	11.0	有	
26	30×28	21.8	有	
27	23×22	15.9	有	
28	22×25	16.3	有	
29	24×20	13.2	有	
30	31×24	21.2	有	
31	33×32	21.9	有	しまり弱い
32	38×31	20.5		
33	23×21	26.5	有	
34	22×26	11.2	有	
35	37×32	24.4		

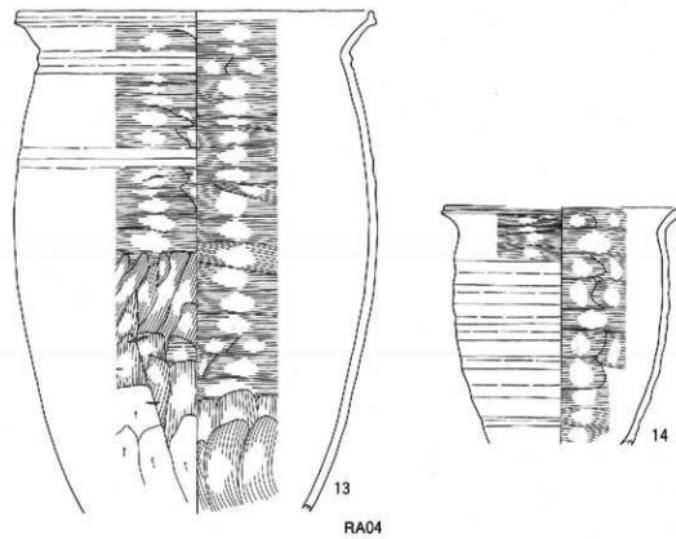
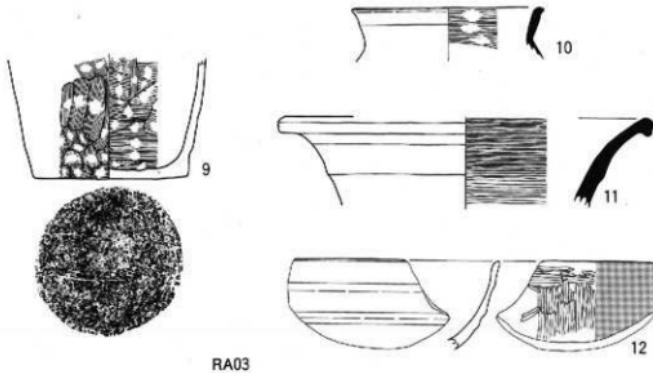
P.NO	径(cm)	深さ(cm)	柱痕	備考
36	40×35	23.4		
37	30×20	15.1		
38	30×28	32.8		
39	27×25	22.8	有	
40	27×23	16.1	有	
41	23×22	13.1	有	
42	30×24	16.9	有	
43	42×37	20.2	有	
44	43×35	4.3		
45	30×26	8.0	有	
46	27×24	18.3	有	
47	40×34	43.1	有	杭痕?
48	35×28	36.1	有	
49	34×30	52.2		
50	43×28	15.5	有	
51	49×38	13.2	有	
52	44×41	21.7	有	
53	44×43	33.7	有	
54	62×42	50.9		
55	48×46	49.3		
56	43×42	50.7	有	
57	42×40	50.7	有	
58	25×23	9.8		しまり強い
59	26×23	17.5		
60	38×32	10.2		
61	52×39	23.6	有	
62	32×30	19.6	有	
63	37×35	33.6	有	底に木片あり
64	27×24	10.1		
65	30×24	17.8		柱痕に礫混入
66	28×26	19.2		
67	53×50	63.7	有	
68	46×44	18.6		
69	50×38	19.8		
70	44×30	37.2		



第18図 R Z01 (柱穴群)



第19図 遺構内出土遺物 (RA01~03)

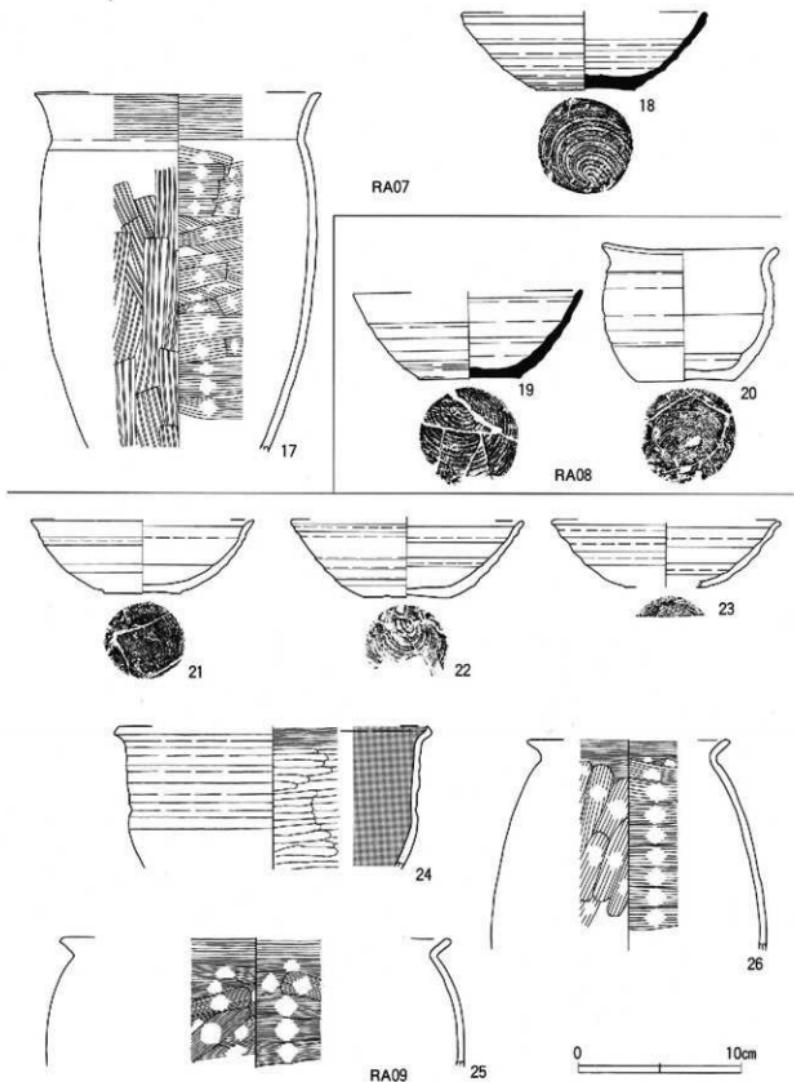


0 10cm

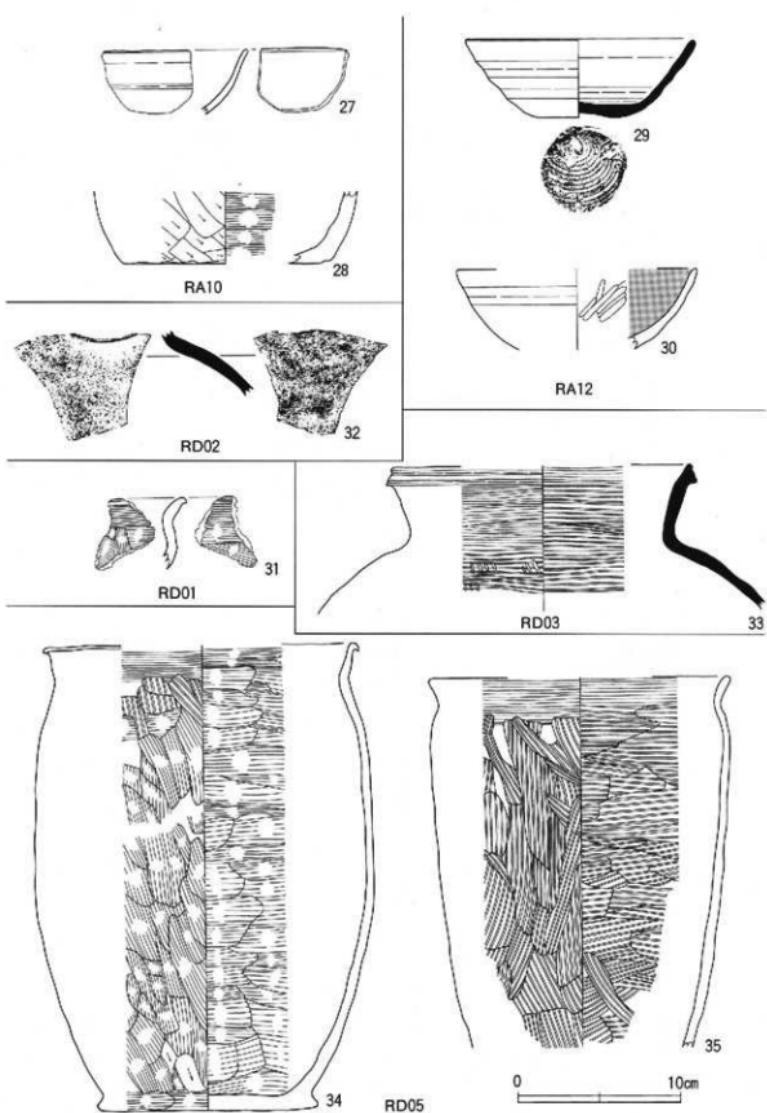
RA05

RA16

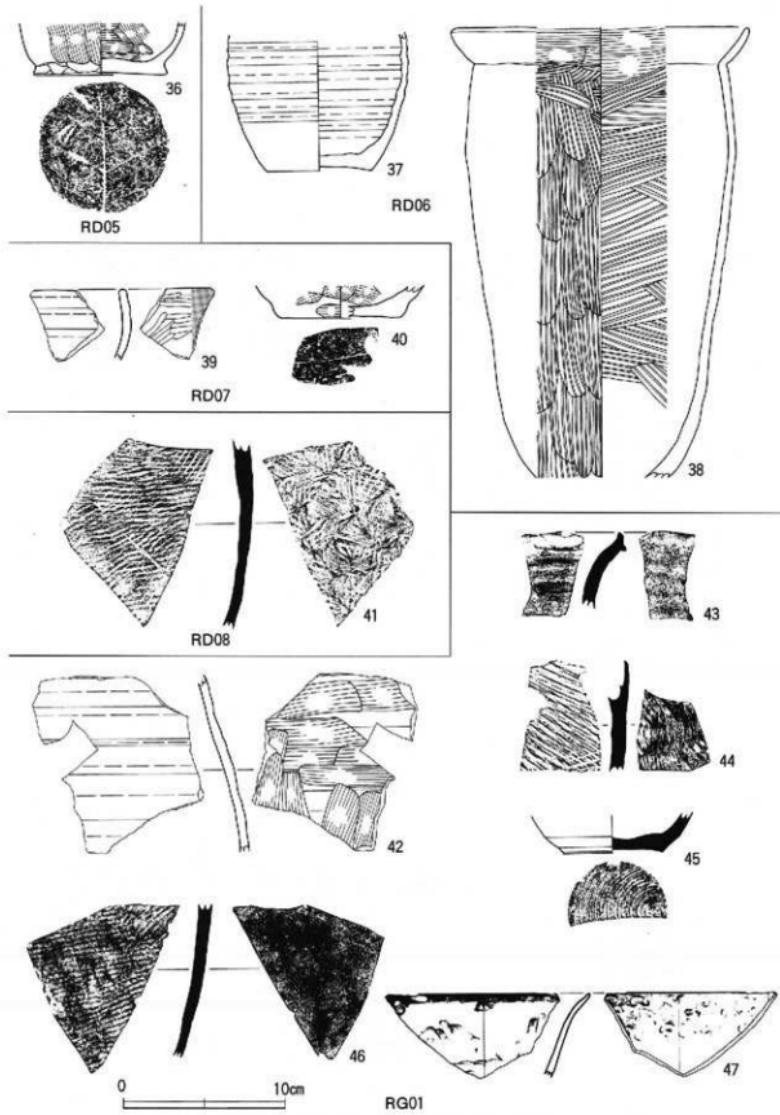
第20図 遺構内出土遺物 (RA03~05)



第21図 遺構内出土遺物 (RA07~09)



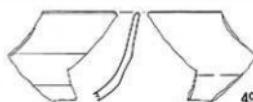
第22図 遺構内出土遺物 (R A10-12、R D01~03-05)



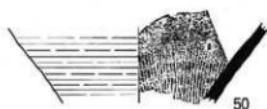
第23図 遺構内出土遺物 (RD05~08、RG01)



RG02



49



50



51



52



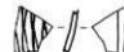
53



54



55



56



57



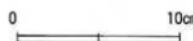
58



59



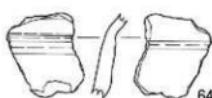
RG03



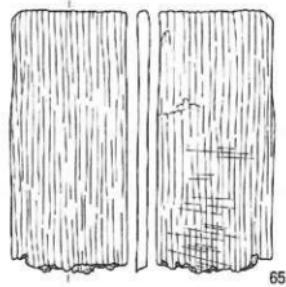
第24図 遺構内出土遺物 (RG02・03)



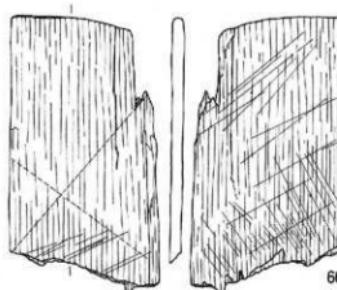
62 RG04



RG05



65



66

RG06



67

0 10cm

RG07

第25図 遺構内出土遺物 (RG04~07)

4. 遺構外出土遺物

遺構外からの出土遺物には土器、陶磁器、土製品、石器、古銭があるがいずれも量は少ない。

土器(第23・24・26図・写真図版23~25)

いずれも平安時代の土器で68・71・72は酸化炎焼成の壺で68は内黒処理、71・72は両面ロクロのみによる調整が施された土器である。底部の切り離し技法は68は切り離し後のナデ調整により不明、71は回転糸切りによる。69・70は還元炎焼成の壺で成形はロクロ、底部の切り離し技法は回転糸切りによる。73は還元炎焼成の壺の山縁部破片で成形はロクロである。

陶磁器(第24・26図・写真図版25)

47はR G01、50・53~60はいずれもR G03出土の陶磁器であるが、遺構本文中の説明がスペース上の都合で不十分であったのでここで補足する。

47は18~19世紀頃の肥前窯磁器で染付鉢の破片である。50は東北在地産の陶器で擂鉢の破片で時期は19世紀である。53・54の磁器はいずれも肥前窯の染付碗で時期は53は18世紀、54は18~19世紀頃と思われる。19は産地不明の磁器片で器種は染付猪口、時期は19世紀前半と考えられる。56は肥前窯の時期で器種は染付瓶、時期は17世紀後半である。57は産地不明の磁器片で器種は四角形の染付皿、型打による製造技法である。時期は19世紀中頃と思われる。58は19世紀頃の東北の在地性磁器で器種は色絵碗である。59は18世紀後半~19世紀初頭の肥前窯磁器の染付香炉と思われ、底部を蛇目高台に作っている。60は20世紀に生産された磁器で口縁無輪の急須であり、遺構の時期はこれを根拠にした。

遺構外からは7点を登録・記載した。74・75は中国産の磁器片で74は染付皿、75は白磁壺である。76は陶器の茶盞片で、産地は不明である。77・78は中国産の磁器片で77は青磁碗、78は青磁壺と思われる。79は磁器で青磁壺の破片と思われ、中国産の可能性があるが詳細は不明である。80は中国産の磁器で青磁壺破片と考えられる。

土製品(第26図・写真図版25)

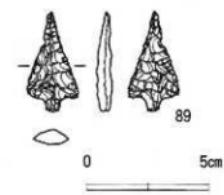
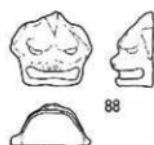
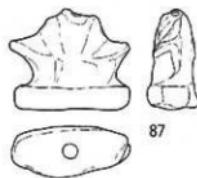
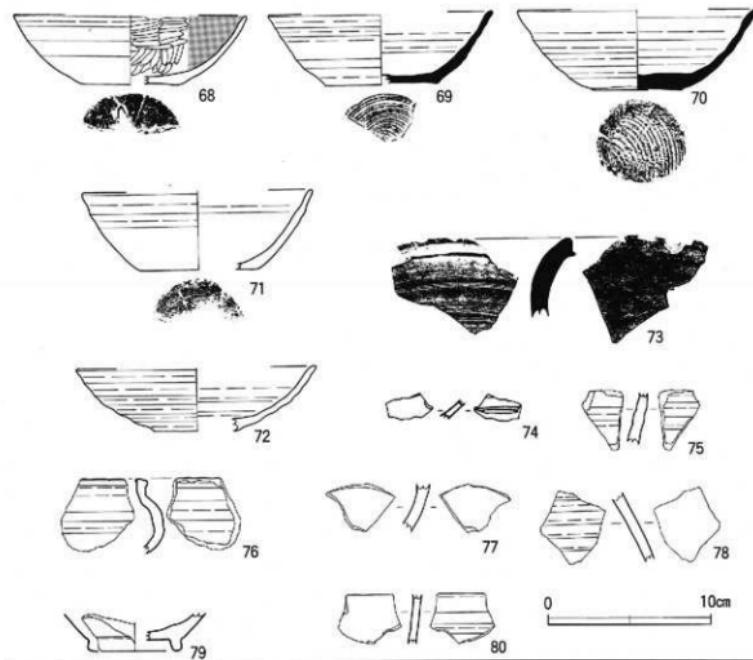
2点が出土した。詳細は不明であるが、近世~近代の遺物と考えられる。87は頭部が欠損し、88は頭部のみ残存する人形である。

石器(第26図・写真図版25)

J B 9 b グリッド第III層下から石鐵1点が出土した。有茎の鉄で長さ2.7cm、幅1.35cm、厚さ0.45cm、重量は0.95gである。

古銭(第26図・写真図版25)

古銭は7点出土し、このうち遺構外から出土したのは6点である。すべて銅銭で銭名は寛永通宝で85が半分欠損している以外はほぼ完形品である。



第26図 造構外出土遺物

土器類觀察表

NO	出土地点	器種	底形	縦断部(内/外)	体部(内/外)	底面(内/外)	口径	底径	器高	分類	備考
1	RA01カマド	土/甕	非	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ	ロナデ//ロナデ	(15.8)	4.7	(6.8)	A II	
2	RA01埴土	土/坏	口	ロナデ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	ミガキ//回糸切	(12.8)	5.5	(6.0)	A I a	内黒
3	RA02埴土	土/坏	口	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	ミガキ//回糸切		5.4		A I a	内黒
4	RA02埴土	土/坏	口	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	ミガキ//回糸切					
5	RA02埴土	須/甕	非	ナデ//ケズリ	ナデ//ケズリ	ナデ//ケズリ	(23.0)	(8.0)	(9.5)	B II	
6	RA03埴土	土/坏	口	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ナデ	(13.6)	5.6	4.7	A I c	内黒
7	RA03床直	土/坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//回糸切	(13.3)	6.6	4.5	A II a	
8	RA03床直	土/坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ナデ	(13.4)	6.8	4.8	A II c	
9	RA03カマド支脚	土/甕	非	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ		9.3		A II	木葉無?
10	RA03床直	須/甕	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ		11.9		B I	
11	RA03カマド袖部	須/甕	口	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ	(23.2)			B I	
12	RA03埴土	土/坏	口	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ				A I	内黒
13	RA04埴直	土/甕	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ケズリ	ロナデ//ロナデ		21.9		A I	器面に炭竹着
14	RA04埴土	土/甕	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	(14.4)			A I	
15	RA05床直	土/坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	(13.6)			A II	
16	RA05壇上	土/坏	口	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	(14.5)	(5.4)	4.2	A I c	内黒
17	RA07床直	土/甕	非	ナデ//ナデ	ハケメ//ハケメ	ロナデ//ロナデ	(17.7)			A II	
18	RA07床直	須/坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	(15.3)	6.0	4.8	B I a	
19	RA08カマド壇土	須/坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	(14.2)	6.2	5.4	B I a	
20	RA08カマド壇土	土/甕	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//回糸切	(10.8)	6.0	8.6	A I	
21	RA09埴土上部	土/坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//回糸切	(14.0)	4.8	4.6	A II a	
22	RA09埴土上部	土/坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//回糸切	(14.3)	5.3	4.8	A II a	
23	RA09埴土上部	土/坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//回糸切	(14.0)	(5.2)	4.2	A II a	
24	RA10壇土中	土/甕	口	ナデ//ナデ	ミガキ//ナデ	ミガキ//ナデ	(19.8)			A I	内黒?
25	RA09カマド壇直	土/甕	非	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ	(24.0)			A II	
26	RA09カマド壇直	土/甕	非	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ	(12.2)			A II	
27	RA10壇土	土/坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ナデ//ケズリ				A II	
28	RA10壇土	土/甕	非	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ	(12.4)			A II	
29	RA12カマド付近	須/坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	(14.4)	5.2	4.9	B I a	
30	RA12貼り床中	土/坏	口	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	(15.0)			A I	内黒
31	RD01埴土	土/甕	非	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ	ロナデ//ロナデ				A II	
32	RD02埴土	須/甕	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ					B I	

※単位はいずれもcmである。

NO	出土地点	器種	成形	口縁部(内/外)	底面(内/外)	口径	底径	器高	分類	備考
33	RD03壙土下部	須/瓶	口	口ナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	(18.3)	13.6	28.8	B I	
34	RD05壙土	土/甕	非	ナデ//ナデ	ハケメ//ナデ	(19.0)	18.3	—	A II	
35	RD05壙土	土/甕	非	ナデ//ナデ	ハケメ//ハケメ	(18.3)	—	—	A II	
36	RD05壙土下部	土/甕	非	—	ナデ//木製板	8.1	—	—	A II	
37	RD06壙土下部	土/瓶	口	ロナデ//回糸切	ロナデ//ロナデ	(17.6)	6.6	—	A I	底筋再調整?
38	RD06壙土	土/瓶	非	ナデ//ナデ	ハケメ//ハケメ	(17.6)	—	—	A II	
39	RD07壙土	土/甕	口	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	(7.3)	—	—	A I	内黒
40	RD07壙土	土/甕	非	—	ナデ//木製板	(7.3)	—	—	A II	
41	RD08壙土	須/甕	瓶	—	—	—	—	—	B II	
42	RG01壙土	土/甕	非	—	—	—	—	—	A I	
43	RG01壙土	須/甕	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	(7.3)	—	—	B I	
44	RG01壙土	須/甕	瓶	—	—	—	—	—	B II	
45	RG01壙土	須/甕	口	—	—	—	—	—	B I	
46	RG01壙土上	須/甕	非	—	ナデ//回糸切	(13.4)	6.2	—	B II	
48	RG02壙土	土/杯	口	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	(13.4)	5.3	3.5	A I b	内黒
49	RG02壙土上	土/杯	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	(7.3)	—	—	A II	
51	RG03壙土	須/甕	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	(7.3)	—	—	B I	
52	RG03壙土上	須/甕	口	—	ナデ//ケズリ	(7.3)	—	—	B I	
61	RG04壙土	土/甕	非	—	—	—	—	—	A II	
63	RG05壙土	須/甕	非	—	—	—	—	—	B II	
64	RG05壙土	土/甕	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	(7.3)	—	—	A I	
67	RG07壙土	須/甕	口	ロナデ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	(14.3)	(5.7)	4.3	A I c	内黒
68	II A Ie III 壇	土/杯	口	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	(13.7)	(6.9)	4.5	B I a	
69	II A II III 壇	須/甕	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	(14.7)	5.4	5.0	B I a	
70	II A II III 壇	須/甕	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	(14.1)	(7.2)	4.9	A II	
71	II B Ia III 壇	土/杯	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	(14.7)	(5.1)	3.9	B I	
72	II B 5d III 壇	土/杯	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	(14.7)	(5.1)	—	—	
73	II B 3d III 壇	須/甕	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	(7.3)	—	—	—	

※単位はいづれもcmである。

陶器點觀察表

NO	出 土 地 点	種 别	器 形	口 径 (cm)	底 径 (cm)	器 高 (cm)	胎 土	產 地·年 代	備 考
47	RG01壤土	磁器	条 付 钵				白色	距前(18-19C?)	/八角?
50	RG03壤上	陶器	指 挑				灰色	東北在地(19C~)	
53	RG03壤土	磁器	条 付 碗	3.3	(1.4)		白色	距前(18C)	臺北「太明年製」
54	RG03壤土	磁器	条 付 碗				白色	距前(18-19C?)	
55	RG03壤土	磁器	条 付 猪口	(5.0)			白色	距前(18-19C?)	
56	RG03壤土	磁器	条 付 瓶				白色	19C 前半	
57	RG03壤土	磁器	条 付 皿	(7.5)	(3.6)	2.2	白色	距前(17C後半)	
58	RG03壤土	磁器	色 絵 碗				白色	19C 中頃	圓角形・點打
59	RG03壤上	磁器	条 付 香炉?	(9.1)	(6.5)	4.45	白色	距前(18-19C)	
60	RG03壤土	磁器	急 須	(7.7)			白色	20C	純白高台
74	II A1c-II層	磁器	条 付 皿				白色	中國	口承無脚
75	II 12c-II層	磁器	瓶器				灰白色	中國	內面無脚
76	I B9a-II層	陶器	白 磁 瓶				灰白色	中國	黑脚
77	II B10c-II層	磁器	茶 杯?				灰 色	中國	
78	II B11c-II層	磁器	青 磁 瓶?				灰 色	中國?	
79	II B1d-II層	磁器	青 磁 瓶?	(5.2)			灰 色	中國	
80	I B9f-II層	磁器	青 磁 瓶?				暗綠灰色		

土器點觀察表

NO	出 土 地 点	長 寸 (cm)	幅 (cm)	厚 寸 (cm)	備 考
87	II A5b-III層	2.7	1.4	3.2	
88	II A5b-III層	2.0	1.1	2.2	

石器觀察表

NO	器 名	出 土 地 点	層 位	長 寸 (cm)	幅 (cm)	厚 寸 (cm)	重量 (g)	備 考
89	石器	I B9 b	III層	2.7	1.35	0.45	0.95	

古錢觀察表

NO	錢名	素材	出土地点	外徑(cm)	內徑(cm)	錢厚(cm)	重量(g)	備考
62	寃水通宝	銅	RG05號:	2.40	0.65	0.6	1.75	1/2次照
81	寃水通宝	銅	II A 2 e	2.20	0.70	0.4	0.90	
82	寃水通宝	銅	II A 5 f	2.45	0.55	0.5	2.10	
83	寃水通宝	銅	I B 8 c	2.35	0.60	0.4	2.05	
84	寃水通宝	銅	I B 8 c	2.27	0.62	0.4	1.30	
85	寃水通宝	銅	I B 8 c	2.21	0.72	0.2	1.05	
86	寃水通宝	銅	II B 1 h	2.19	0.55	0.4	0.80	1/2次照

木製品觀察表

NO	地點	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
65	RG06	堆土6~7層	15.2	7.0	0.6	
66	RG06	堆土6~7層	15.0	9.1	0.6	

5.まとめ

(1)遺構

今回調査を行ったのは第3次調査であるが、同時に実行された第4次調査区が本調査区の中に位置し、両調査区に跨る遺構が多かったことから、遺構に関しては第4次調査区を含めて記載した。

堅穴住居跡

今回の調査で12棟が検出された。詳細は項目別にまとめた。

堅穴住居跡観察表

遺構名	位 置	形 状	規 模	主 軸	埋 土	東 西 南 北
RA01	I B10 i	方形	366×406	S-35°-E	自然堆積を呈し、全体が黒色の粘土質土による構成である。	
RA02	I B8 c	タ	336×364	N-9°-E	上・中位は黒褐色土、下位は黒色土による構成である。	
RA03	II B1 g	タ	296×310	W-33°-N	上位は黒褐色土、中・下位は黒色土による構成である。	
RA04	II B2 f	正方形	330×332	N-30°-E	大半が黒色による構成である。	
RA05	II B2 b	方形	278×306	N-15°-W	全体が粘土質の墨色土による構成である。	R G02に切られる。
RA06	I A6 f	タ	588×613	W-33°-N	自然堆積、全体が墨色土、下部に黒色土が堆積している。	
RA07	I A6 i	?	990×?		自然堆積、上・中位黒・黒褐色土、下位に褐色土が堆積している。	R G07より古い。
RA08	II B3 f	方形	315×348	S-37°-E	全体が墨色土で上位に黒褐色土を含んでいる。	R A10と重複、R A10より新しい。
RA09	I A8 f	タ	592×629	W-4°-N	削平で坪土觀測出来ず	
RA10	II B3 f	タ	268×278	W-9°-N	削平で大半が無いため黒褐色土のみである。	R A08と重複、R A08より新しい。
RA11	I A7 e	?	?		黒褐色土にぶい黄褐色土が混在している。	R G06と重複し、これより古い。
RA12	II A1 j	?	515×?	W-1°-S	自然堆積、大半が暗・黒褐色土、下位にはぶい黄褐色土に構成である。	R G07と重複し、これより古い。

〈占地〉 調査区北西部に大型住居1棟、南半東部に小型住居が占地している。大型住居の構築されている場所は住居床面がシルトで南半東部の住居群の床面は礫層に当たる。またこれ以外の中型住居(RA07, RA12)も調査区中央~北部に分布しており、土地の選択が行われた可能性を考えられる。

〈平面形〉 R A04は正方形、他の住居も短辺と長辺の割合が10%未満ではほぼ正方形を呈している。

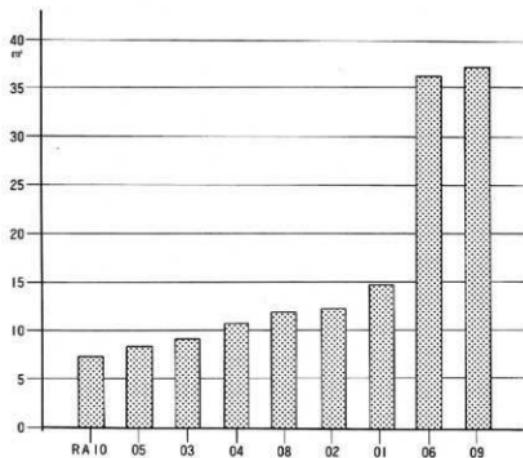
〈規模〉 各住居跡の床面積の分布を表グラフに示した。最大はR A09で37.23m²、最小はR A10で7.45m²、平均値は16.38m²である。平均値を越える住居跡は2棟で、ほとんどの住居跡が平均値より低い。

〈輪方向〉 カマドを持つ竈と直交する線を軸線し、座標値との角度を輪方向としたのが表2である。これをみると、西にカマドを有するもの(I群・RA09・RA10・RA11)、南東にカマドを有するもの(II群・RA01・RA08)、北西にカマドを有するもの(III群・RA03・RA06)、北にカマドを有するもの(IV群・RA02・RA04・RA05)のまとまりがあるのが判る。

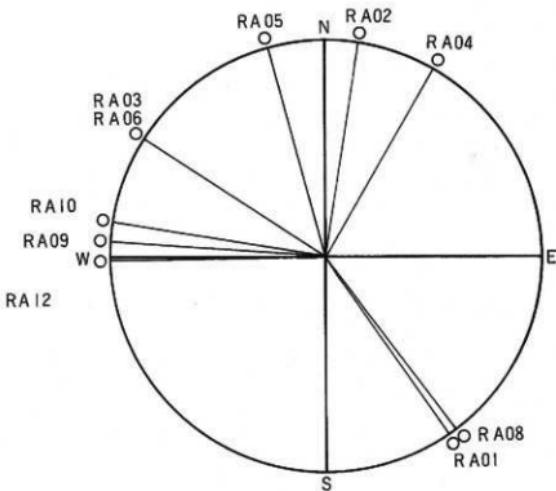
〈壁・床〉 壁の立ち上がりはやや外傾するものと若干内湾ぎみに立ち上がるものとがある。壁の残存高は最高42cm(R A06)、最小はほとんど壁が判らないもの(R A09)で削平の影響によるものである。床は人抵平坦で、床土にはぶい黄褐色土で基本土層の第V層と同じである。またRA01、RA03、RA04、RA08、RA10の床面は小課が散在し、凸凹となっているため、床に他の材を持ち込んで、これを敷いて生活を行っていたものと思われる。

〈柱穴〉 RA09が4基、RA12が2基の柱穴を有する。他はない。

〈カマド〉 RA02以外で重複等により全体が判らないものを除いては、すべてにカマドを有する。構築場所はI群は西壁中央部、II群は南東の左側の共通性をもつことから、同じ時期に構築された住居跡と考えられる。



豎穴住居跡床面積分布図



豎穴住居跡主軸分布図

堀 跡

今回検出した堀跡は3条である。切り合いによる新旧関係から外堀(R G 06)が最後に構築されたことが判った。いずれも遺構は調査区外へと続くため、全容は明らかではないが、規模はR G 06が南北71m、上端幅11.2~4.5m、下端幅5.1~3.3m、最深部は100cm、R G 07が南北50m、上端幅470~360cm、下端幅320~240cm、最深部は95cm、R G 08が東西70m、上端幅590~400cm、下端幅460~320cm、西端部の深さは52cmで堀の断面形はいずれも逆台形状でR G 06の外側壁は緩い立ち上がりとなっている。遺構からの出土遺物はR G 06の埋土中下位から木片2点、R G 07の埋土中からロクロ成形の土師器片が数点出土しているが時期の確定には至らない。

土 坑

7基を検出した。形状はいずれも円・楕円形を呈し、このうちR D 03・R D 05~07は出土遺物から平安時代の遺構と考えられるが、それ以外は不明である。

陥し穴状遺構

調査区北側で2基検出した。形状はいずれも溝状を呈し、規模はR D 08は開口部の長軸172cm、短軸31cm、深さ30cm、R D 09は開口部の長軸251cm、短軸43cm、深さ25cmである。周囲には微量ながら繩文土器、石器も出土しており、御文時代の遺構と考えられる。

溝状遺構

調査区南東部で5条検出された。このうち出土遺物からR G 01は平安時代、R G 03は近世以降の溝跡と考えられる。他は時期を確定できる状況で出土遺物が出土していないことから判別は出来なかった。

(2) 遺物

今回の調査では遺構内外で大コンテナ2箱分の遺物が出土した。内訳は遺構内からは主に平安時代の土師器・須恵器の壺・甕で遺構外からは陶磁器類が出土している。

(a) 分類

分類に当たっては、近辺遺跡の報告書に掲載してある出土遺物の分類にならい、器種と焼成方法、調整技法によって細分した。

器種には壺、高台付壺、甕、壺がある。

A群：酸化炎焼成されているもの。(土師器)

I類・・・内面にミガキ、黒色処理が施されるもの。

a種・・・底部の切り離し技法が回転糸切りで、再調整が施されないもの。

b種・・・切り離し後に再調整が施されるもの。

c種・・・再調整のため切り離し技法が不明なもの。

II類・・・内外面ともロクは痕以外の調整をもたないもの。

a種・・・底部の切り離し技法が回転糸切りのもの。

b種・・・切り離し技法が不明なもの。

B群：還元炎焼成されているもの。(須恵器)

I類・・・底部の切り離し技法が回転糸切りによるもの。

a種・・・底部の切り離し技法が回転糸切りで、再調整が施されないもの。

b種・・・切り離し後に再調整が施されるもの。

c種・・・再調整のため切り離し技法が不明なもの。

〈高台付坏〉

A群：酸化炎焼成されているもの。

I類・・・内面にミガキ、黒色処理が施されているもの。

II類・・・外表面ともロクロ痕以外の調整をもたないもの。

〈壺〉

A群：酸化炎焼成されているもの。

I類・・・ロクロによって成形されているもの。

II類・・・ロクロによって成形されないもの。

B群：還元炎焼成されているもの。

(b)出土量の割合

器種は坏、高台付坏、壺が出土した。

坏は17点を実測、掲載した。A群(酸化炎焼成)は14点、B群(還元炎焼成)は3点である。各群における出土数は、A群I類は6点中、A I aが2点、A I cが2点、底部欠損2点、A群II類8点中、A II aが4点、A II bが2点、底部欠損2点である。B群はI aが3点である。

高台付坏はA IIが1点のみ出土で、両面黒色処理が施されている。

壺は13点を実測、掲載した。A群は10点でロクロ成形が4点、B群は3点でロクロ成形が2点である。これらを構別にまとめたのが下記の表であるが、土器の絶対数が少ないので比較検討は難しい。

土器構成表(R A出土)

遺構名	土 筒 器 (A群)								須 惠 器 (B群)								
	坏				壺		台付坏		坏				壺				
	I	I a	I b	I c	II	II a	II b	I	II	I	II	I	I a	I b	I c	I	II
R A01							1			1							
R A02		2															1
R A03	1		1		1	1			1								2
R A04								2									
R A05			1	1													
R A07							-		1				1				
R A08								1					1				
R A09						3		1									
R A10						1			2					1			
R A12	1																

(3)おわりに

今回の調査で向中野館跡第3次調査区が平安時代の集落跡、中世の館跡の一部であることが確認された。向中野館については『志和軍記』に、中世の時代、この地方を支配下においていた飯岡氏は、1184年(文治5)、源頼朝による奥州征伐に従軍し、功を立てて岩手郡の地頭職に補佐された工藤小次郎行光の末裔と伝えられ、その支配領は「南は湯沢領から赤林村地頭赤林左衛門領まで及び、北は猪去館領、太田館領を経て大釜館大釜奇衛領に至り、東は向中野館向中野金吾領を巡回して三本柳村地頭三本柳四郎衛門領に達していた。」とある。また『飯岡山の今昔歴史』には「飯岡新殿には南館北館に東野文七居住して東の押へとし」の記述がある(北館→東野文七、南館→向中野金吾)。今回の調査で検出された堀跡は南北いずれかの館跡に伴う遺構である可能性を考えられ、今後の調査で更に詳しいことが明らかになるであろう。

〈引用・参考文献〉

岩手県企画開発室(1974)『北上川系開発地域土分類基本高さ一日誌』

岩手県文化振興事業団(1994)『小幡第2次発掘調査報告書』

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第244集

岩手県文化振興事業団(1995)『小幡第4次発掘調査報告書』

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第265集

岩手県文化振興事業団(1998)『大宮北・本宮熊堂△遺跡発掘調査報告書』

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第281集

岩手県文化振興事業団(1999)『本宮熊堂B遺跡第5次・鬼柳A遺跡第4次発掘調査報告書』

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第308集

岩手県文化振興事業団(1998)『小幡第5次・第7次発掘調査報告書』

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第267集

飯岡一郎:『飯岡氏史』

高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正(1982)「岩手の土器」岩手県立博物館

八木光則(1992)古代斯波郡と爾薩体の土器様相 第18回古代城柵会 遺跡検討会

向中野館跡第3次
写真図版



遺跡遠景



遺跡全景

写真図版1 空中写真



遺跡近景 (E→)



基本土層

写真図版2 遺跡近景・基本土層



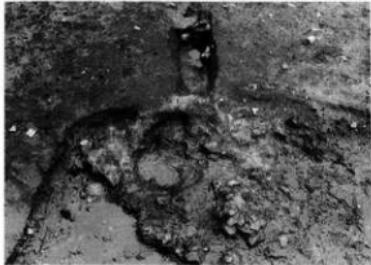
RA01 (平面)



埋土断面 (N-S)



埋土断面 (W-E)



カマド (平面)



カマド煙道部・燃焼部 (断面・E→)

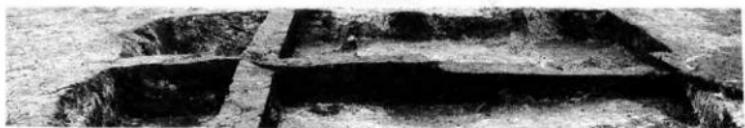


カマド燃焼部 (断面・N→)

写真図版 3 RA01



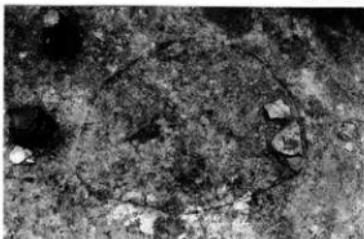
RA02 (平面)



埋土断面 (W-E)



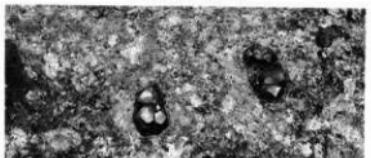
埋土断面 (N-S)



烧土遗構 (平面)



焼土遺構 (断面)



遺物出土状況

写真図版 4 RA02



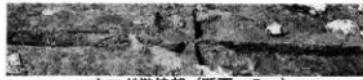
RA03 (平面)



埋土断面 (N-S)



埋土断面 (W-E)



カマド燃焼部 (断面・S→)



カマド燃焼部 (断面・E→)



カマド袖部～燃焼部 (断面)



カマド煙道部 (断面)

写真図版 5 RA03



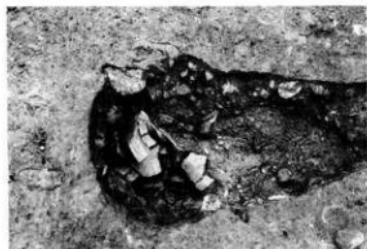
RA04 (平面)



埋土断面 (W-E)



埋土断面 (N-S)



遺物出土状況 (煙出部)



カマド煙道部 (断面)



カマド燃焼部 (断面)

写真図版 6 RA04



RA05 (平面)



埋土断面 (N-S)



カマド (平面)



カマド燃焼部 (断面・S→)

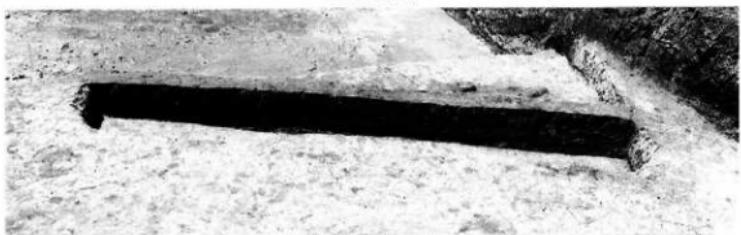


カマド燃焼部 (断面・W→)

写真図版 7 RA05



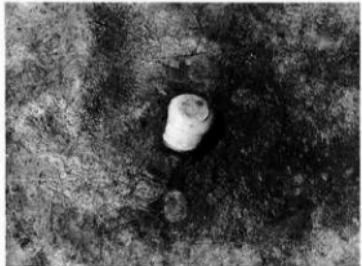
RA07 (平面)



埋土断面 (N-S)



遺物出土状況

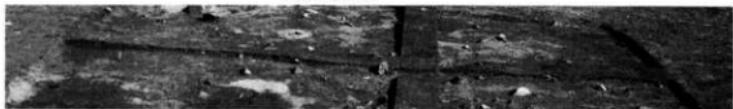


遺物出土状況

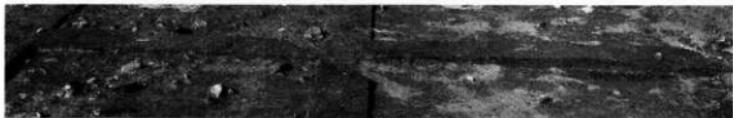
写真図版 8 RA07



RA08 (平面)



埋土断面 (E-W)



埋土断面 (N-S)

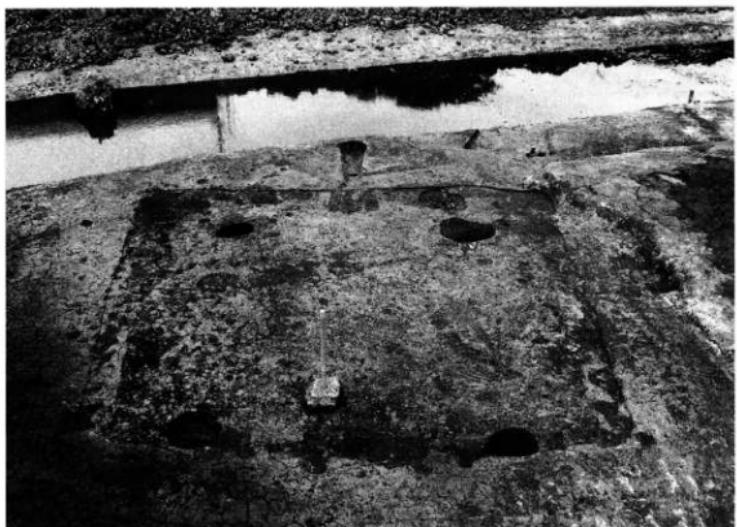


カマド (平面)



カマド煙道部～燃焼部 (断面)

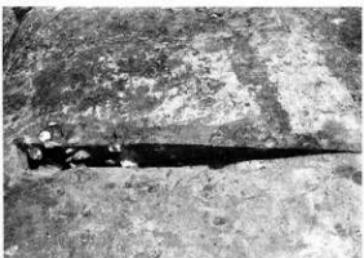
写真図版 9 RA08



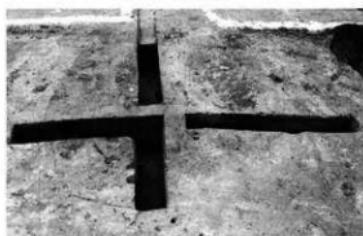
RA09 (平面)



カマド (平面)



カマド煙道部 (断面)



カマド袖部～燃焼部 (断面)

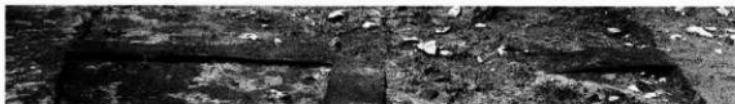


土坑 (平面)

写真図版10 RA09



RA10 (平面)



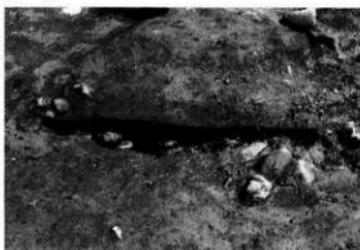
埋土断面 (S-N)



埋土断面 (W-E)



カマド (平面)



カマド煙道部 (断面)

写真図版11 RA10



RA12 (平面)



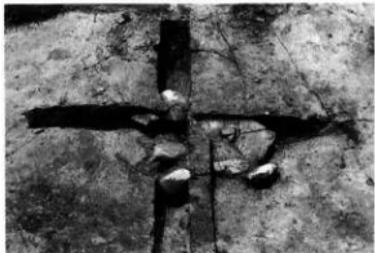
埋土断面 (S-N)



埋土断面 (W-E)



カマド (平面)



カマド袖部～燃焼部 (断面・E→)

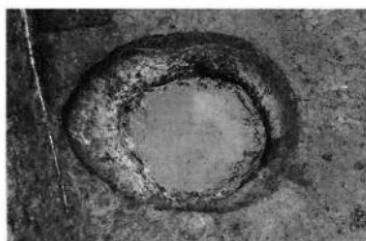
写真図版12 RA12



RD01 (平面)



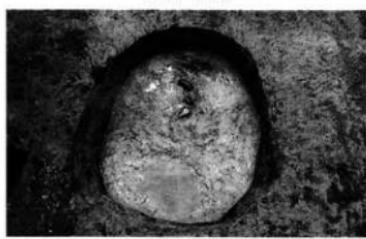
RD01 (断面)



RD02 (平面)



RD02 (断面)



RD03 (平面)



RD03 (断面)



RD04 (平面)



RD04 (断面)

写真図版13 RD01～04



RD05 (平面)



RD05 (断面)



RD06 (平面)



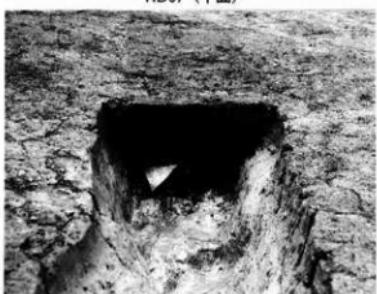
RD06 (断面)



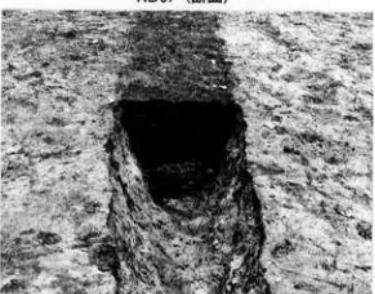
RD07 (平面)



RD07 (断面)



RD08 (断面)



RD09 (断面)

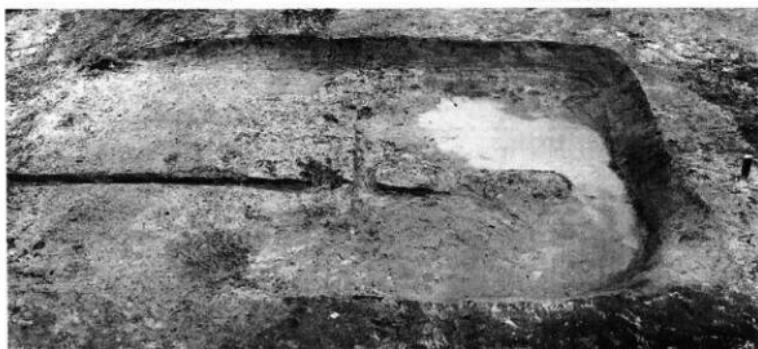
写真図版14 RD05~09



RD08 (平面)



RD09 (平面)



RE01 (平面)



断面 (W-E)



断面 (S-N)

写真図版15 RD08-09、RE01



RG03 (平面 S→)



RG01・04 (平面)



RG03 (断面)

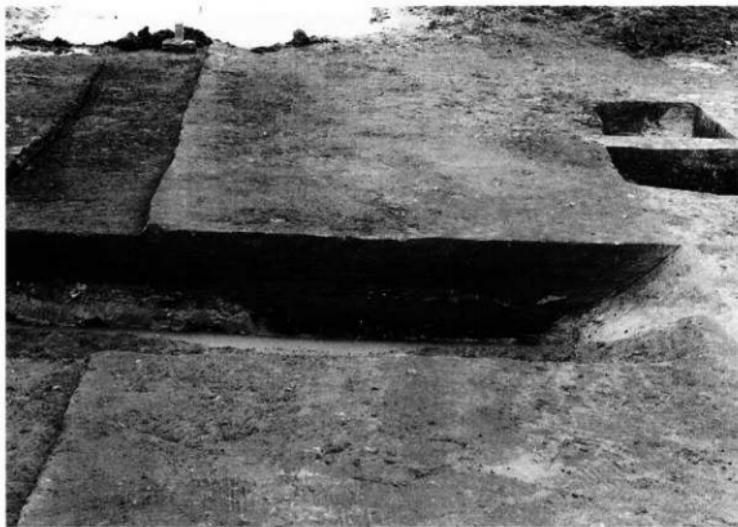


RG01・04 (断面)

写真図版16 RG01・03・04



RG06 (北側・平面)



RG06 (中央部断面)

写真図版17 RG06



RG06（南側・平面）



RG06（南側・断面）

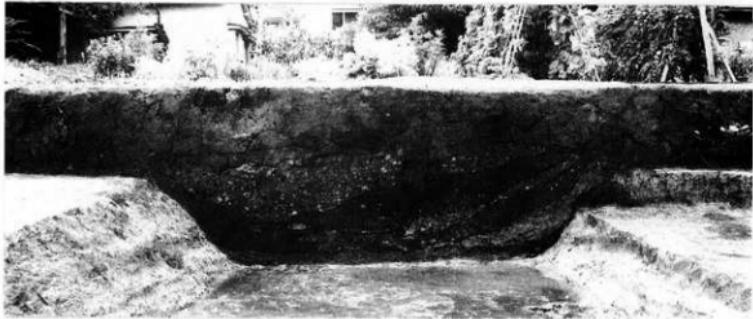
写真図版18 RG06



RG07 (平面)

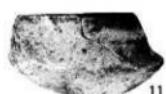
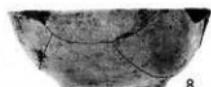
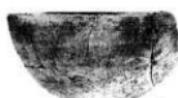
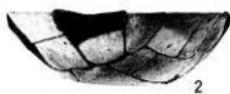


RG08 (平面)



RG07 (断面)

写真図版19 RG07-08

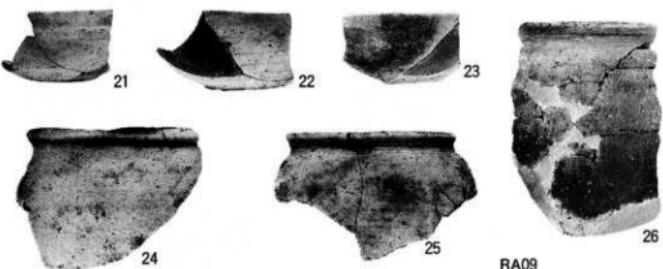


RA03

写真図版20 遺構内出土遺物(RA01~03)



写真図版21 造構内出土遺物(RA04・05・07・08)



RA09



RA10



RD01

RD02 32



RD03 33



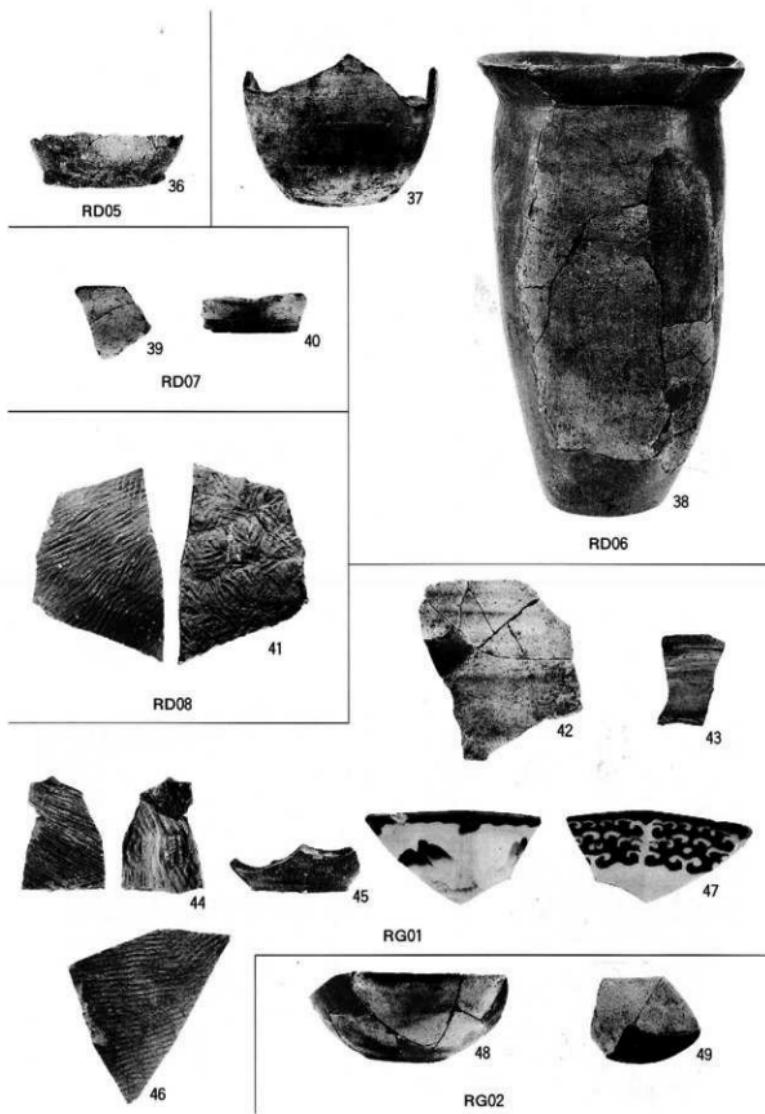
34

RD05

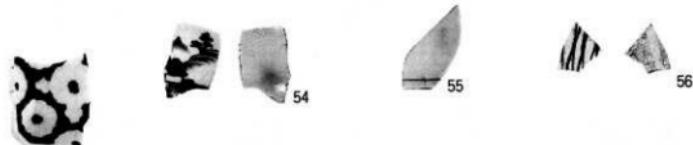
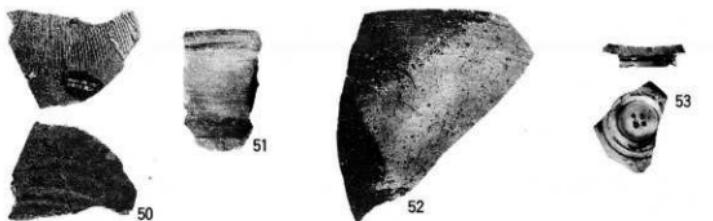


35

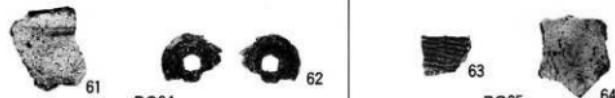
写真図版22 遺構内出土遺物(RA09・10・12、RD01～03・05)



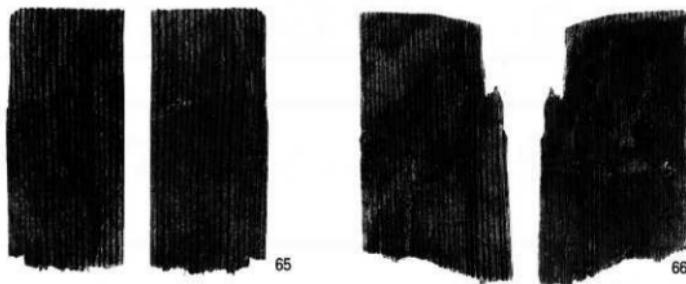
写真図版23 遺構内出土遺物(RD05~08、RG01・02)



RG03



RG04

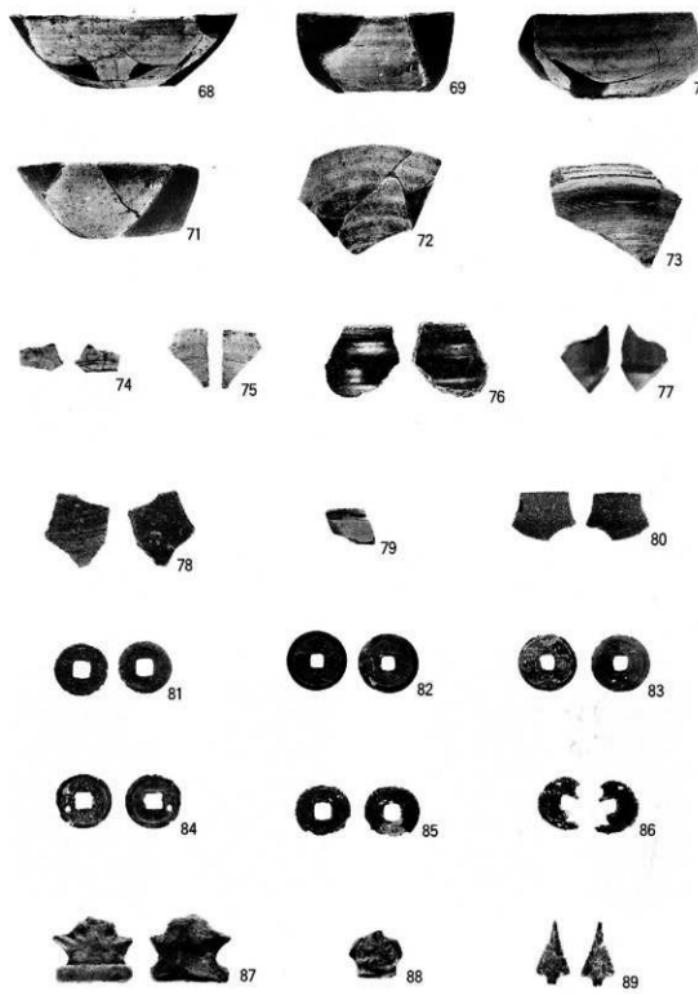


RG05



RG06

写真図版24 造構内出土遺物(RG03~07)



写真図版25 遺構外出土遺物

V. 小幅遺跡第10次調査

所 在 地	盛岡市本宮字小幡88-1ほか
委 託 者	盛岡市
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理
発掘調査期間	平成10年8月17日～10月6日
調査対象面積	529m ²
発掘調査面積	529m ²
遺跡番号・略号	L E 16-2009・OKH-98-10
調査担当者	澁 浩二郎・山口俊規
協 力 機 関	盛岡市教育委員会

1. 遺跡の立地

小幡遺跡は東日本旅客鉄道仙北町駅より西約2.3kmに位置し、零石川によって形成された標高125m前後の河岸段丘上に立地している。調査区の現況は林篠園である。

2. 基本土層

本遺跡は北側が若干標高が高いものの、ほぼ平坦の地形をしており、土層の堆積状況は調査区全体一樣である。よって024D-190グリッドに深掘りをかけ、この南西面を基本土層とした。

第Ⅰa層：10YR3/1 黒褐色土 粘性なし

固くしまる(表土)

第Ⅰb層：10YR2/2 黒褐色土 粘性なし

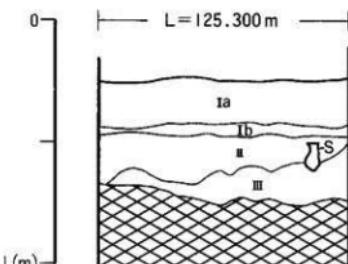
固くしまる 水酸化鉄粒多く含む。

第Ⅱ層：10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあ

り しまりあり(遺構検出面)

第Ⅲ層：10YR3/3 暗褐色土 粘性なし

しまりあり(地山)



第1図 基本土層

3. 検出された遺構と遺物

R A019 竪穴住居跡（正→R A032）

遺構(第2図・写真図版3・4)

〈検出状況・重複関係〉 024D-10Sグリッドに位置する。第Ⅱ層下で検出した。RA020と重複するが、擾乱の影響で新旧関係は曖昧である。

〈形状・規模〉 形状は正方形を呈し、規模は368cm×377cmである。床面積は約13.87m²である。主軸方向はE-5°-Sである。

〈埋土〉 自然堆積で、全体が粘土質の黒色土で構成される。検出面から床面までの深さは5~12cmである。

〈壁・床〉 壁面は緩く内湾して立ち上がる。床は平坦で二次堆積焼上がり3ヶ所に散在している。柱穴はない。

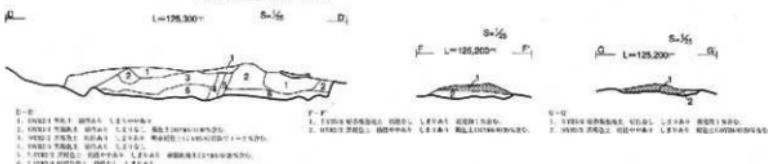
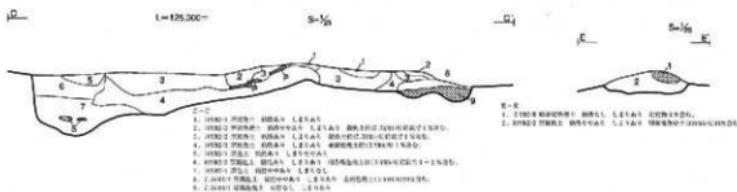
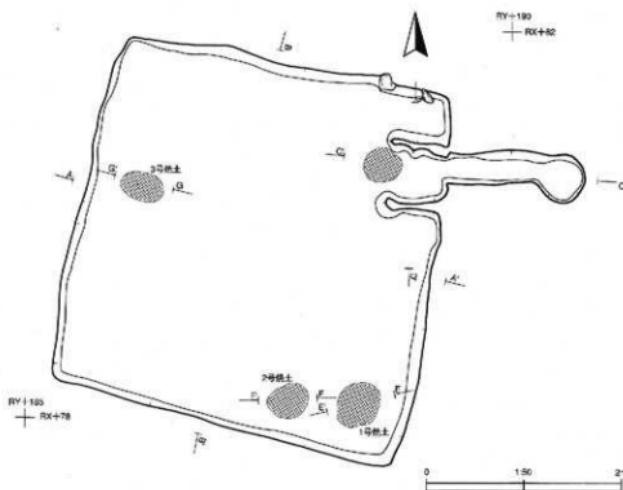
〈カマド〉 東壁のやや北よりに位置する。残存状況はやや良で、袖部は地山と黒褐色土の混合土である。

煙道部は95cmの長さをもつ。煙出し部は径50cmの円形を呈している。

遺物(第11・12図・写真図版10・11)

〈出土状況〉 1・2は酸化炎焼成の壺で1はカマド袖部、2はカマド燃焼部からの出土でいずれもロクロ成形である。1はロクロによる調整のみで、底部は欠損している。2は底面に切り差し技法による回転糸切り痕を残す。3~9は酸化炎焼成の土器器表で4・6・9がロクロ成形である。器形はいずれも胴部に僅かな膨らみをもつスマートである。器面内外の調整はナデを主し、外面は胴部下部にケズリによる調整を施したものもある。10・11は還元炎焼成の壺でいずれもロクロ成形である。10は肩部にロクロ成形前の線位の調整痕が認める。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。



第2図 RA019

R A020 穫穴住居跡 (正→R A033)

遺構(第3図・写真図版5)

〈検出状況・重複関係〉 024D-10nグリッドに位置し、第Ⅱ層下で検出した。R A019と重複するが、攪乱の影響で新旧関係は曖昧である。またR A021とも重複関係にあり、これより古い。

〈形状・規模〉 形状は正方形を呈し、南北507cm、東西は西壁面がR A021に切られており不明である。主軸方向はE-12°-Sである。床面積は残存部分で約17.76m²である。

〈埋土〉 埋土の大半は2層の黒褐色土によって構成されているが、下部に一部黑色土が混入している。検出面から床面までの深さは10-20cmである。また柱痕や木根痕などの攪乱が多い。

〈壁・床面〉 いずれもやや外傾して立ち上がり、床面は堅く平坦である。

〈カマド〉 東壁の北よりに設けられ、煙道部は95cmの長さで径63cmの煙出し部である。燃焼部にはやや掘り込んだ形跡がみられ、褐色焼土粒が1%含まれるが明瞭な燃焼痕は無い。

〈その他〉 カマド脇に土坑が1基ある。円形で規模は71×72cm、深さ71cmで埋土中から土器片が多く出土しており貯蔵穴と思われる。

遺物(第12~14図・写真図版11・12)

〈出土状況〉 12~29が出土した。19・20はカマド燃焼部、17・21は床面直上からの出土である。12~26はいずれも酸化炎焼成の壺である。18は高台付耳で12~21は器面両面ロクロのみの調整で、12~17・19の底面には切り離し技法による回転糸切り痕が残る。22~26は器面に黒色処理を22~24・26は内面、25は両面に施している。27は酸化炎焼成の壺で非ロクロ成形、28・29は還元炎焼成の壺の破片で28は非ロクロ成形で器面の調整は両面叩き目である。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。

R A021 穫穴住居跡 (正→R A034)

遺構(第4・5図・写真図版6・7)

〈検出状況・重複関係〉 024D-11nグリッドに位置し、第Ⅱ層下で検出した。R A020、R A025と重複関係にあり、これらより古い時期の遺構である。

〈形状・規模〉 形状は正方形で、規模は652cm×693cmである。総床面積約45.18m²である。

〈埋土〉 上~中位は黒褐色土、下位は黑色土で構成されている。検出面から床面までの深さは6cm、埋土中には小標が多く含まれる。

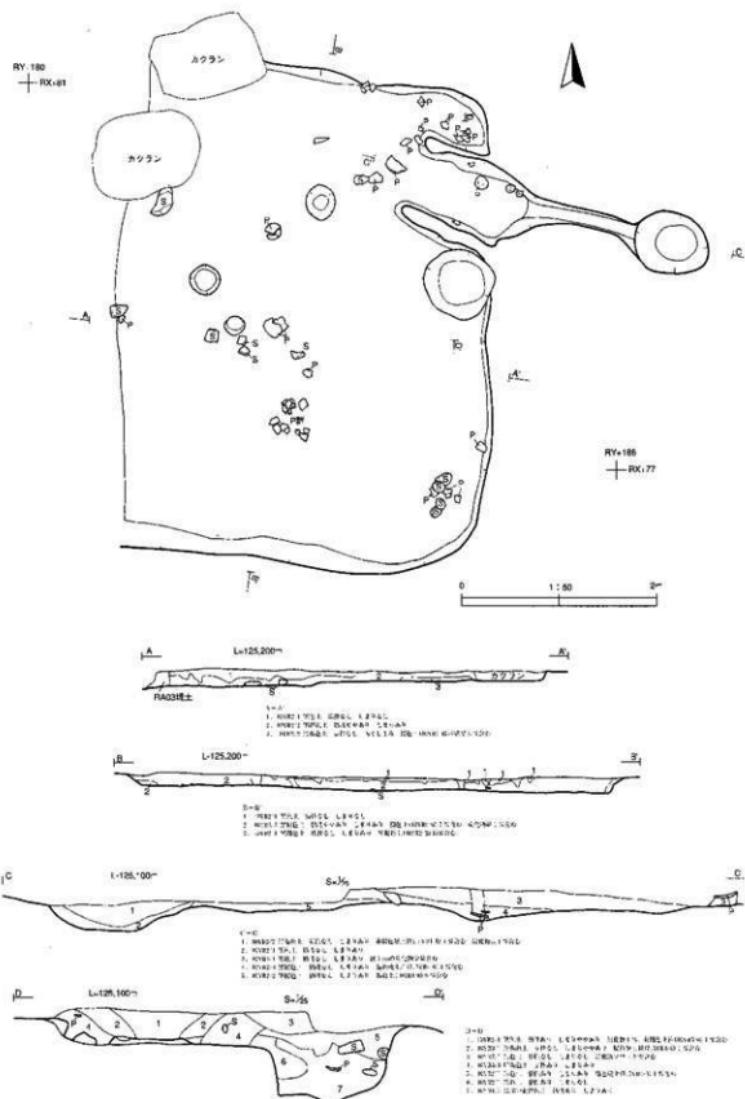
〈壁・床面〉 壁は緩く内湾して立ち上がり、床面は平坦であるが北壁際の面には難が多い。

〈カマド〉 西に2カ所、北に1カ所、南に1カ所の計4カ所に煙道が残り、このうち1号カマド西側1ヶ所に燃焼痕が確認された。いずれも林檎の苗木を植えるために掘ったと思われる攪乱の影響で全体を把握できないが、構造はいずれも割り貫き式で1~3号カマドには燃焼痕が残る。

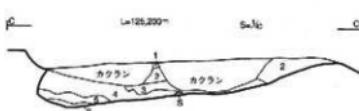
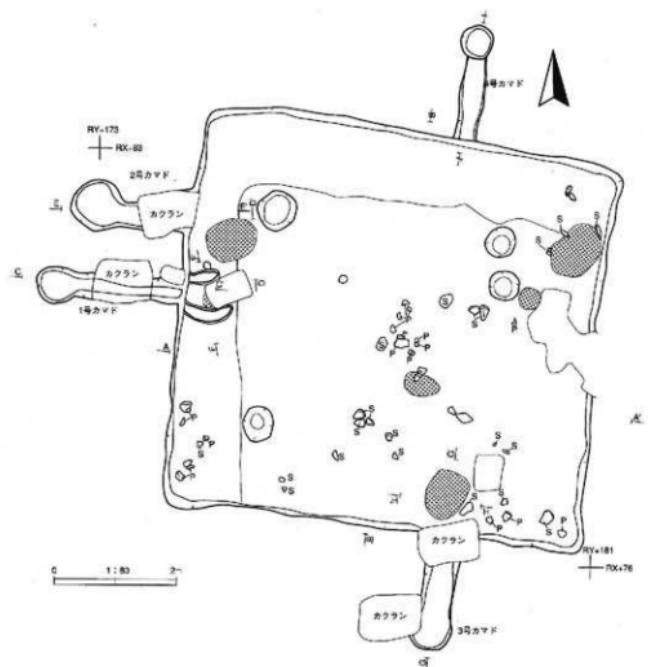
遺物(第14・15図・写真図版13)

〈出土状況〉 30~37は酸化炎焼成の壺で、いずれも成形はロクロである。器面の調整は30~32はロクロのみ、33~37は内黒処理が施されて、底面には切り離し技法による回転糸切り痕をもつ。38・39は還元炎焼成のロクロ成形の壺で39の底面には切り離し技法による糸切り痕が残る。40は還元炎焼成、41~43は酸化炎焼成の壺で41は煙出し部、43は床面直上からの出土である。

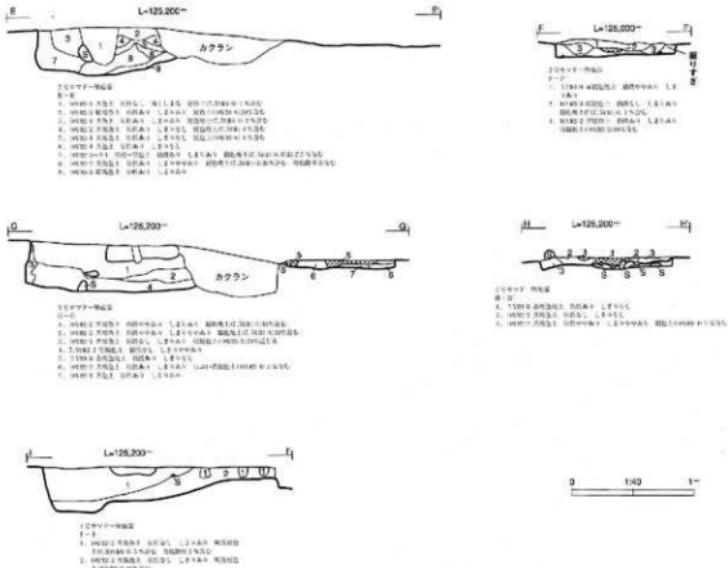
時期 出土遺物から平安時代と考えられる。



第3図 RA020



第4図 RA021



第5図 RA021(断面図)

R A025 穹穴住居跡 (正→R A038)

遺構(第6図・写真図版8)

〈検出状況・重複関係〉 024D-11nグリッドに位置し、第Ⅲ層で検出した。RA021と重複関係があり、これより古い時期に属する遺構である。

〈形状・規模〉 RA021と重複するため、定かではないが形状は正方形と推測される。規模は一辺536cmで総床面積約31.03m²である。

〈埋土〉 黒色土の単層で少量の褐色土を含む。検出面から床面までの深さは4~9cmである。

〈壁〉 壁は内溝ぎみに立ち上がる。

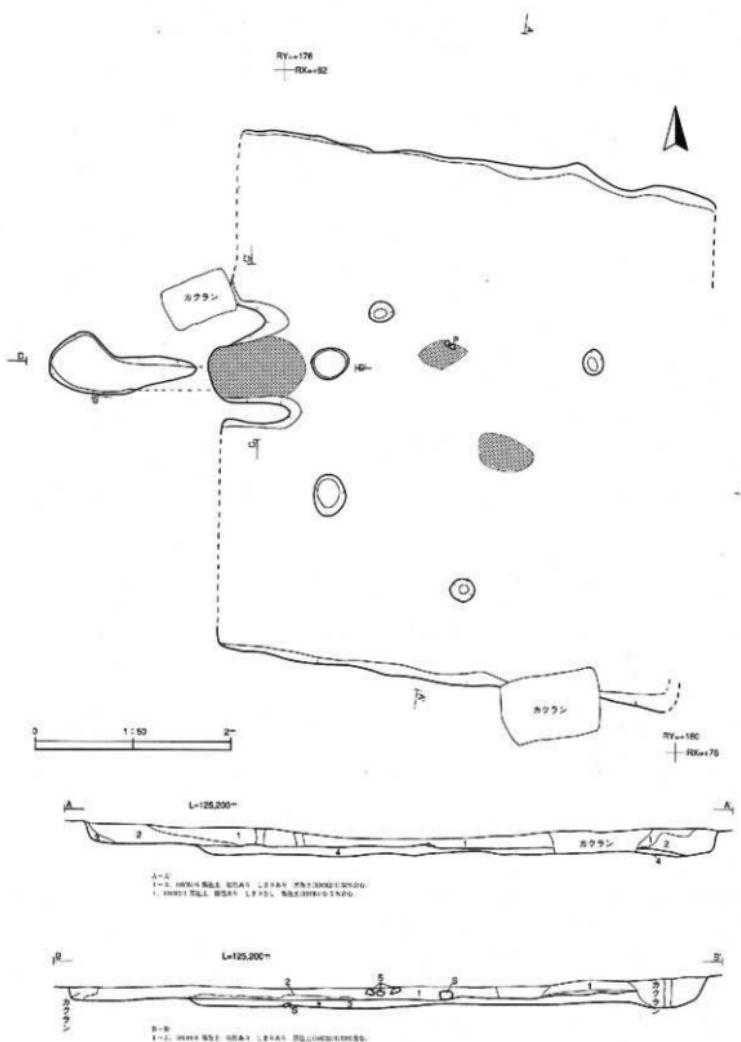
〈床面〉 床面は平坦であるが小礫による凹凸がある。

〈カマド〉 カマドは西壁の中央部に設けられ、割り貫きの構造で煙道部の長さは100cm、煙出し部径は約62cm、煙道部の深さは68cmである。燃焼部の範囲は約100×60cmである。

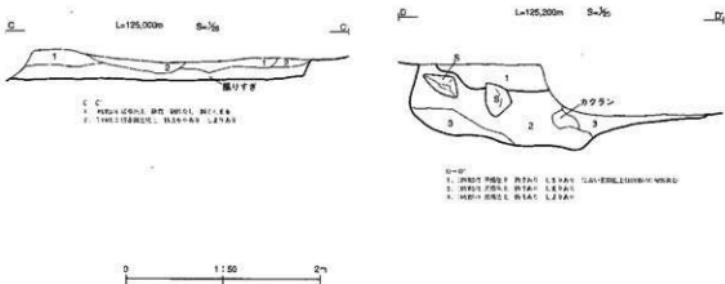
遺物(第16図・写真図版14)

〈出土状況〉 44は埋土下部から出土した酸化炎焼成の灰で内黒処理されており、底面には切り離し技法による糸切り痕がある。45は還元炎焼成の壺の底部破片である。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。



第6図 RA025



第7図 RA025

R G088 溝跡 (正→R G129)

遺構(第8図・写真図版9)

〈位置・重複関係〉 024Dグリッドの北部に位置する。R A023・R A024・R G089と重複関係にある。R A023・R A024を切り、R G089に切られる。遺構はR G089地点を起点として東南東へと延び、搅乱により東端部は消滅している。

〈規模・形状・方向〉 規模は上端幅50~75cm、下端幅25~50cm、深さ30cmで全長約25mにわたって検出された。断面形は鉢状を呈する。方向は西→東で東端部はR G089と重複し、これから西に直進し、西端部の搅乱へと延びている。低面両端の高低差は約14cmである。

〈埋土〉 上～中位は黒褐色土、下位は黑色土による構成である。

遺物(第16図・写真図版14)

〈出土状況〉 46は酸化炎焼成の坏で成形はロクロ、底部の切り離し技法は回転糸切りである。

時期 出土遺物から平安時代の可能性があるが詳細は不明である。

R Z018 柱穴群 (正→R Z022)

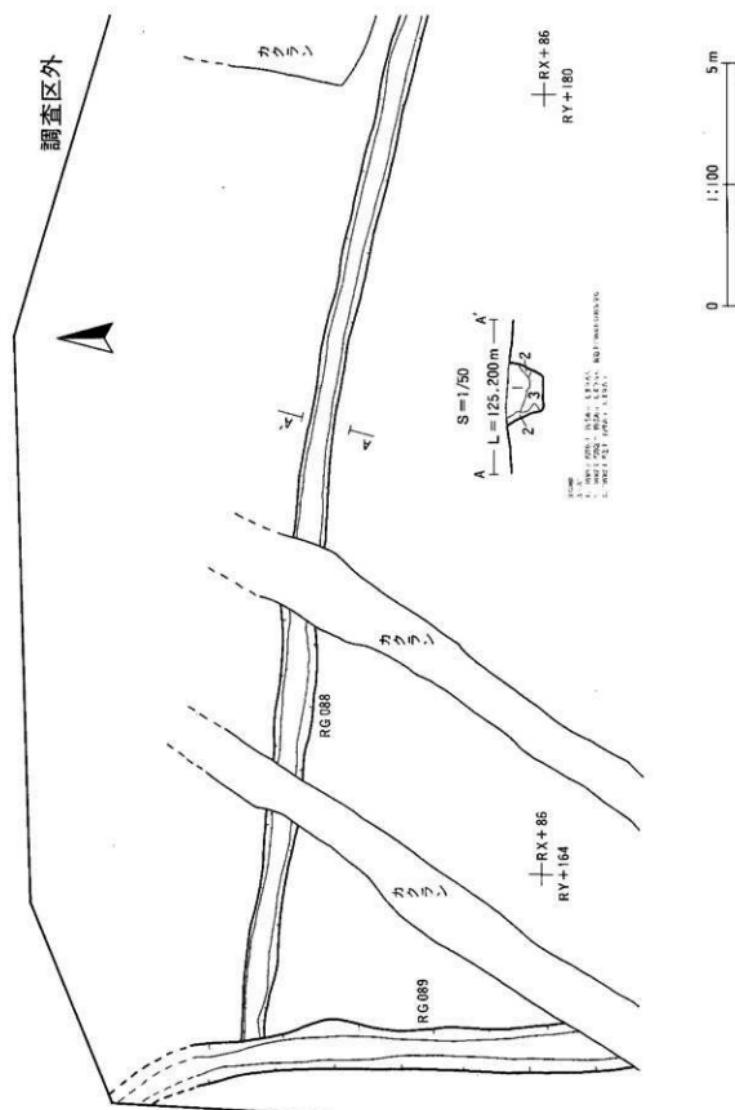
遺構(第9図)

〈位置〉 調査区中央～南部に散在する柱穴状土坑を111基登録、記載した。

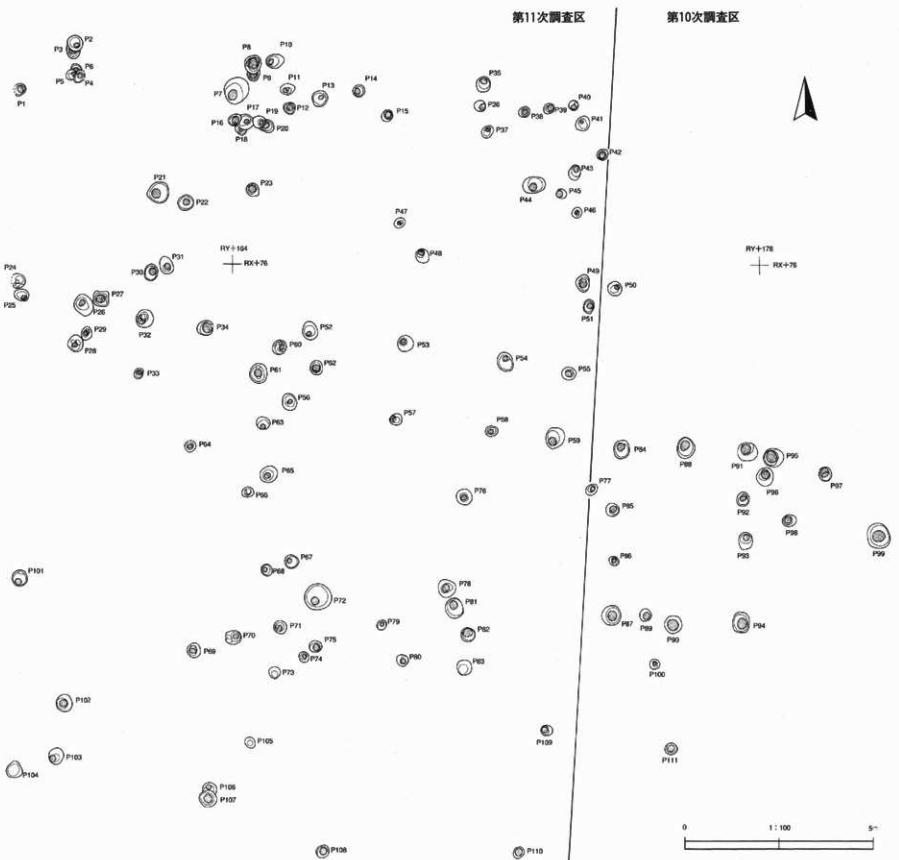
〈配列〉 111基のうち規則性をもつのはP84~P94が2間×3間の建物跡の構造をとっており、規模は3.4×4.5m、延床面積約15.3m²の直屋であり、桁行きの軸方向はN-2°-Eである。他ではP52~P55・P56~P59が柱穴列を成している。他にも規則性をもつ配列があると思われるが、点在する現代の搅乱(植苗痕)によって消滅した柱穴群が調査区西側に統くことから、その結果を観て全体を把握し、検討する必要がある。

遺物 なし。

時期 明確に時期を知り得る資料はないが、周辺からの出土遺物により、近世以降の遺構と考えられる。



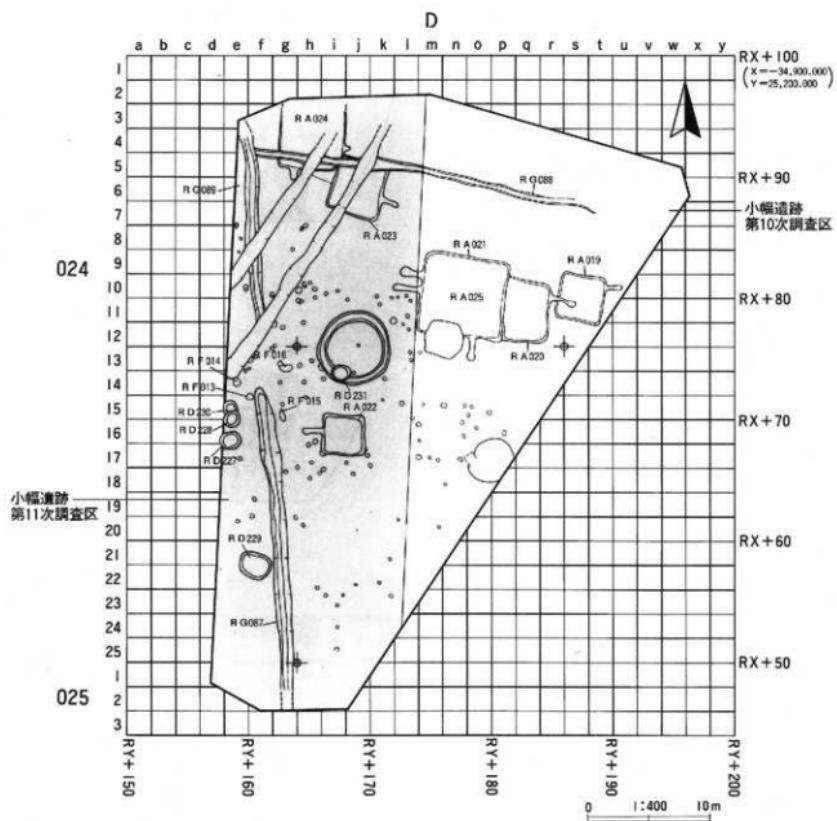
第8図 RG088



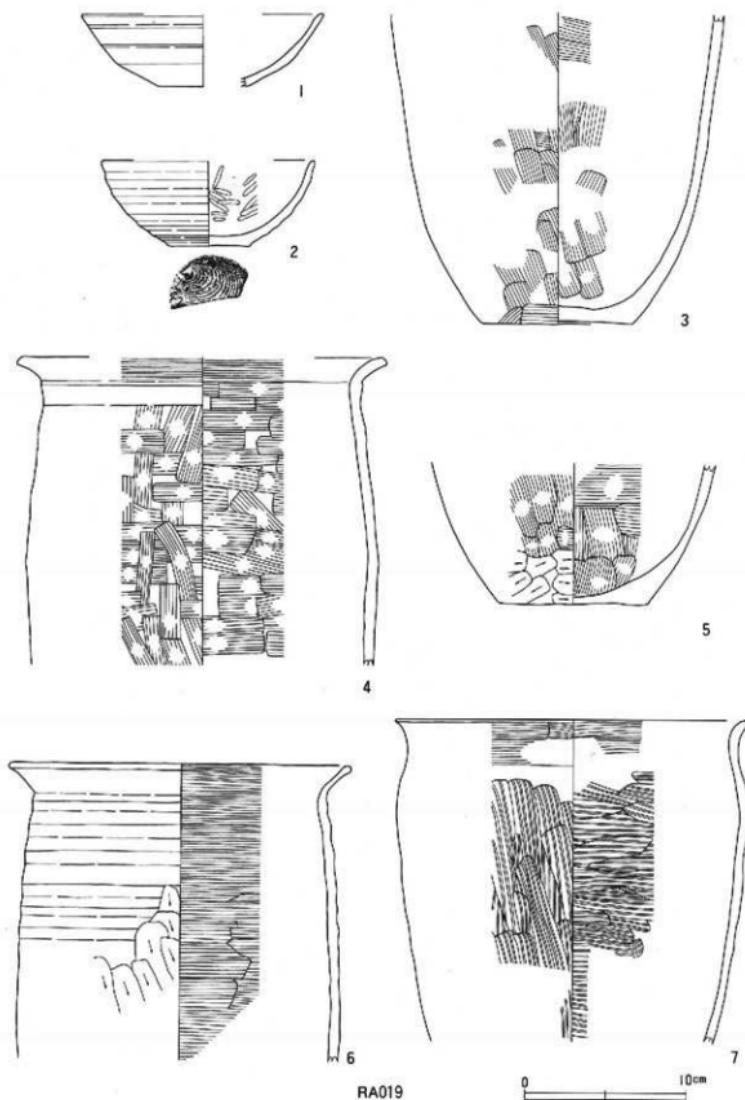
第9図 柱穴状ビット(R Z018)

柱穴観察表

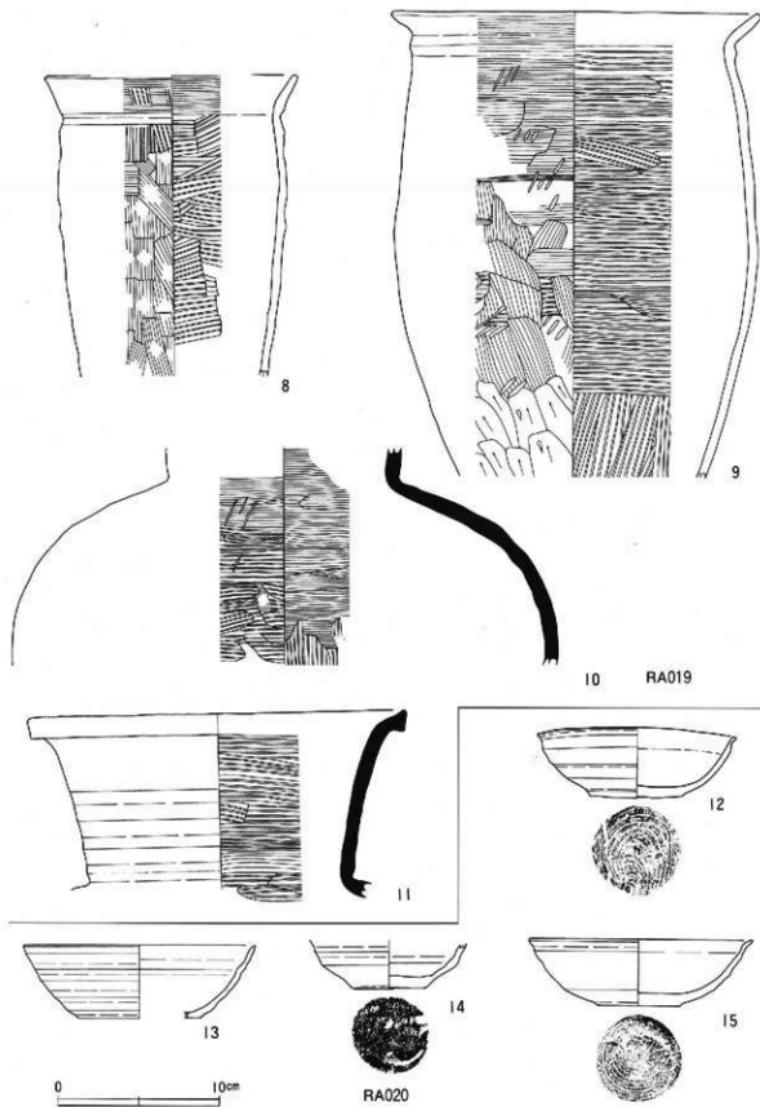
P NO.	径(cm)	深さ(cm)	性状	備考
1	31×26	29.0	有	
2	43×37	53.8	有	径10cmの礫含む。
3	45×40	44.7	有	
4	33×28	39.0	有	径10cmの礫含む。
5	28×25	31.0	有	礫を少量含む。
6	36×24	26.9	有	
7	75×62	44.9	有	径10cmの礫を少量含む。
8	45×43	30.8	有	
9	38×34	31.2	有	
10	51×35	48.5	有	径5cmの大いの礫を少量含む。
11	37×28	36.1	有	小礫を含む。
12	33×29	19.3	有	
13	41×38	32.0	有	
14	31×29	38.8	有	
15	35×28	31.9	有	
16	37×28	33.5	有	
17	51×37	44.7	有	径3~5cmの大いの礫を複数含む しまり弱い。
18	27×21	16.4	有	
19	22×29	34.4	有	
20	45×34	37.0	有	礫を多量に含む。
21	56×53	50.6	有	
22	41×28	41.0	有	
23	39×30	31.4	有	
24	41×38	53.8	有	径10cmの礫を含む。
25	41×32	48.8	有	
26	58×48	49.1	有	
27	41×28	28.0	有	
28	43×42	27.0	有	
29	41×35	24.3	有	
30	41×37	17.5	有	
31	50×33	45.3	有	径10cmの礫を含む。
32	50×47	49.9	有	径10cm程の礫を含む。
33	30×24	24.4	有	
34	41×39	51.1	有	径10cm程の礫を含む。
35	42×37	40.1	有	
36	31×29	52.2	有	径15cmの大いの礫を1点含む。
37	36×27	34.2	有	
38	29×29	47.3	有	
39	30×27	47.3	有	
40	25×21	37.4	有	
41	39×32	38.6	有	
42	31×26	44.2	有	
43	63×31	46.0	有	
44	56×44	46.6	有	
45	30×24	24.4	有	
46	30×26	44.4	有	
47	41×38	29.1	有	
48	37×33	40.8	有	
49	42×35	46.0	有	
50	38×35	42.9	有	
51	38×30	19.9	有	
52	50×42	42.8	有	小礫を少量含む。
53	41×37	41.2	有	
54	50×42	50.3	有	
55	40×32	37.8	有	



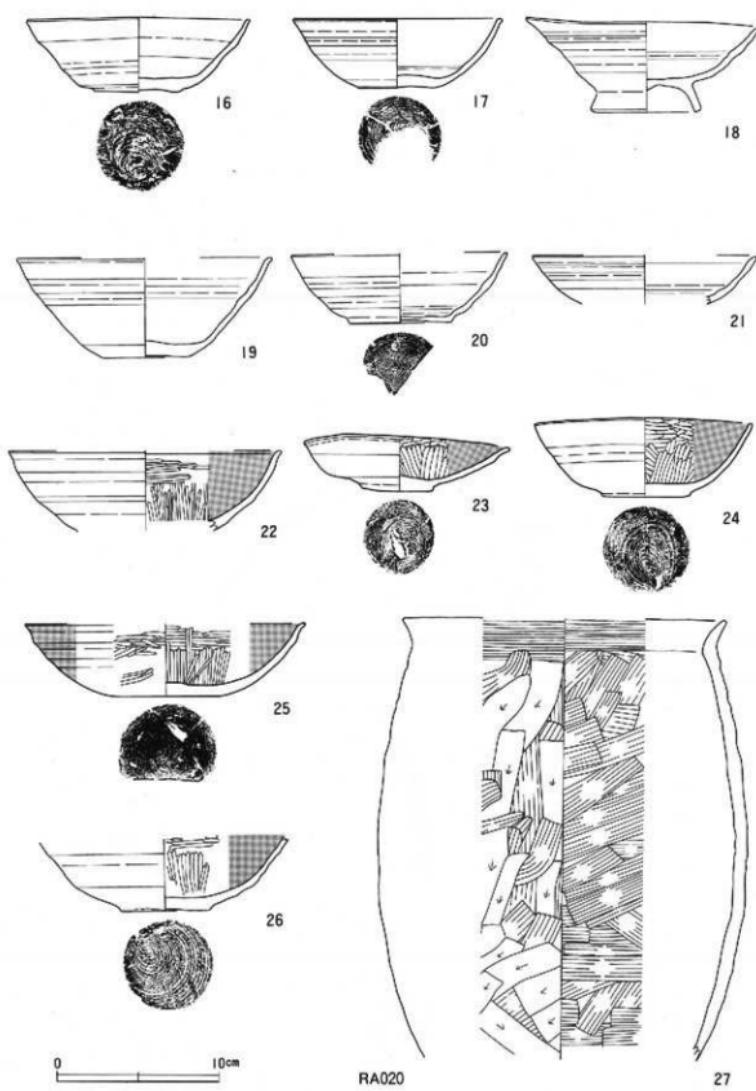
第10図 遺構配置図



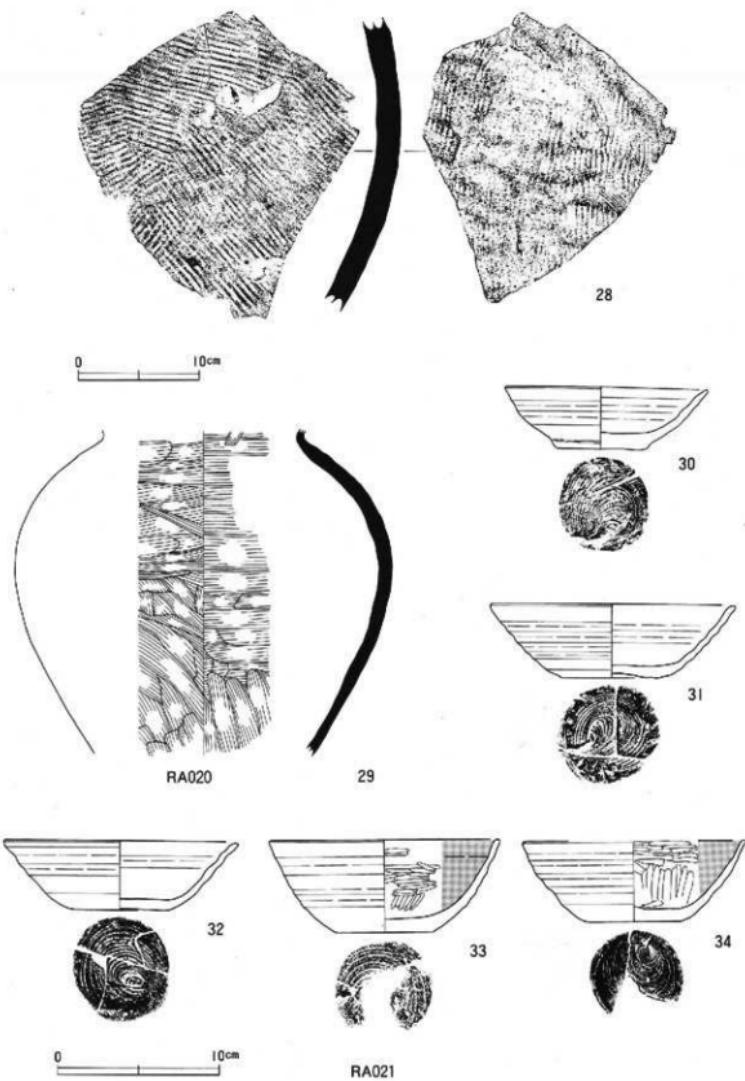
第11図 遺構内出土遺物(RA019)



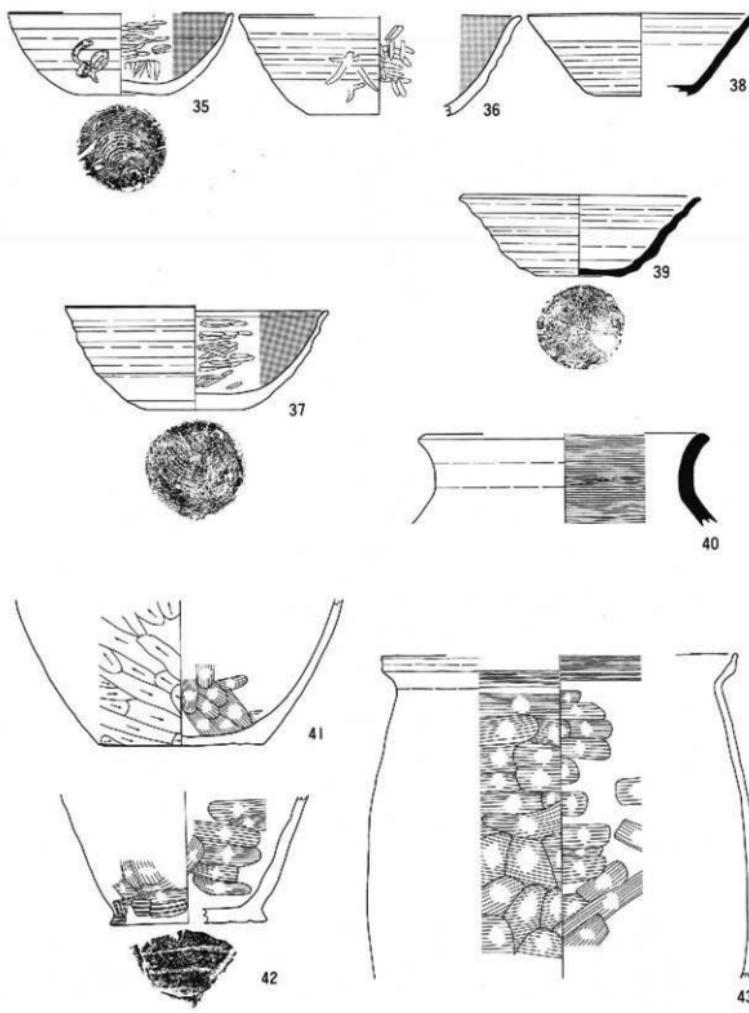
第12図 造構内出土遺物(RA019-020)



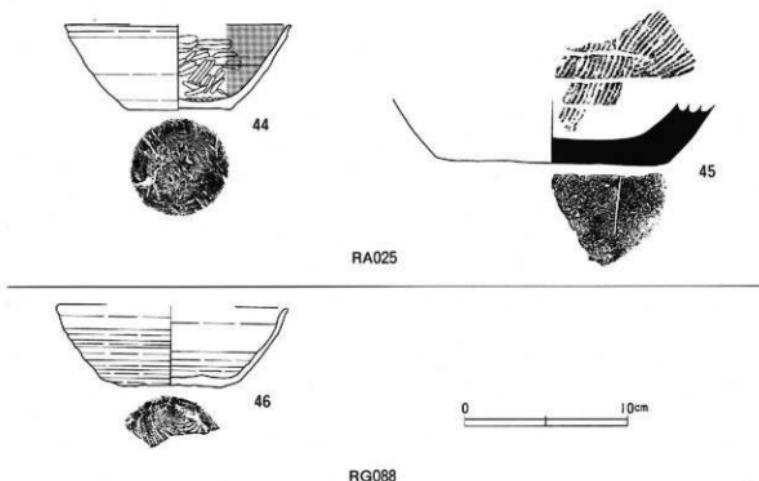
第13図 造構内出土遺物(RA020)



第14図 遺構内出土遺物(RA020-021)



第15図 遺構内出土遺物(RA021)



第16図 造構内出土遺物(RA025、RG088)

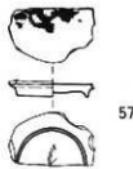
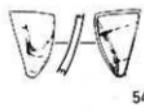
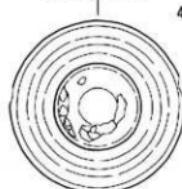
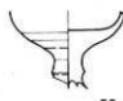
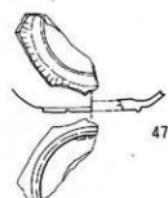
4. 造構外出土遺物

陶磁器(第16図・写真図版15)

47~49はいずれも美濃産の陶器皿で釉薬には灰釉が使われている。49は内面に丸のみによる削ぎが菊花状に施された折縁菊皿で、16世紀後半のものである。

50は大堀相馬産陶器で器種は仏飯器、釉薬には灰釉が使用されている。時期は18世紀である。

51~53はいずれも唐津産陶器で器種は51・52は皿、53は碗である。51の胎土は目積みで白濁の釉が使用されている。時期は51が16世紀末、52・53が16世紀末~17世紀初頭である。54は17世紀後半の肥前産磁器で染付碗である。55は肥前産の陶器で器種は碗、時期は18世紀前半である。56~58は肥前産磁器で器種は56・58は染付皿、57は染付碗である。時期は56が18世紀前半、57が18世紀、58が19世紀と思われる。59は产地不明の陶器で20世紀に属するものである。



0 10cm

第17図 遺構外出土遺物

土器観察表

NO	出土地点	器種	底形	口縁部(内／外)	体部(内／外)	底面(内／外)	口径	底径	器高	分類	備考	
1	RA019カマド桶部	土／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	(15.0)	(5.6)	4.4	△II		
2	RA019カマド焼底部	十／坏	口	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	(13.0)	5.0	5.3	A I a	内黒?	
3	RA019堆上下部	上／堀	非	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ナデ//ナデ	(9.2)			A II		
4	RA019カマド	土／堀	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ナデ//ナデ	(22.4)			A I		
5	RA019カマド桶部	上／堀	非	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ナデ//ナデ	(20.7)	9.2		A II		
6	RA019堆下部	十／堀	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ナデ//ナデ	(20.7)			A I		
7	RA019カマド焼底部	十／堀	非	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ	ハケメ//ハケメ	(21.6)			A II		
8	RA019カマド焼底部	土／堀	非	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ	ハケメ//ハケメ	(15.4)			A II		
9	RA019カマド桶部	土／堀	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ハケメ//ハケメ	(22.4)			A I		
10	RA019カマド桶部	須／堀	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ナデ//ナデ				B I		
11	RA019堆上	須／堀	口	ハケメ//ナデ	ハケメ//ナデ	ロナデ//ロナデ	(28.1)			B I		
12	RA020カマド焼底部	十／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	12.2	5.7	4.3	A II a	
13	RA020堆上	上／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	(14.6)	(7.5)	4.4	A II	
14	RA020堆上中位	土／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ			4.7	A II a	
15	RA020堆上下部	上／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	14.0	5.2	4.1	A II a	
16	RA020堆上下部	土／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	13.8	5.3	4.5	A II a	
17	RA020堆直	上／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	12.9	5.0	4.3	A II a	
18	RA020堆土	十／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	14.2	6.3	5.9	A II	高台付环
19	RA020カマド焼底部	土／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ナデ	ロナデ//ナデ	15.8	5.4	6.5	A II b	
20	RA020カマド焼底部	十／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	(13.2)	(6.4)	4.3	A II a	
21	RA020堆直	土／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	(16.8)			A II	
22	RA020堆土	土／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	12.3	4.5	3.5	A I a	内黒
23	RA020堆土下部	上／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	13.1	5.4	4.8	A I a	内黒
24	RA020堆土中位	土／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	(17.3)	6.0	4.5	A I c	両面黒色
25	RA020堆土下部	十／坏	口	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ			5.5	A I a	内黒
26	RA020カマド桶部	上／坏	口	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ	ミガキ//ロナデ				A II a	
27	RA020堆土下部	上／堀	非	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ	(20.0)			A II a	
28	RA020カマド	須／堀	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ナデ//ナデ	ナデ//ナデ				B I	
29	RA020堆土下部	須／堀	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	12.3	5.5	3.8	A II a	
30	RA021堆直	上／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	15.0	6.0	4.6	A II a	
31	RA021堆直	土／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	14.4	5.7	4.3	A II a	
32	RA021堆直	土／坏	口	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ	ロナデ//ロナデ					

NO	出土地点	器種	成形	部(内／外)	体部(内／外)	底面(内／外)	口沿	底壁	器窓	分類	備考
33	RA021埴土	十／杯	口	ミガキ／ロナデ	ミガキ／ロナデ	ミガキ／回糸切	14.2	6.0	5.7	A I a	内黒
34	RA021埴土	土／坏	口	ミガキ／ロナデ	ミガキ／ロナデ	ミガキ／糸切	(9.3)	5.5	5.2	A I a	内黒
35	RA021床直	土／坏	口	ミガキ／ロナデ	ミガキ／ロナデ	ミガキ／回糸切	(13.7)	5.4	5.1	A I a	内黒、墨青
36	RA021埴土	土／坏	口	ミガキ／ロナデ	ミガキ／ロナデ	(15.8)				A I	内黒、墨青
37	RA021埴土	土／坏	口	ミガキ／ロナデ	ミガキ／ロナデ	ミガキ／回糸切	16.3	6.0	6.4	A I a	内黒
38	RA021床直	須／坏	口	ロナデ／ロナデ	ロナデ／ロナデ	ロナデ／ロナデ	13.8	(6.2)	4.8	B I	
39	RA021カマド燃焼部	須／壞	口	ロナデ／ロナデ	ロナデ／ロナデ	ロナデ／回糸切	6.4	5.2	5.0	B II a	
40	RA021カマド	土／壞	口	ロナデ／ロナデ	ロナデ／ロナデ	(18.0)				B II	
41	RA021カマド煙出部	土／壞	非	ナデ／ケズリ	ナデ／ナデ	ナデ／ナデ				A II	
42	RA021壇上	土／燒	非	ナデ／ナデ	ナデ／ナデ	(9.4)				A II	
43	RA021床直	土／堀	口	ミガキ／ロナデ	ミガキ／ロナデ	(22.4)				A II	
44	RA025壇上下部	土／坏	口	ミガキ／ロナデ	ミガキ／ロナデ	ミガキ／回糸切	(13.7)	6.2	5.6	A I a	内黒
45	RA025埴土	須／堀	非	危険	危険	ナデ／ナデ	(14.0)	(14.0)	B II		
46	RG088埴土	土／坏	口	ロナデ／ロナデ	ロナデ／ロナデ	ロナデ／回糸切	(14.0)	6.0	4.9	A II a	

土器觀察表

NO	出土地点	種別	器種	口径	底径	器高	胎土	底地	年代	備考
47	024D区	陶器	皿						16C	
48	024D-19m	陶器	皿	10.6	5.0	2.7	白色	美濃	15C末-16C	
49	024D-10t	陶器	皿				灰色	美濃	16C後半	
50	024D-11t	伝飯器					大腹相馬		18C	
51	024D-18n	陶器	皿				灰褐色	唐津	16C末	
52	024D-10t	陶器	皿				赤褐色	唐津	16C末-17C初	
53	024D-13g	陶器	瓶	(9.4)		(2.2)	浅黄色	唐津	16C末-17C初	
54	024D-13g	磁器	染付碗				白色	肥前	17C後半	
55	024D-18n	陶器	碗				灰色	肥前	18C前半	
56	024D-13g	磁器	染付皿			4.5	(1.0)	灰白色	肥前	18C前半
57	024D-11t	磁器	染付碗						肥前?	18C?
58	024D-18n	陶器	皿				白色		19C?	
59	024D-11t	陶器				(6.0)	白色		20C	

*単位はすべてcmである。

5.まとめ

(1)遺構

堅穴住居跡

〈住居〉 今回の調査で検出された平安時代の堅穴住居跡は4棟で、これらは重複している。遺構別の詳細は以下の観察表に記した。

堅穴住居跡観察表

遺構名	位 置	形 状	規模(cm)	半 軸	総床面積	埋 土	重複関係
R A019	024D-10s	正方形	368×377	E-5°-S	18.87m ²	自然堆積を呈し、全体が黒色の粘土質土で構成されている。	RA020と重複するが、擾乱のため新旧関係は不明である。
R A020	024D-11g	+	507×?	E-12°-S	(17.76)m ²	上～中位は黒褐色土、下位は黒色土による構成である。	RA021と重複し、これより古い。
R A021	024D-11n	+	652×693		45.18m ²	上位は黒褐色土、中～下位は黒色土による構成である。	RA020、RA025と重複し、これより新しい。
R A025	024D-11n	+	580×535	W-17°-N	31.20m ²	自然堆積、上～中位黒～黒褐色土、下位に褐色土	RA021と重複し、これより古い。

〈カマド〉

カマドの芯材にはR A019・R A020は壁からの削り出し+持ち込みの土や土器片による補強で、R A021はカマドの構築跡が4カ所にあったが1・4号カマドは袖が残っておらず、2号カマドは壁からの削り出し、3号カマドは袖は残っておらず芯材の一部に使用されたと思われる縁が1点あった。

溝状遺構

R A088の1条である。方向は西～東で西端は第11次調査区から始まり、搅乱によって消滅する。出土遺物は平安時代に属する酸化炎焼成の壺が1点あるが、流れ込みの可能性も考えられ、時期の判断はできない。

(2)遺物

今回の調査では遺構内外で大コンテナ2箱分の遺物が出土した。内訳は遺構内からは主に平安時代の土師器・須恵器の壺・甕で遺構外からは陶磁器類が出土している。

(a)分類

分類に当たっては、これまでの本遺跡出土遺物の分類にならい、器種と焼成方法、調整技法によって細分した。

器種には壺、高台付壺、甕、並がある。

A群：酸化炎焼成されているもの。(土師器)

I類・・・内面にミガキ、黒色処理が施されるもの。

a種・・・底部の切り離し技法が回転糸切りで、再調整が施されないもの。

b種・・・切り離し後に再調整が施されるもの。

c種・・・再調整のため切り離し技法が不明なもの。

II類・・・内外面ともロクロ痕以外の調整をもたないもの。

a種・・・底部の切り離し技法が回転糸切りのもの。

b種・・切り離し技法が不明なもの。

B群：還元炎焼成されているもの。(須恵器)

I類・・・底部の切り離し技法が回転糸切りによるもの。

a種・・底部の切り離し技法が回転糸切りで、再調整が施されないもの。

b種・・切り離し後に再調整が施されるもの。

c種・・再調整のため切り離し技法が不明なもの。

〈高台付坏〉

A群：酸化炎焼成されているもの。

I類・・・内面にミガキ、黒色処理が施されているもの。

II類・・・内外面ともロクロ痕以外の調整をもたないもの。

〈壺〉

A群：酸化炎焼成されているもの。

I類・・・ロクロによって成形されているもの。

II類・・・ロクロによって成形されないもの。

B群：還元炎焼成されているもの。

(b)出土量の割合

器種は壺、高台付坏、壺が出土した。

壺は28点を火源、掲載した。A群(酸化炎焼成)は26点、B群(還元炎焼成)は2点である。各群における出土数は、A群I類は12点中、A I a 9点、A I c 1点、底部欠損2点、A群II類14点中、A II a 9点、A II b 1点、底部欠損2点である。B群はI aが1点、底部欠損が1点である。

高台付坏は1点でA IIが1点のみの出土である。

壺は17点を実測、掲載した。A群は11点でロクロ成形が4点、B群は6点でロクロ成形が4点である。

(c)壺の分析

表にはRA020とRA021から出土したA I aとA II aの口径・器高・底径・器高の分散図を示した。

なお作図には反転実測による推定値は取り上げていない。

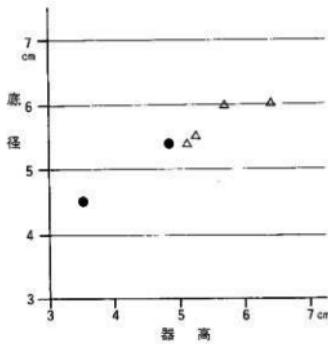
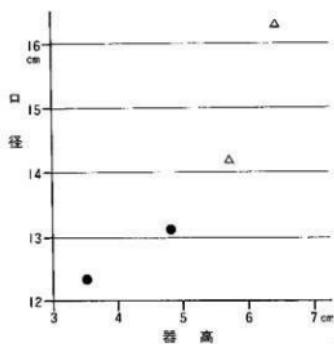
表からA I aの器高は3.5~6.4cm、口径は12.3~16.3cm、底径は4.5~6.0cm、A II aの器高は3.8~4.6cm、口径は12.2~15.0cm、底径は5.0~6.0cmの範疇にあり、これを見る限り、A I aはサンプルの少なさもあり分散傾向にあり、A II aはある程度の分布域に納まっている。

また遺構別でも器高はほぼ同じであるがRA021出土のA I a、A II aの方が口径、底径ともにやや大きいのが表から読みとれる。

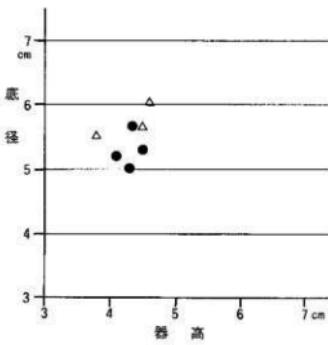
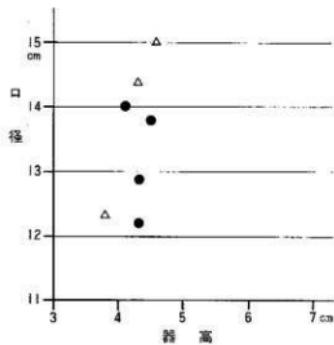
● RA020

△ RA021

〈AIIa〉



〈AIIa〉



第18図 坏形土器分布図

3. おわりに

今回の調査で小幡遺跡第10次調査区が平安時代の集落跡であることが確認された。これまでの小幡遺跡の調査のなかでも比較的新しい時期(9世紀後半～10世紀前半)に属すると思われる。また、出土遺物や建物跡(柱穴群)などから、中世～近世、現代に至るまで生活の場として断続的に利用されていたと考えられる。今後、これまで行われた小幡遺跡の発掘調査報告や周辺遺跡との比較検討によって、この地域における遺構・遺物等の変遷や時期ごとの特徴がより詳細に判明すると思われる。

〈参考・引用文献〉

岩手県企画開発室(1974)『北上川系開発地域土地分類基本調査一日誌一』

岩手県文化振興事業団(1994)『小幡第2次発掘調査報告書』

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第244集

岩手県文化振興事業団(1995)『小幡第4次発掘調査報告書』

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第265集

岩手県文化振興事業団(1998)『大宮北・本宮熊堂A遺跡発掘調査報告書』

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第281集

岩手県文化振興事業団(1999)『本宮熊堂B遺跡第5次・鬼柳A遺跡第4次発掘調査報告書』

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第308集

岩手県文化振興事業団(1998)『小幡第5次・第7次発掘調査報告書』

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第267集

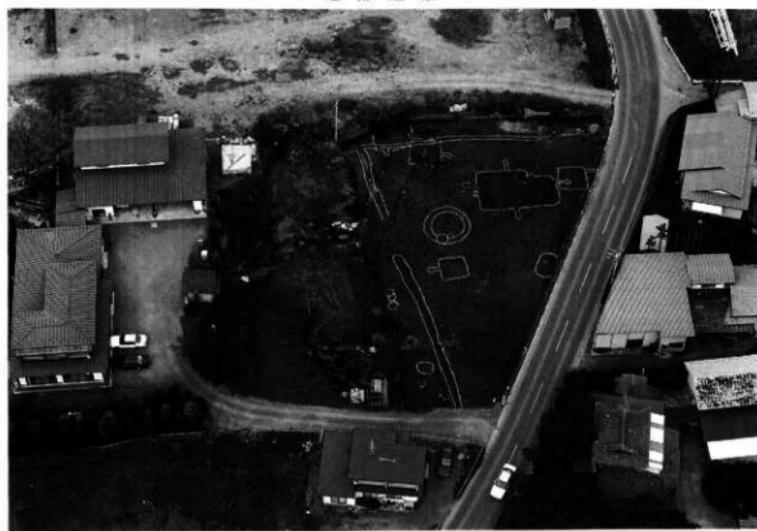
高橋信雄・小川野哲憲・熊谷常正(1982)「岩手の土器」岩手県立博物館

八木光則(1992)「古代斯波郡と爾薩体の土器様相」第18回古代城柵官 遺跡検討会

小幅遺跡第10次
写真図版



遺跡遠景



遺跡近景

写真図版1 空中写真



調査区近景



基本土層

写真図版2 遺跡近景・基本土層



RA019 (平面)



埋土断面 (N-S)



埋土断面 (W-E)

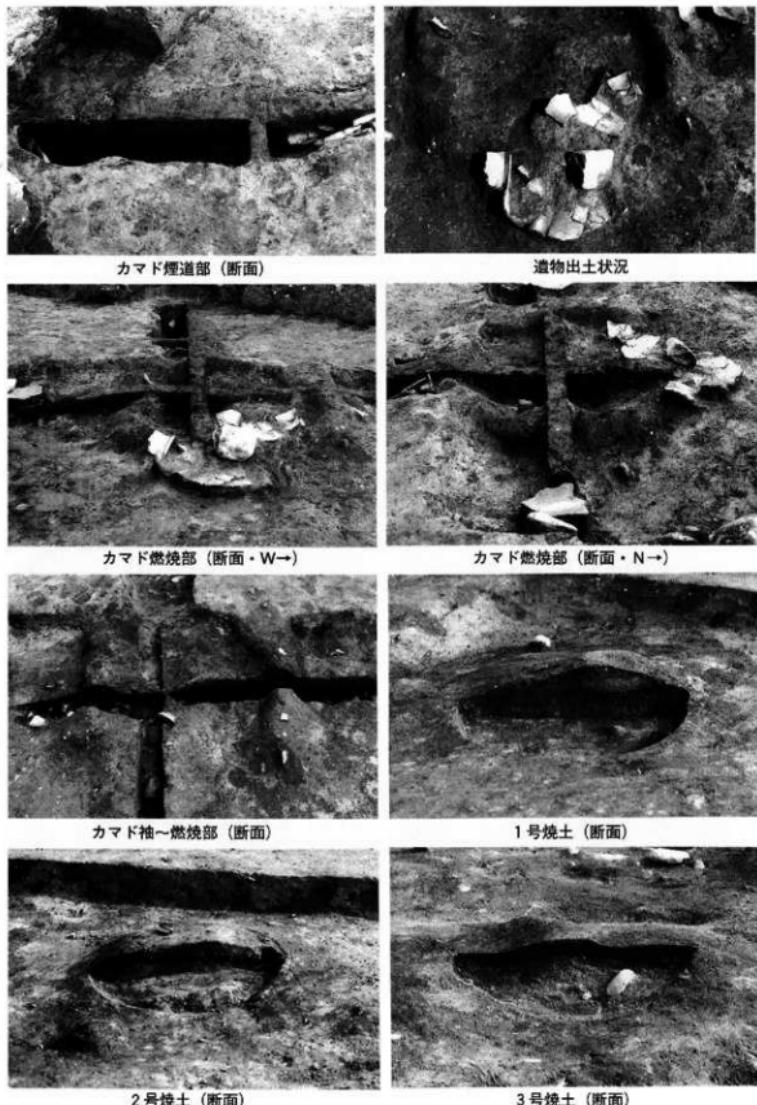


カマド (平面)



遺物出土状況

写真図版 3 RA019



写真図版 4 RA019



RA020 (平面)



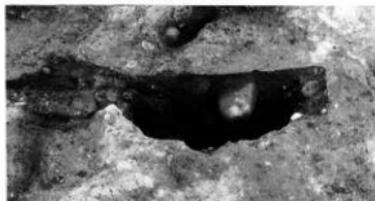
埋土断面 (N-S)



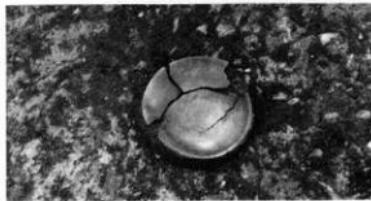
カマド (平面)



抽・燃焼部 (断面)



土坑 (断面)

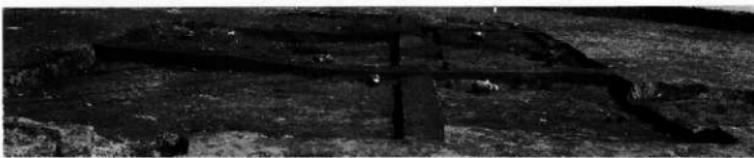


遺物出土状況

写真図版 5 RA020



RA021 (平面)



埋土断面 (N-S)



埋土断面 (W-E)



1号カマド (平面)



1号カマド袖・燃料部 (断面)

写真図版6 RA021



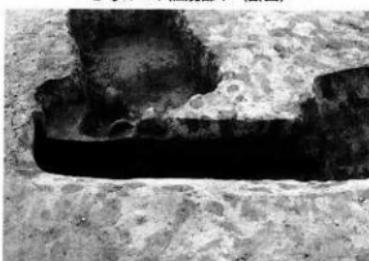
2号カマド（平面）



2号カマド燃焼部？（断面）



3号カマド（平面）



3号カマド煙道部（断面）



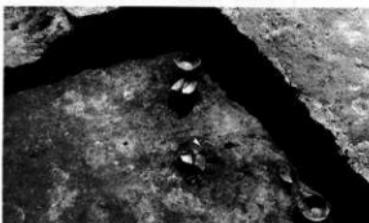
4号カマド（平面）



4号カマド煙道部（断面）



遺物出土状況



遺物出土状況

写真図版 7 RA021



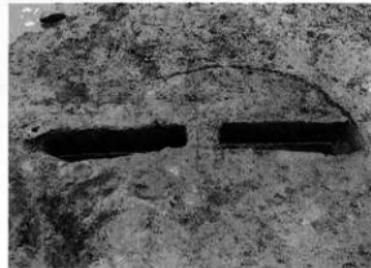
RA025 (平面)



埋土断面 (E-W)



カマド (平面)



燃焼部 (断面)

写真図版 8 RA025

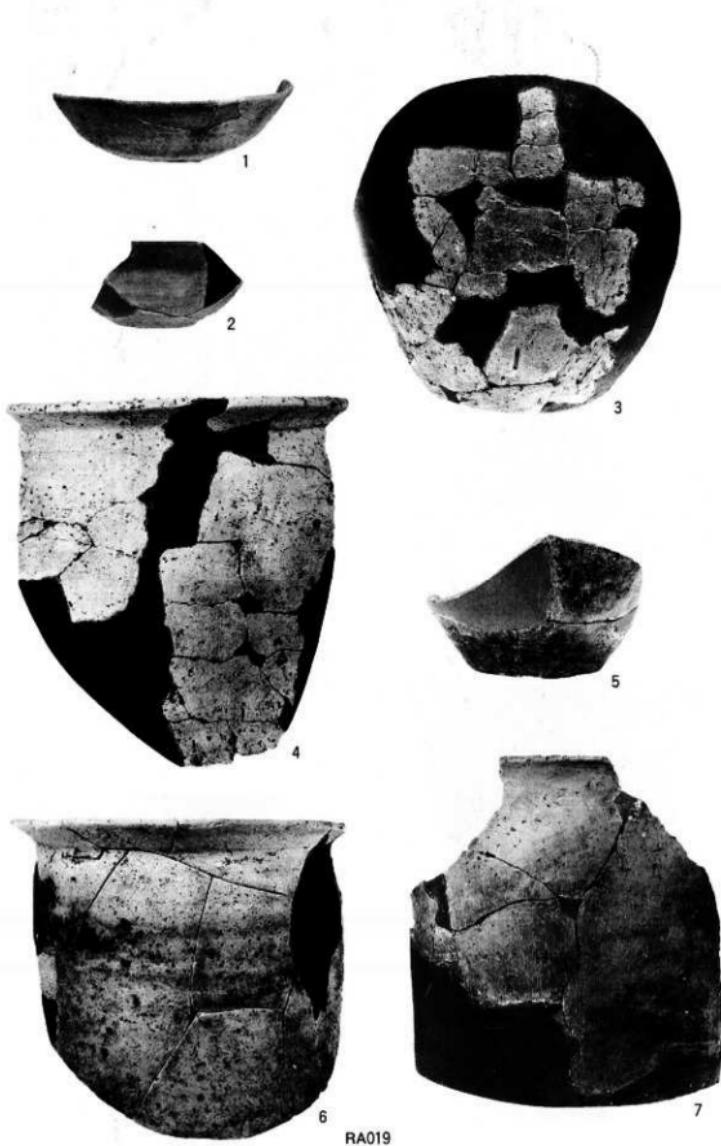


RG088 (平面)



RG088 (断面)

写真図版 9 RG088



写真図版10 遺構内出土遺物(RA019)



8



9

RA019



10



11



12



13



14



15



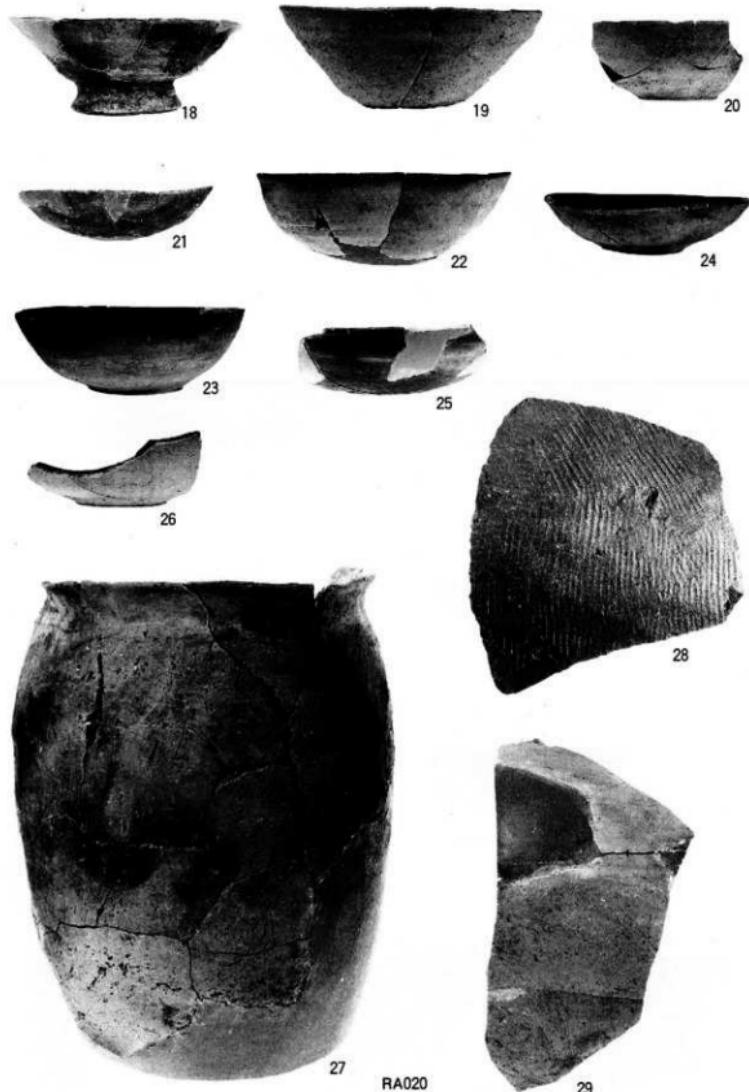
16



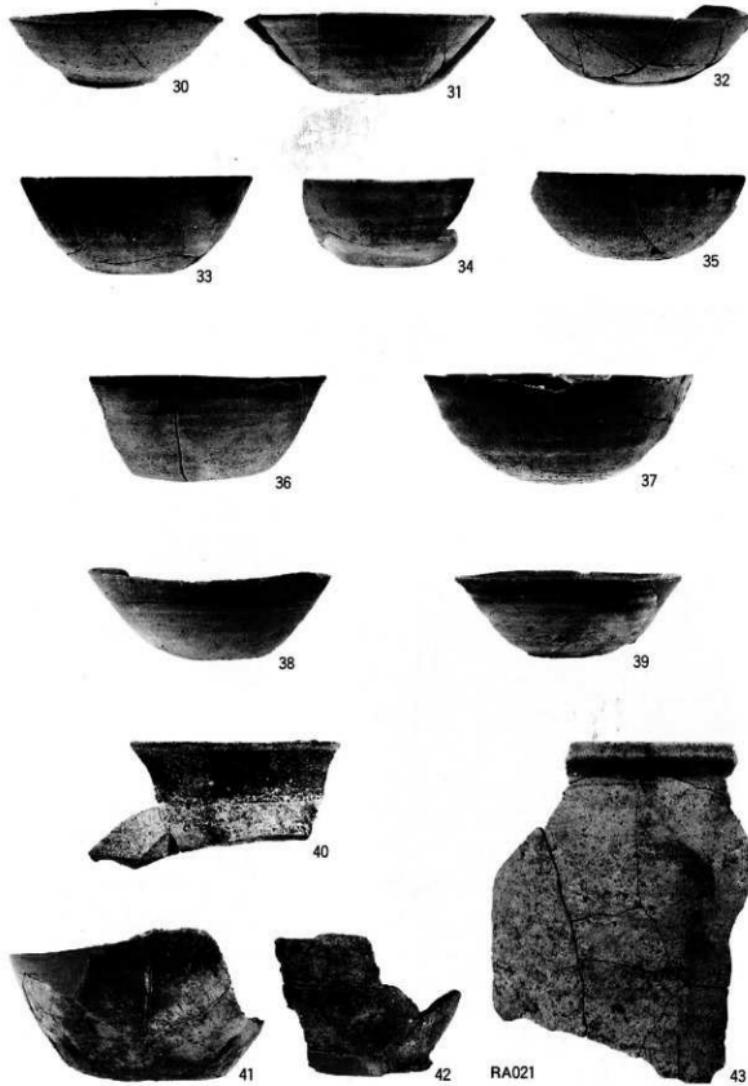
17

RA020

写真図版11 造構内出土遺物(RA019・020)



写真図版12 遺構内出土遺物(RA020)



写真図版13 造構内出土遺物(RA021)



44



45

RA025



46

RG088



49



47



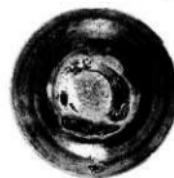
48



51



50



52



53



54



55



56



57



58



59

写真図版14 造構内(RA025・RG088)/造構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	むかいなかのだてあとだいさんじ・こはばいせきだいじゅうじはくつちょうさほうこくしょ							
書名	向中野館跡第3次・小幡遺跡第10次発掘調査報告書							
副書名	盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第338集							
編著者名	濱浩二郎							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019)-638-9001							
発行年月日	西暦2000年1月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
向中野館跡 第3次調査	岩手県盛岡市 飯岡新田2地 割124-1ほか	03201	LE26-0205	39度 40分 32秒	141度 08分 32秒	1998. 5.19~8.7	2,944m ²	「盛岡南新 都市土地区 画整理事業」 に伴う緊急 発掘調査
小幡遺跡 第10次調査	盛岡市本宮字 小幡88-1ほか	03201	LE16-2009	39度 41分 06秒	141度 07分 36秒	1998. 8.17~10.6	529m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
向中野館跡 第3次調査	集落跡 館跡	平安時代 中世	竪穴住居跡 土坑 堀跡 溝状遺構	10棟 9基 3条 5条	土師器 須恵器 陶磁器 古錢 石鐵	向中野館に伴うと思われる 壙跡を検出		
小幡遺跡 第10次調査	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 溝状遺構	4棟 1条	土師器 須恵器 陶磁器	9世紀後半~10世紀前半の 集落跡		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第338集

向中野館跡第3次・小幅遺跡第10次発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業開発遺跡発掘調査

印刷 平成12年1月21日

発行 平成12年1月28日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 盛岡市下飯岡11-185

T E L (019) 638-9001

印刷 川鶴印刷株式会社

〒029-4194 岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21

T E L (0191) 46-4161

向中野館跡堀配置図

基準点座標値

基 I X = -35,950.000 Y = +26,500.000

基 2 X = -35,950.000 Y = +26,470.000



RG 06

RG 07

RG 08

基 I

基 2

0 5 10 (m)
1:200

35.84

35.83

35.82

35.81

35.80

35.79

35.78

35.77

35.76



